



43
247

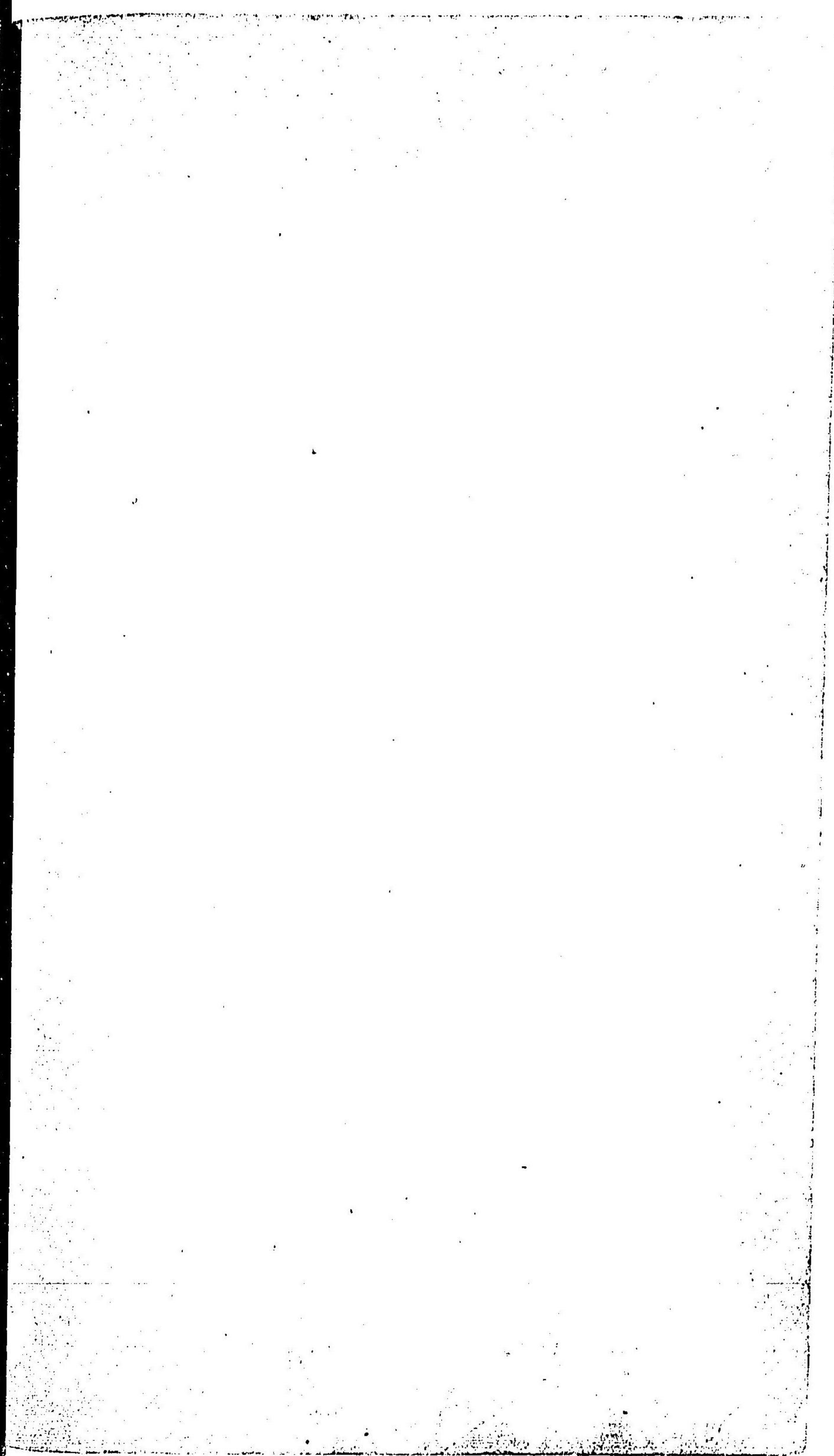
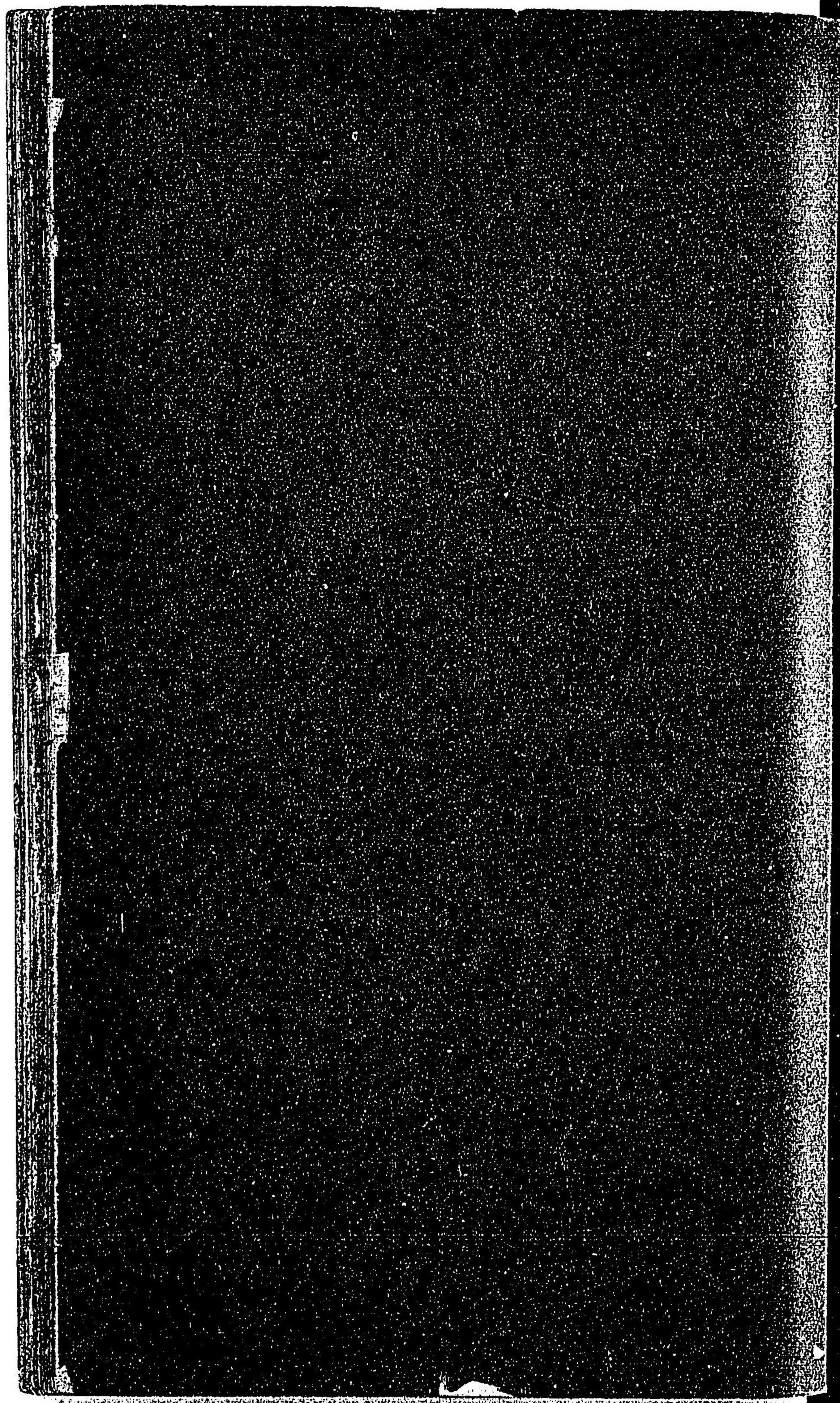
錢五拾金價正 編七拾第 発發回二月毎

著原 フルドンヘア 爵男逸獨

譯抄 人山霧田坂

の も け ま な
全

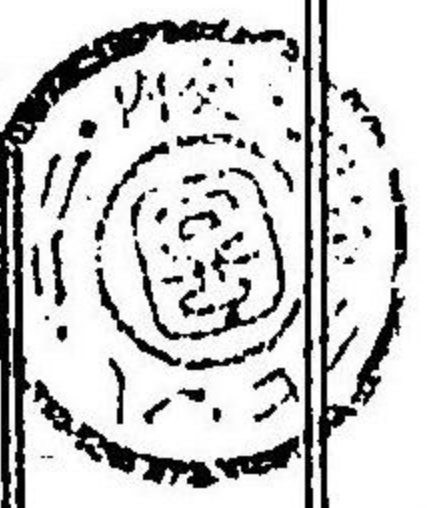
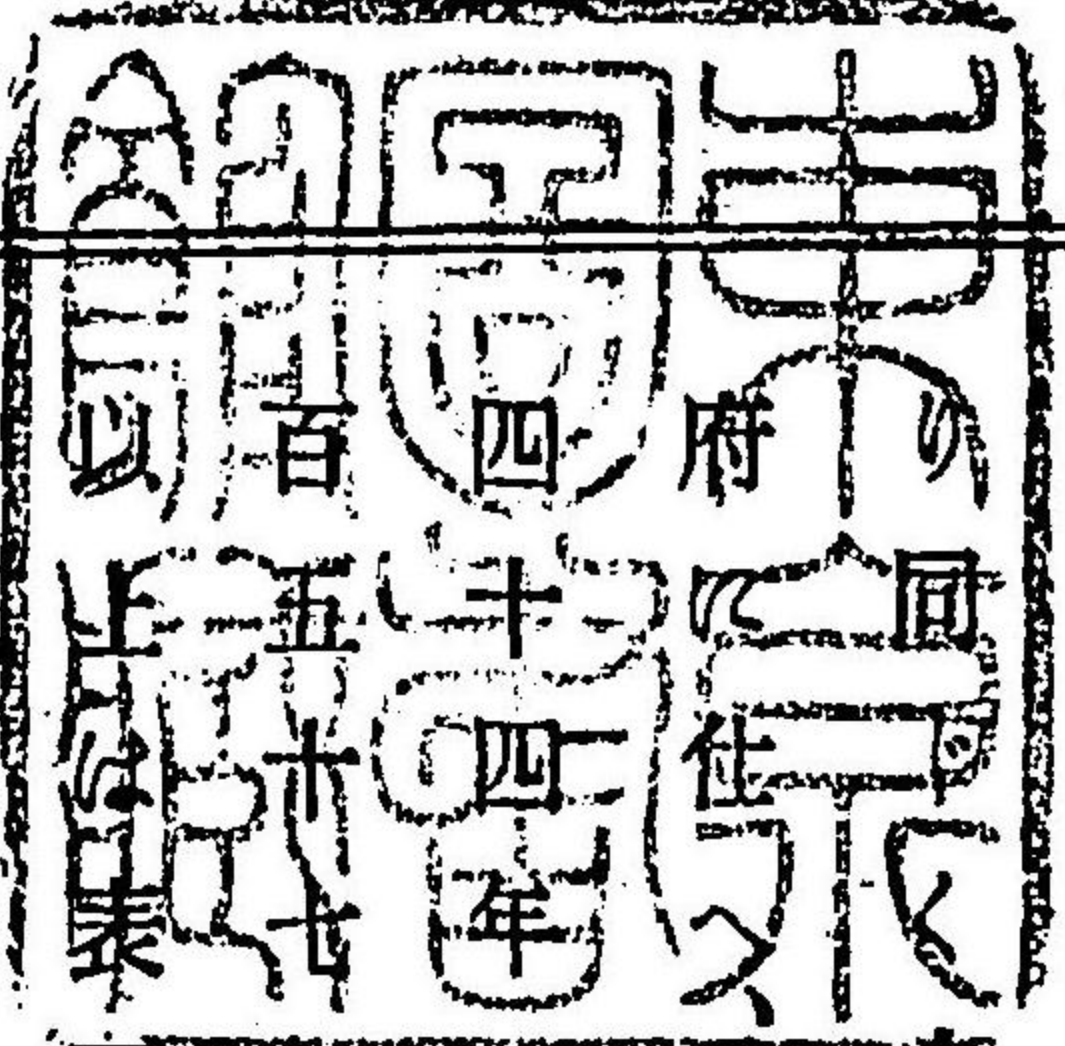
版藏館文博京東



男爵アイヘンドルッフ小傳

アイヘンドルッフは、千七百八十八年三月十日、ライプツィヒの近傍ルポウ井ツツに於て生る。千八百十三年より十五年迄軍役に従事し、千八百十六年普國政府に在り、千八百十八年十一月二十六日同處に死去す。

者なり。氏は實に十九世紀上半期中有数の詩人にして、又詩想幽邃なる小説家たり。其著す處のもの一二にして止まらずと雖も、蓋し小説中には本書(千八百二



十六年著を以て名作とす。其他氏の死後に於て公にされたる獨國詩學歴史(千八百八十一年)及詩集等、凡て今日迄に三版以上至らざるものなり。以て氏が詩才の凡からざるを知るへきなり。

なまけもの目次

一	空想	一頁
二	花環	二二
三	道案内	四三
四	置去	七二
五	古城	八〇
六	手紙	八六
七	羅馬府	九八
八	公園	一一七
九	乗合船	一四五
十	團圓	一五九

なまげもの

男 獨逸 アイヘンドルッフ原著
日本 阪田霧山人抄譯

空想

父が粉ひく臼の響、やゝ久しくさこえて、夜半に積りし屋根の雪、日影にとけて落る軒滴の音せわしく、雀は庭に群り下りて餌を争ひ、鳴立の聲かまびすしき折から、余はやう／＼床をはなれて、楊枝くはへながら椀先に立出で、はや日光にわた、まりし生温き水にて顔を洗ひ、眼はさめたれど、精神はまだ覺めさらず、茫然として庭の方を眺め居たりしに、朝まだきより臼を廻はして、一寸中休みにと家内に遣入り來りし父は、余が有様を見て左も不機嫌に。

「又しても怠惰者が、モウ何時だと思ふ。日脚があゝの榎木を越したからは、お晝に間もないに、よくも其様に寝られたものだ。己は一俵の麥をひいてしまつて、今小休みに歸つた處、親のあくせく働くを、不知顔に朝寝する不孝者奴。それも昨日や今日のか、今まで只の一度も己より前に起きて、坐敷一ッ掃いたことさへなく、何時も胡弓ばかりギョ／＼鳴らし／＼つて、それで世の

中が渡れると思ふか、我見ながら愛想もこそ盡きはてた、今日から此家に置かれぬから、何處へなりと疾々と出て行け、自分でかせいで食はねばならぬ世の苦しみを知つたら、少しは怠惰根性もなほるであらう。

父の言葉一々無理ならず。左れどわが怠惰の心は、一朝一夕になほるべくもあらず。只飄々と水にたよふ萍の如く、千海萬里の旅の空に、意のままに月日を暮し見たしとは、また我かねての希望なりしかば、父が當然の小言にあやまらんとはせず、

「ハイ私は怠惰者でござります、何時までも斯してあなたに御迷惑をかけますは、自分でも心苦しく思ひますから、御言葉にしたがひまして、これから世に出て、自分で自分の口をぬらしませしやう。」

と、答へて、直ぐにも我は出立せんと思ひしを、不用の子ながら、父は流石に名残のをしまれてか。

「貴様が身の爲めなれば、とめはせぬが、直にとては餘りに事急なり、今宵一夜を明かして、明日の朝はやく門出するがよい。」

と断て止めらるゝに詮方なく、其夜床につきしが、如何に呑氣の我心にも、年頃日なる寝ぐらになれたる伏床も此宵かぎり、明日よりは父の膝下を離れて、知らぬ旅路にまよふかと思へば、常にかは

りて心細く、ねられぬまゝに耳にきこゆる咳はらひの聲。借は父もねられぬか。

夜あくれば心細さも、想像に書かく前途のたのしみにうち消されて、勇ましく床をおき出れば、未だ日影は裏の山の絶頂ばかり。斯る早起はづかしながら、臍の緒きつて今日が初めて。これでは何なる親か愛想つかさであるべき。

世の人に門出には調度と荷物よとひしめけど、元より無一物の吾身の氣樂さは、何時を限り何處を果と知らぬ旅行なれば、別に携ふるものもなく、日ごろ手慣れし胡弓二張を肩に、いざや告別をつげんと父の前に出れば、中は若干かしらねど、饑別に渡さるゝ金包、ありがたさは親のめぐみあり。村はづれの暇にさしかれば、遠近に島たがやす村の知人、我すがたを見て鉄の手どめ、立寄りて名残を惜しむを、我も別をつげて過ぎゆく内にも、斯る片田舎に生れて、年中肥料くさき富いぢりに一生を終る人々にくらふれば、わが心ののどけさ、如何なる月日の下に生れあはせてか此幸福と、獨り悦にいらりて、勇ましく歩行をはこびたり。

左れどそのよるこびも僅の間、礎に名のみのかす關所の跡をこえゆけば、年ふりし並木の松の、梢をばらふ風の音すさしく、左右は目もはるに、荆棘隈笹生ひしけりて、往來たえたる田舎の街道、一人し行けばさすがに心細く、前へすゝむ氣もくとけて、足の運びのにふるを、斯る時こそかねて好

める胡弓をかんで、心のうさを晴さんと、肩よりとりおろして、歩きながらひき初めぬ。
自ら云ふは異きものなれど、胡弓は幼き時より好める道とて、暫時もてはなしたるをなれば、すきこそもの、上手にて、他には何一つ能なき我の、これはかりは他人より譽められ、我もまた上手と信じ居たり。

心をこめてひく胡弓の音に、梢の松風こえそひて、草葉の露はらくとあつるに、常にましてよくしたりと、我ながら心にはこりて、不圖うしろを振かへれば、何時の程よりつげたりけん、美々しくかざりたてし二頭だちの馬車一輛、徐々わか跡よりしたがり来るに、不審しく思ひながら、尙よく見れば、内には綺羅をかざりし二人の女、何れも容貌風姿あでやかに、桃櫻の色香おどらねど、年若き方はわけてけだかく、半ばはころびし蓋の花に、夜半の露のまたひぬ趣ありて、わざとさらぬ口元の愛敬は、「ヴェヌス」の神の化身かと疑はる。一目みるより余が胸はげしく波うちて、身體は並木の松にひとしく、突立しまゝ動き得でありしに、馬車は静々余はどりに近よりて、年長けし方の女、微笑ながら余に向ひ。

「さても樂しき旅のお人！ 調子と云ひ聲と云ひ、誠にお上手なとこそります。

「お譽にあづかつて耻かしき次第、が、貴女方がお聞きなされると知れば、今少しは上手にひくはつてござりましたに。

と答ふれば、女は「ホ、」と笑ひて、尙も。

「シテ、此様に早くから、いづれへお出なされませうか。

と、問ひかけたれば、之れには流石の余もギョツとして、未だ家を出たまゝ、何處へゆくとも目的なければ、何と答へてよきかと言葉つまりしかど、己が行く先きを知らぬと云はれ、折角はめられし胡弓の技量も、百日の説法となり果つべしと、口にまかせて。

「左れば……ウキーンの方へ参らうと思ひまして。

二人はこれを聞くも等しく、余には解せぬ他國の言葉にて、何やらんひそく低語き、年若き方の女の頭を右左にふるを、年長けたる方の女は笑ひながら之を制めて、聴て余に向ひ。

「妾等もウキーンの方に参るものでござりまするが、おいやでなくば此馬車の後にお乗りなされませ。

余が此時の喜悅何にかたどへん様なく、禮もそこくに急ぎ車の後にどびのれば、一瞬あてられて駆け出す馬、蹄の音車輪の響、往來たえし街道の静さを破りて、跡を砂煙にくらまし、一直線にわしり

行きぬ。

行く道には橋あり坂あり、森あり藪あり、目にいる景氣次第にかはりゆきて、聴てひろくせし野原に出れば、數知れぬ雲雀、雲井はるかに囀りて、その聲のすみ渡りてきこゆるに、我こゝろは淨きたらて、さすかに口こそ出しては叫ばねど、身體は自然にをどりて、思はず腋にはさみし胡弓を取おとしぬ。

日影はいよく高くのぼりて、見渡せば地平線に二群の黒雲わさいで、何となくむしあつく、風はおもたげに野もせの芒を吹くは、精神うつとりとして、しきりに眠氣催しぬれば、再び胡弓をおとしぬ様に、上着とちよつきの間にしかとばさみて、馬車の後にどりつき、其のまゝねむりこみたり。

やゝ程経て目をさませば、馬車は縁ふがき松の木かげに止まり、馬は、や二頭もどりはなし、内の主は何れへ行きしか、二人とも影だになし。不審く思ひながら尙よく見れば、太やかなる石造の門柱立て、それより真直に御影石の階段をたざれば、宏大なる煉瓦作の一棟、彼方には木間かくれに、ウヰーンの塔さへ見ゆるに、余は初めて一人どりのこされたるに心注ぎ、様子さかんとて、邸内さして急ぎゆきして、二階の窓より余が姿を見て笑ふものあるを見たり。

空關までは進みゆきたれど、熱々かんがふれば、案内を乞ふて誰に面會をもとむる目的もなきに、今

更さまりわるく、もぢくしなからも四邊の結構のうつくしきに見惚れて、去りも得でありしに、後より肩のほどりをつものあるに、遽て、ふりかへれば、服装立派に容貌高尙き一人の紳士後に立ち居て、何の爲めに余が此處に在るかをたつねられしかば、余はいよく恐れて、只頭をペタペタ下くのみ。其間に従者とおぼしき者、三四人追々に紳士の傍にわつまり來りしが、口には何とも云はねど、氣味わるさうに我が顔を見るに、最早居たゝれず、外の方にげ出さんと思ふ時、紳士は従者を引つれ、奥の方に遣入りしが、引さらかへて出て來りし女、後に聞けば腰元どか、我が立去らんとする後よりよひどめて。

「これ旅のお人！ 見受くる處が途方にくれて居る様子、此邸に居て庭掃除でもするなら、置いて遣らうどのと。否やか應か。

問はれしは我身の幸福、元より何處にゆかん目的もなき余、其上先のはを隠憂をさぐり見れば、よりめぐまれし金さへ、馬車の上にてくるひし時におどせしか、今は鑑一文もなき不憐のありさま、胡弓一挺を命の綱、明日よりは人の門に立ちこれと強き、切めて飢ばかりはしのがんと思ひしに、ア、世の中に鬼はなし。

「何卒よろしき様に願ひます。

頼めば腰元は奥へ這入り、此度出て来りしは、年齢五十近き男。服装よこれて土臭く、片手に花はさみ携へたるは、疑もなき庭園師。

「此方に來なされ。」

と導くまゝに従ひゆけば、中門をくぐりて庭に出て、彼方此方とつれあるくに、その廣さと美しさに精神うばれ、庭園師は道すがら、掃除の心得植木のわつかひ方など、細々と説きかされたれ。後にてかんがふれば、何を云はれしか一切夢中、只余は三度のパンにありつゝしをよるこびたるのみ。それより後は帚木手にもちて、日々庭のあなたをた掃き清むるがわが、職務にて、他にはこれと云ふ用もなく、朝夕わたゝかき食物にあき、月々のこづかひも、わが好める煙草の代と、身のまはりをみにくからぬ迄には、まづ充分事たりて、仕合せよきありさまとはなりたれど、尙此上の希望には、此家に入出入する紳士貴女たちの様に、或は思ひのまゝに終日語り暮らし、又或時はこのひろくとしたる庭内の、緑ふかき青葉の下、紅ふかき花の蔭に、睦まじく手をつらねて、逍遙するを得ば、如何に樂しからんとは、我心をはなれぬ妄想なりき。

庭に出て掃除する間にも、四邊に人なき折は、柔らかな芝原の上に長々と横たはりて、煙草の煙を輪にふきながら、どりとめもなき空想に、精神をさまよはする内には、自ら全くやんとなき貴族となり

すまして、我を此家につれ来りし、あのうつくしき姫と、只二人さしむかひ、隔なく言葉かはす内に我云ひし一言の、如何に彼が心を刺しけん、牛乳色の頬ささにパツと染め出す薄紅葉、それを余に見せしと、水紅色絹の手巾もて面を掩ひ、おもはゆ氣にうつむきし様わいらしく、さすがに我も氣の毒になりて、彼が心を慰めばやと、二人手を組みうちつれて、庭の彼方此方散歩し、望む花枝たを取りて、にはひこぼる、黒髪の一輪たをり来て、ヒンもて我胸につくる時、過つて其先にて指頭を破雪をわびく白き手に、蓋微の一輪たをり来て、ヒンもて我胸につくる時、過つて其先にて指頭を破りしに、元よりわづかのとなれど、唐紅の流れて、白き指頭赤に染むに、余は驚き「さぞ痛うござりまじやう」と、勢はりつゝ、紙もて傷處を結びやらんとすれば、頭を左右にふりて「否、貴郎の御爲なれば……これを妾の心とも御覽くたされまし」云ひつゝ、我顔を見てニコリと笑ふ姿、現然と眼に浮みて、不圖彼方をうち見れば、我空想のうちに書きし此家の姫、實際庭に立出て、余か此處に居ると知らねば、どりつくらふ様もなく、木の下花蔭をさまよひながら、好める歌の一節二節、聲すしくうたふ様、樂園にあそぶ天女の面影。之を見る余は魂いよく天外に飛びて、夢もつかず現もつかず、余が庭掃除の賤しき身分なるとは、全く忘れ果てたり。

かへりしと一度や二度に止まらず。これが亦上なき余が樂しみにて、今日も午過ぎより庭に出で、裏

手の東屋に腰かけ、例の如く様々のこと思ひついで、いよ／＼佳境にせまり、果てはうれしさの余りに、我知らず「戀人」と云へる一曲を唄ひ出して、聽て今一節にて唄ひ終らんとする時、不圖彼方を打見やれば、今を盛りと咲みたる、卯の花垣のあなただに、ナラと見えし姫の姿、借は此不始末をみられしかど、いそぎ傍の箒木とりて、四邊を掃きながら、横目に姫の方を伺へば、別に余が身に眼をどひるにてもなく、やかて母家の方に踵をめぐらして、姿は木影に見えずなりぬ。

平常なれば心樂しき土曜日の夕刻なれど、今日は晝間の怠惰を此家の姫に見られたれば、今にも其罪を責められて、此家を逐ひ拂はれ、明日は又よるべなき捨小舟、如處を當と定めもつかで、人のたもとにすかる、果敢なき身の上となるとかと思へば、流石に氣にかゝりて、日影まつたく山かけに落ちて、物の文色見えわかぬ黄昏時になりたれど、燈火つけむ力もなく、獨り窓に靠れて、遙に庭の方を眺めてありしに、不圖木間かくれに動く人影、次第に此方に近づきて、聽て余が都屋の窓の下に止まりぬ。借はいよ／＼今日の怠惰を責めんとて、余を呼びに來りし使者よと思へば、俄に心恐ろしくなりて、其儘身をちりめて障まり居れば、頻りに余が名を呼び立てるに、今は詮方なく、斯と心に極はめて返事をすれば。

「家に居ながら何時まで返事なされませぬ。これはお姫様よりの下賜物、此宵は土曜日のことなれば、

心置なく頂戴してゆるりと休むがよいとのと。

と云ひ捨て、白布かけたる盆を渡し、元來し道へひきかへせしは、何時も姫のそば去らぬ秘藏の腰元。余は今更夢の如く、うれしさに精神をとりて、受取りし盆の白布をどりのくれば、未だ見しとどへなき三種の料理に、色すきとほる葡萄酒一本。理由は知らねど、斯くまで厚く姫の志、百万の寶より余にはありがたく感せられて、先刻の愛戀はかき消す様に失せ、幾度となく推いたしき、舌敷うちて食ひ終り、酒もうまさまゝに、半分を飲みつくしたり。

酒は好きなれど、多くは飲めぬ余なるに、半壇の美酒をかたむけ盡したるとなれば、充分に酔ははりて、心面白くうき立ち、姫のありがたき賜物に、先刻の愛戀は喜悅と變はりて、未だ一度も、此程の愉快と精神に覺えたるをわらド。見渡せば月も出て、木間漏る光青く、葉末に置く露の、そよ吸く夕風に散もせで、さら／＼と動く様、得も云はれぬ庭の眺望。聽て壁にかけある胡弓を取おろし、窓のはどりに立出て、酒に赤くなりし面を涼風に吹せながら、一曲二曲と弾き行きて、余が講れる「美人の歌」は、大方皆うたひ盡して、それとなく姫が此宵の賜物に報ひぬ。

空見上れば、月は已に中天にのぼりて、四邊寂として聲なく、夜も甚く更けたらん様子、余も今はつかれたれば、イヤ臥床に就かんと胡弓をおさむれば、雲井はるかに一聲なく杜鵑、未だ望むか余が曲

何日も他人より覺されでは目さめぬ身の、翌日は如何にしけん、昨夜胡弓に夜更せしにも係はらず、漸く東の空白み渡りし頃、はや眼さえて、如何に工夫するも再び眠られねば、やがて床を離れて、湧きさぐる噴水の流れにて顔を洗ひ、例の如く巻煙草を口にくはへて、庭に出れば、咲みたれたる花の臺に置く露の色さまじく、百鳥は朝日影を背にうけて、彼方此方の木梢に、聲面白く囀り舞ひ、噴水の流れ落む込む池の中には、魚の躍る音潑刺たり。余は意にまかせて、右に折れ左に曲り、築山の後方池の周圍、或は芝原の上立木の下。さすがに廣き庭も大方まはり盡して、松並木の細道を真直に、奥庭の方に來れば、此處は此家の姫が住居する坐敷の前なり。窓の下に枝葉しげりし灌木の植込みと、りふかく、一基の石塔籠苦むして、合歡木のもとに立つ彼方には、蓋後の花今を盛りと咲みだれて、獨り庭の色を添へぬ。何氣なしに姫か部屋の方を見れば、窓の戸は左右に開け放し、硝子ごしの窓かけさへ片方へしぼりて、珠玉をちりばめたる寢臺の上に、未だ眠さめぬ姫がねすがた。たゞは雨を帯びたる芙蓉の風情。房々としたる黒髪の、先ばかりを白リボンにて結び、惜氣もさく枕の周圍に束ね、雪をぬきむく白絹の被布をもれて、かすかに見ゆる胸の邊。一目見る余が心は、全く胸裡よりぬけ出て、恍惚としてや、暫くたゝすみ居たりしが、俄然に鳴りひびく鈴の音、思はず身震ひして音す

る方を見れば、姫が枕元に仕掛ある目覺し時計、余はこれを見て落ちのきたれど、姫はやがて身うちさして目をひらき、愛らしき口に欠伸一つもらして、靜に寢臺をみるゝに、余が姿みつげられては「大事と思へば、急ぎ青葉の茂みに身をかくしぬ、姫は薄紅梅の寝衣のまゝ、窓のはどりに立寄りて、硝子戸を開け放し、未ださめさぬ眼に庭の景氣を眺めて、暫時は余念なかりしが、やがて思ひ出じたる様に、窓にならべある鉢植の朝顔の、昨夜の露に咲き出でたる花の色に目をつけ、寢衣の袖をまくりあげて、白さ二の腕まであらはに、萎み果てし昨朝の古花と、黄ばみ初めし枯葉とを一を取りすて、七寶燒の水さしを片手に持ちて、鉢ごと水に注ぎ初めぬ。初めは余が目につかさりしが、見ればうらやましき花の果報、露をまつ間の暫時の命、はかなき例にひかる、身の上も、世にならひなき美人か、あさなくの眺めに惜しまれ、斯まで手づから厚さ介抱うけなば、たゞ夕暮をまたで萎めはどて、なご心殘のあるべき、嗚呼うらやましきはあの朝顔の花ぞかし。事終りしか、姫はそのまゝ、部屋を立出て、彼方に行くに、余も此間にと音せぬ様に茂みを出で、何知らぬ顔色にて余が部屋へ歸りしが、心そはくとして何事も手につかず、身にある憂愁は、此時より一切忘れ果て、世界のあらゆる喜悅を一時に我身にあつめたらん如く、只譯なく喜び勇みて、其後は余が朝寝のくせ果とやみ、毎朝時をたがへず早く起きいで、奥庭の茂みに蹲り居るを、知る者はた

えて無りき。

かゝると凡そ一週間ばかり、今日も赤例の如く、藪かけにひそみ伺へば、姫は時をたがへず起きいで、窓の下に立寄り、植木鉢に水をくぐ、寝衣のまゝの取つくるはぬねみだれ姿を、余は瞬きもせず見惚れて居たりしに、何處より飛び來りしか藪蚊一匹、スーと吸呼を内にひく途端に、鼻の穴に舞ひこみぬ。心地わるさに急ぎ逐ひ出さんとすれば、蚊はいよ／＼と遠て、奥の方に這入り、思はず出る隙。ハッと驚きて姫の方を見れば、姫も如何で今の一驚を聞かざらん、怪現な顔色にて余が方を見つめられど、幸に青葉しげく生ひ重なりたれば、全身は向ふより見すかされざりしかど、腕と脛のあたりは、確にみどめられたるを覺し。これにはさすがの余も赤面して、今更出るにもでられず、進退谷まりて、いよ／＼身をちりめ、結果如何にも氣遣はしくうづくまり居れば、姫は最早あやしめる色もなく、通常如く水を注ぎ終りて、彼方へ出で行きたるに、漸く毒蛇の口をのがれたる心地して、ホッと吐息つき、再び襦袢の出ぬ間に、急ぎ其處を逃げ出しが、熟々思へば、姫がいよ／＼余が姿を認めたらんには、何どか聲をたて、叱るか、左なくば人を呼びたて、余を捕へしめて理由をたいたすべきに、常に變るとなく彼方へ出で行きしは、余が姿の眼に這入らざりしか。併しあれ程によく此方を見つめ居たりしからは、よもや見えざりしはづはなからん、見て知らぬふりの彼が慈悲か、知らぬ振して今に

酷くわたる彼が工夫か、何れとも分別つかで、其日は半信半疑にて暮しぬ。

其の翌日も例の如く早くは起き出たれど、昨日の失策に懲り、且つは今にも祟りの來んかと、勇氣くじけて奥庭の邊へもよりつかざりしが、四五日経れども何の沙汰もなきに、又々心うき立ちて、或日のと以前の如く藪かけに忍ばんと、奥庭の方に至りしに無残や窓の戸かたく鎖ざして、其人のありや無しや、外よりは影だに見えず。其次の日も又次の日も、何日伺ふても窓は鎖して、元より其姿の目に遮ぎるとさへなし。

終には余もあくみ果て、朝起のたのしみも盡き、再び元の朝寝坊とならんとせしが、不圖思ひ出したるは、何時ぞや掃除の間を怠りて、東屋の下に歌うたひ居たりしを見られし時も、叱ると思ひの外、其夜はかへつて懇切き待遇。又他人に見らるゝを厭ふ寝亂れ姿を、余が藪かけに忍びて垣間見しを知りても、一言だに小まご云はぬは、何處までも余を嫌ふと思はれず、若しや娘心に、しどげなき姿を余に見られて愧かし、他室へ部屋をうつせしにこそと。それよりはまさかあの時の申辭に、箒木片手に持ちて、家の周囲をぐるりとまはりて、窓を一々伺へど、嘗て再び姫の姿を見たとなし。然るに姫の他に、往々窓に倚りて、庭の朝景色を眺むる一人の貴女、姫よりは少し年上の様にて、やゝ太り肉なれど、色あくまで白き顔の頬と目元に、薄く櫻色を散らし、容貌高尙く舉動靜肅に、

何れ劣らぬ菖蒲杜若、未だ一度も見受けしとなき女なれど、定めて此家のゆかりの人ならんぞ、遇ふ
 たびに丁寧な禮をすれば、彼方も笑をよみみて、静に禮を返すに、余は其懇切なるを感ずたり。
 此外には只僅に一度、垂れこめたる窓かけの隙間より、姫らしき姿をナラと見たるのみ。左れこれ
 が果して姫なりしや否やは、はなはだ臆氣なげ。

その、ちは別に變れるともなく、晝間は土奥の植木屋の群に交りて、庭の掃除樹木の手いれ、面白か
 らぬ仕事に日を暮したりしが、或る日曜日のこと、此家の人々は朝またきより、晴着美々しく着かざり
 て、何れへか出行き、残る者は勝手はたらく下女一人と余とのみ。午過ぎよりは精神一層すはれて、
 情なきまで心細く感したれば、イヤとて庭に立ち出て、例の如く煙草ふかしながら、彼方此方さま
 よ以歩行けと、少しも心晴れず。四邊静なれば、遠く町の方に當りて面白く響く樂隊の音、喧噪の聲。
 世の愉快を思ふにつけ、余が身の果なきに心平らかならず、行くともなしに池のはどりに來りて、青
 々と茂りし岸邊の蘆の中を、五位階の如くノソリノソリ。
 不圖見れば岸に繫きし一艘の小舟。切めてのこころやりに、之に乗りて遊ばんと、綱ひき解きて一推
 おせば、苦もなく岸を離れて池中に出るを、棹もて程よき處までこき出し、舟の逝くにまかせ置き、
 余は船端に腰うちかけて、四方の景色を眺むるに、池は左まで深からねど、水清く底見えて、周圍に

茂る立木の影さかさまにうつりて、木梢に動く小鳥の形まで明らかに見られ、遙の彼方には岩石可怪
 しくさづき上たる間より、瀧の色白く流れ落ちて、折々風に破られて、パツと飛散る玉霰。遠く見
 渡せば、雲に入る山出る山、夕日をうけて或は赤く或は紫。遠近の風色余が精神を慰めて、や、愉快
 を覺えたれば、初めて平常の余にかへりて、節面白くうたひ出るれば、池の魚も浮み出て、瀧も聲々
 の響をおさめて、余か歌を聞くもの、如く、四邊寂として、ひとり清み渡る余か聲、いよ、興にの
 りて後をつがんとすれば、ホーンとひびく暮鐘の聲に、うたひ出る腰を折られて、見かへれば日影ま
 つたく落ちて、夕煙屋の棟に立のぼり、暮鳥三五わたの森に急ぐ頃なれば、舟を元の處にかへして、
 陸に上らんとする時、庭の方に當りて、人の話し聲笑ひ聲、次第に近づくまゝに、果ては赤き装、白
 き襟、黒き袖、鼠の帽子、眞紅の鳥毛など、木間がくれにナラホラ見えて、聽て松並木の細道を、此方
 にさゝめきつゝ來るは、何れもうつくしく着飾りたる、男女の一連にて、此家の姫と余が平常も挨拶
 する年上の貴女も、其中に加はり居るに、余は遠に胸をどりて、急ぎ舟をつなきて立去らんとすれば、
 一人の紳士は逸早く余が姿を認めて。
 「これ、道げすともよい……一同向の岸へ渡らうと思ふ處だ、其方舟おして呉れ。
 呼びかけられて逃げもならず、傍に扣え居れば、女たちは恐く舟端をふむを、男手をひきてたすけ

のするに、或は笑ひ或は叫び、や、暫くをよみわたりて、池の面風なきに小波立ちぬ。一同のこりなく乗うつりて、思ひくりに坐を占めたる後、余も飛びのり水挿をとりて、静に推出せば、前と異なりて人数多く、漸くのとなにて中程までうかべ出でしに、一人の年若き男立あがりて、女達のさはぐが面白さに、態と舟をゆすぶれば、ア〜と驚き叫ぶ中に、例の貴女は船端にもたれて、手に持ちたる姫百合の花に水を吸はせ、他のさはぐを可笑しげに、微笑みながら、池の面に姿うつして、他愛なき様、得も云はれぬ趣あり。此と、今一人は此家の姫。先つ此二人が、舟の中の花、何れ劣らぬ色香なれど、溢るゝばかりの愛敬と、何時も丁寧なる挨拶とは、甚しく我心を刺戟して、空想にまで書きてこがれし、姫に對する我が想は、今は稍年長けたる貴女の方にうつりゆきて、彼がためには苦を厭はトと思へば、此が爲めには命も惜からぬまでに。

人々は互に細語き合ひ、又は笑ひさいめきて、面白げに打興するを、余は何事も知らず顔に、舟を推しゆくに、例の貴女は、不圖思ひ出したる如く、余をよひかけて歌へど望む、傍より此家の姫も口を添へて是非にも云へば、他の人もども〜に、中にも年若き紳士は、別けて熱心に。

『よくぞ氣がついた、かね〜噂はきいて、何時かはと思ふて居たに、此上もない好機會、舟頭は私がつとめる程に、サア早く〜。』

云ひつゝ、隠蓑より狭目鏡とり出し、いそがはしく鼻にかけて立上り、余が持てる水筆をうばふ様に取りわけ、

『サア〜』

と、静に肩をたたくて促すに、今はのがるゝ道なく、歌はんどは心を決したれど。如何がよさや。あれかこれかと心惑ふて、傍に空堀、コップなどをいれたる手籠ざけて居る腰元に向ひ、四邊にさこえぬ様に。

『何様な歌かお氣にいらうか』

と、相談すれば、余が心も知らず、態と圖抜けたる大聲にて。

『お得意の「うつくしい女」の歌がようござりませう』

様子知りて云ひしか、知らで云ひしかは明かならねど、此一言は余が胸にヒンとこたえて、思はず赤らむ顔を見られしと低頭くに、貴女はそれとも覺らぬもの、如く、腰元の言葉に同意して、微笑みながら。

『得意どころはその歌を……』

と、云ふ尾につらて、水筆持てる紳士はいと眞面目に、

「美人をのせたる舟の上にて」「うつくしい女」の歌とは、此上もなきよきとりのわけせ、それく是非ともそれを。

餘りうちわけ過ぎたる一言に、人々ドツと笑ふ。これにつりこまれて、余も思はず笑顔になり、以前のはづかしき思ひも去りて、何時も歌ひなれたる「うつくしい女」の一曲を、心をこめて唄ひぬ。今迄よめき渡りし舟の中、遽かに静まりて、只響くものは我聲のみ。紳士は時々我顔を見つめては耳を欲て、姫は池の上を眺めて、一意に余が歌を聞き、其他一人として、謹しみ聴かぬはなけれど、中にも貴女はうつひきて、膝の上に細き手をのせ、指にて余が歌の調子とるまでに、熱心にさゝ居たり。其間に舟は向の岸につき、皆舟より下りる時、唯一人余に禮云ふものなきに、例の親切なる貴女のみは、軽く頭を下けて。

「御苦勞様！」

と、云ひしが、他を憚りてか、音調は至て低かりしかど、余には千鐘の一時に鳴るが如くきこえて、心の底まで響き渡りぬ。

一人取残されし余は、只茫然として去も得せず、人々の去り行く後姿を見送り居たりしに、紳士は姫に何やらん低語りて笑ふさへ氣にかゝるに、果ては立止まりて、我うたひし歌の口真似し、身ぶりさ

へ似せて、一層聲高に笑へば、他の人々も此方振かへり、余が立てるを見て、ヒソ／＼笑ふは、云はずと知れし余が歌のうはさ。諸は眞面目に聞かれしにはあらで、笑ひの種になりしかと思へば、今更はずかしくも亦くやしく、其儘倒れる様に、舟の中に打伏しぬ。

(二) 花環

此邸の裏手の堀の外は、ウヰーンの方に辿る街道にて、其向側にさゝやかなから赤煉瓦にて築き、美麗なる收税吏の住居たてり。聞けば此邸の主人が支配する領地の、秋の收穫をとりたつる者の住む處どか、此處に住みて其役をつとめし老爺、取る年波にまきこまれて、四五日以前にうたかたの泡ど消へ失せて、妻もなく子もなかりし獨身者の、後は住む人なくてありき。

或朝未だ床に在りて、曉の夢を惜しむ頃、余が枕元に立ちてゆり起す者あり。眠たき眼をおほる氣に開きて見れば、何時も機嫌よき劇輕者の門番。

『何時までねて居る、貴様見た様な怠惰者は、此處へ置くとは出来ぬから、今日かぎり暇を出すに依て、一寸執事殿の處まで来いとの事じゃ。』

『エッそれは眞實のとか。』

と、眠氣全く覺めて、思はず起きあかれば、門番は落付き拂つて、

『ナニ嘘ぢや。』

『此奴め！ 戯談なら好加減にせい、他の事は違ふて、此家を逐出されるまで来ては、明日から一丈なしの乞食ぢや、如何に香氣な乃公でも、ちつとは腹にこたへるわい、益もないことで可惜夢を破られた。』

と、余は全く怒りて、再び夜具うち被りて眠らんとすれば、門番は腹を抱えて笑ひながら、片手に余が被らんとする夜具の襟を捉へて。

『左様怒らない！ 暇が出るは嘘ぢやが、執事の處まで来いは眞實ぢや。成程おどかしたのは乃公が悪かつたが、少し臆でも潰させぬと、貴様見た様な寝坊は、容易に目がおめまいと思ふたからぢや、サア眼がさめたら早く行け！ 愚圖くして居ると、それこそお眼玉だぞ。』
『行くには行くが、貴様が彼の様な延喜でもないことを云ふた故、氣にかゝつてならぬ、如何様な

事件か、一寸教えて呉れ。

『乃公にさかなくとも、向ふに行て見れば確に分る。』

『ダガ、氣休めに一寸聞かして呉れ。』

『實は乃公もよく知らぬが、天氣の模様か考へると、悪いとではなからうぢや。』

『エ、まだ馬鹿に仕居る。』

とは云ふたれど、心にはそれを力らに、急き口すゞき。着物を改めて、門番と共に執事の詰所へ急ぎぬ。

玄關脇の執事部屋に這入れば、門番は一人先きに進みて、斜机の上に厚き帳面繰りひろげて、頻りに何やらん記入し居る執事の傍に寄り、余を連れ来りしとを告ぐれば、執事はペンを下に置きて、此方に居直る間に、門番は余をさし招きて、執事と向合せに一脚の椅子をあてがふ。其様何となく嚴然しく、心懸してモザ／＼する余を、執事は目鏡をじにじろりと一睨して。

『其方は字は讀めるか』

思ひ寄らぬ間に、余はあわて、何の思慮にも及ばず。

『ハイ』

と、云ひし儘頭を下れば、執事は己が言葉の當れるを喜ぶもの、如く、高からぬ鼻をいよくうごめかして、

「左様である、處で外のとでもないが、知つての通、先日上納とり立の役人が死んで、其後かなくて困て居る處に、幸ひ其方が別にこれと云ふ仕事もなくて遊んで居るから、其事をつとめさせるがよいとの、主人の命令ぢや、別に六ヶ敷仕事でもないが、相役はこれだから、門番を指さし、

「よく相談して順序をおぼえるがよい、今に此方から書付と帳面を渡すから、それとよく引合せて間違のない様に、支配内の上納を取立てるまでの事ぢや。就ては今日から向ふの煉瓦造に住むがよい、家財道具一式、其方に譲り渡すから。

己が云ふとだけ云へば、それで用はないと云ふ風にて、執事は直に机に向ひ、再び帳面を繰りて余念なし。余は煙に巻かれて、何と答ふべき文句も出ぬを、傍より門番にせき立てられて余義なく外の方に出でぬ。

道すから門番は余が濟まぬ顔色を見て。

「相棒！ 何を其様にふざいで居る。

「乃公には逆でも出来まいと思ふて。

と、眞實心配して答ふれば、門番は例の調子にて、四邊構はぬ大笑ひ。

「ハッ、ハッ、ハッ、心配も事による。凡そ世の中に此程樂な割の好い仕事はない、實は老爺が死んだを幸ひ、乃公が獨占をしやうかと思ふたが、一人の姪がハッ、ハッ、と、云ひかけて、急に頭を左右により。

否、何、めつたな奴ならいやだけれど、貴様だから半口仕事を分けるのよ。

翌日直ちに煉瓦作の家に移轉るととなりて、元より無一物の余、別に運ぶ荷物とてもなく、胡弓一挺を携へて、其家に至れば、人の住すなりしは僅の間なれば、また以前の主が奇麗好なりし證據残りて、部屋／＼とまで不潔ならず。納戸の方に這入りて見れば、いろ／＼の遺品残しある内にも、未だ袖を通せしとなきと思はる、赤き寝衣、同ト色の寝帽子と、他に奇麗に縫箔したる上靴と、長さパイプは、殊に余が氣に入りて、此上もなくうれしかりき。

小さけれども今は一家の主人とありすまし、月々の手當も以前より遙に増して、萬事に事欠ぬのみか、

心かけ一ツにては相應に貯も出来る程になり、それかどて別に忙しきともなく、只折々門番と共に、其處此處支配の中を見まはるのみにて、仕事の多分は門番が引受けて、余は只副役の形。成程此様な樂な割の好い仕事は、世に又とあるまじとの、門番の言葉は嘘ならず。

左れば何時も氣に入りたる赤色の寝衣を着て、好な煙草ふかしながら街道に向ひし窓に倚り、往來する種々の人を眺むるが余が樂しみ。此處は余か村よりウヰリンの町に通ふ道筋なれば、稀には余が怠惰を悔りて、相手にせざりし村の知人も通りしが、去る時は態どすまして、咳拂ひ二ツ三ツすれば、それに氣づきて此方を見上れど、見忘れしか、只怪現な顔色して行過くるのみ。併しこれにて余は満足して、古昔悔られし耻辱の敵今ぞ充分とりたりと思ひて、意氣揚々たり。

斯く不自由なく、氣樂に暮す身になりては、別に望むべきことはなきはづなれど、只一ツ以前の庭掃除の境遇の戀しきは、うつくしき貴女等の顔の見られぬと。

住居の裏に二十坪程の畠ありて、それに馬鈴薯、キャベツなど、種々の野菜植ありしを、一々抜去り、其跡に四時の草花を植え込みて、朝夕面倒を厭はず、丹誠をこらして養ひそだてし甲斐ありて、其頃になれば、千紫万紅咲き亂れて、左ながら錦の席を布けるが如く、余が住居には過ぎたる花壇。これを貴女等に見せたらば」とは、花に對する毎に、我胸に浮ぶ感情なりき。

別に異はれるともなく、其日くを樂しく暮す内に、花壇の花はいよく咲き出て、獨り我目を喜はするに過ぎざれば、いよく堪え兼ねて、或日午後より、今を盛りと咲き揃ふ花の、殊に優れてうつくしきものを切りとり、閑にあかして繋ぎ合せ、處々に青葉を交へて、美事なる一箇の花環をつくり上げぬ。日脚を見れば、ハヤ山かげにかくれたれど、名殘雲にのこりて、西の空あかければ、未だ時早しと、其間に夕餉など食べ終りて、煙草くゆらしつゝ、廣からぬ庭なれど、數回あちこち歩行くらちに、日全く暮れつゝ、今は人顔見えぬまでになりしかば、時こそ來りぬと、聽て作り置きたる花環を大切に抱え、我家を立出で、主邸の塀際に立寄り、其處か此處と見廻せば、萬かづら邸内より生ひ茂りて、塀にまつはりつき、其先の長く此方へ垂れたるありしかば、これを屈強の足場と、それに取つきてよぢのぼる間にも、花環は破はさぬ様に、後生大事に持ちて、輕うして邸内に乗り込めば元より勝手知つたる庭の細道、迷はず辿りて前庭に出で、縁深き常盤木の下に据えある、平たき野石の上に、携へ來りし花環を乗せおき、急ぎ元來し道に引かへし、以前の如く塀を乗りこえて、余か家に歸りぬ。

翌日の正午頃、様子見ばやど、主邸の裏門より這入りて、臺所口まで至りしが、用もなきに有樂に庭には這入りかねて、覺束なくも女中等の談話に氣をつけ、それとなじに様子をさぐりしかど、別に其

樽もなし。借はいただ人の氣につかであるかと思ふ折、今まで庭の掃除して、正午食べに來りし植木師、これは余が此處に來りし時よりの知人にて、何時もめぐらしきとある時は、問はぬに語る豆口男なるに、それすら花環のことに就きては、只の一言も云はぬに、元より此方よりは云ひ出しかねて、其儘家に歸りぬ。

午後よりは、又花壇の花を切りとりて、花環を造り、日の暮るゝをまらて昨夕の如く、塀を乗りこえて石の傍に至り見るに、昨夜の花環は全く影なきに、心ひそかに喜び、携へ來りし新らしき花環を其處に置きて、急ぎ歸り去りぬ。

其翌晩も又翌晩も、少しの大小はあれど、何時も殊にうつろしき花のみを撰りて、同じ形の花環を作りて、時刻をたかへず持行くに、必ず前夜の花環は無くなりて、形も形もなきは、誰か持ち去るに相違なければ、やゝ余が目的を達するに似て、心大にうらみ立ちたれど、果して思ふ人の手にふるゝや否やは、かゝれ知れず。

今日も日影ハヤ沈みかゝりて、遠近の山々は霞を帯び、黒く色どりし森の間を、うねくと流るゝ川ナウ河の水白く清める上を、通ふ船の帆、夕日をうけて赤し。余は門前に床几すえて徐ろに吹さ來る夕風に、浴後のはてりをぞまじして、厭かぬ景色にこゝろ慰むる折から、犬を集むる吹角の響、遙か

に晩鐘の後に續いて聞ゆるに。扱は何人がこゝろやりの山獵かと思ひしかど、それには別段氣も止めず、早く日の暮れて、花輪を持ち行く時刻の近よるをまらてありしに、はからず訪ひ來る例の門番。打悪しとは思へど、逐ひ歸すとも出來ねば、よき程に挨拶するを、門番はそれとも知らねば、相も變らず口に任せて、滑稽けたる浮世話。心閑なる折ならば、余も面白く聞さし話しもすべきなれど、他に云はれぬ企圖の胸にあれば、自然と外に現はれて、應對の言葉のはかしくしからぬを、果は門番も悟りてか、可怪氣に余が顔を見つめて、

「何處ぞ加減か悪いか、

「否や

とは答へたれど、今はいよいよ時刻近づきて、身もよもあらぬ思ひ、少しも早く門番の去り行けよかして、心ひそかに念するのみ。門番は尙いろく話しかくれど、どかく余が浮き立たぬ様を見て、面白からずと思ひどしか、床几より立ち上りながら、両手に欠伸をさしあけて、

「主公等が山獵から歸るに間もあるせう、ドレ行かう……、
と、獨言の様に云ひつゝ、又余に向ひ、

「閑かあつたらちと話しに來ひ、其様にふさいでばかり居ては、出來る戀も出來はじなう。

初めは眞面目に、終は半ば笑ふて云ひはなつ言葉。余はギョツとして身震し、顔忽ち火の様にほてり出して、其まゝうつむくと、門番は見むきもせず、悠然として立去りぬ。

門番なりとて天眼通はもたされば、他に云はぬ余が心中の秘密を知るはずはなけれど、今の一言は眞正面に余が胸をつらぬきて、何處までも偶然に云ひし言葉とは思はれず、不審に堪えかねて、種々にかんがふれど、容易にその原因をさとり得ず。何時も花環を持ち行くべき時の、はや遙かに過ぎぬるに、今は心急かれて、又知るべき時節のあらんと思ひ直し、晝のはど美事につくり上げて、大切に仕舞ひし花環を取り出し、例の如く扉を越えて持ち行きぬ。

昨夜の花は持ち去られて、今宵の花まらわび顔なる石の面の傍近く立ちよりて、花環を置かんとする時、庭内の松並木の細道を、此方に近よる馬蹄の音。余が窺見られては一大事と急ぎ傍らの藪かげにひそみ、静に様子を伺ふ間に、いよく此方に近よりて、颯と例の花環置く石の傍に來り、ハタと手綱をひきて馬を止め、彼方此方すかし見るに、余は氣味わるく思ひなからずも、如何なる人かどうか、ひ見れば、アラビヤ種の太く逞しき白馬に跨りて、紺色の獵服を褌ながくひきたる婦人なるに、ハツと思ふて先づをどる胸をおさへ、折から雲間を離る、宵月の光りに、尙睛を定めてよく見れば、果して日頃こひしと思ふ貴女、剩へ余か昨夜持ち來りし花環を、胸のはどりにつけ居るに、今はうれし

さに前後を忘れて、藪かげより飛んで出で、貴女の近くにかげよりて、

『この花環も差上げます。お望みであれば未だ如何程でも私の庭に今を盛りと咲てをります。何時も持つて参りました花環は、貴女様のお手にふれましたか……ア、それで私のこころさ

しも……

喜悅に精神半は狂ふて、言葉取次に云ひ放てば、貴女は不思議さうに、やゝ暫らく余が顔を見つめてありしが、其時又さこゆる馬蹄の音。貴女は一言も云はず、急ぎふか捧けたる花環をうけてとりて、馬を進めて彼方の小道を曲り、程なく姿は木影に見えずなりぬ。

歸りて後は、只そはくとして、余ながら可笑しきまでに心うき立ち、寝るも覺むるも、思ひは常に貴女の上に在りて、他の仕事は元より手につかねど、花環をつくることのみは怠らず、反つて一層精神をこめて、及ぶだけうつくしく飾りて携え行きぬ。

其夜は別にかはりたるとなく、前夜は手渡しせしかば、空しき石の上に新らしき花環を置きて歸りしが、其翌夜。昨夜の花は、彼のうつくしき貴女の手にひろはれて、今日一日の眺めを惜しまれつらん、作り主の余にささる花の果報、いでこの花環も貴女が情の露にうるほはせんと、勇みて例の石の傍に近寄れば、不思議や昨夜の花はそのまゝに、あれ程までうつくしかりし色の、見るかけもなく姿

れはて、其上に宵の露のかゝりたるは、實にや思ふ人の手に觸れぬ、悲しみの涙とも見えて、花と共に余も萎れはて、そのまゝ其處にうつぶし、忍び音に果敢なき身の上を悲しみしが、不圖思ひみれば、情も思ふよ。縦令ひ今宵一度この花環の残りたりとて、今日は去りかたき用事ありて、此處まで來る間なくて、思ひながら其儘に捨置きしやも知れぬに、左まで悲しむにも當らしと、漸く思ひ直して、その傍に漸らしき花環を置きて歸りぬ。

左れも其望は全く空しく其翌晩も亦翌晩も。今は萎れたる花環の五ツ六ツ。

これにて余か心は全く挫け果て、今は花環を手入するもいやになりて、雑艸の生ひ茂るに任せ、役目の上納の勘定などは、猶更ものうく、風に翔らるゝ絲瓜の如く、只ツラリ〜と其口をくらすのみ。其他には朝早く起き出し折〜に、或は四邊の村々をめぐりあるきて、麥の穂の重た氣に、そよよ朝風に吹かれて、黄金の波をたつるを眺め、或は又程近き町に出て、未だ人通少き巷〜に、郵便馬車の客を集むる喇叭の聲をきゝなせして、いさゝか憂をさぐらむるよすがとせしが、斯るものを見るにつけても、何時までか此の様に、物憂月日の下に、心を苦しめて住み果つべき、世は廣し、してやこれより心に従ひ足に任せて、旅地の空に暮さんかとの望は、又此時よりを起りぬ。

* * * * *

彼や此やに思ひ亂れて、今日も心面白からず、午後よりは寢臺の上になりて、寝るでもなく起きるてもなく、身體を横に、兩肘に腮を持たせて、何の目的もなく、空行く雲をなかも居る折から、窓下にて余か名を呼ぶに、誰かと見れば、主郎につかはるゝ腰元。何の用にて珍らしくも、余か家に來つることよと思ふ間もなく。

『皆様が昨夜旅からお歸りになつて、』

と、云ふを聞くや、余は夢中になりて、腰元の後を云はんとするをもまたず、

『エッそれではあの御方も御姫様も御一所にッ、』

と、急ぎ込んで早口に云ふ余が顔を、腰元は不審氣に眺めしが、やがてニコリと笑ふて、

『何事も御存しないの？ それは又をかしなと……殿様はしめ皆様御一所に、やう〜昨夜お歸りになりました。』

此一言は、我が身にどりて、早魘にしをれたる苗の、一雨サツと降りそゞきたるに、忽ちいさかへりたる如く、勇む心の自然と面に現はるへさを、腰元は知るや知らずや、尙言葉をつぎて、

『それで妾か参りした用と云ふは今夜御邸で舞踏會をおひらきになつて、其餘奥にお茶番があるつもり。就ては奥てもいろ〜御趣向があつて、それに澤山の花か入用であるに、お庭の花は皆取

つくしたれど、未だそれでは不足ゆえ、此方の花壇にある花の、美麗さうのを切りとりて、此宵九時頃に、大儀ながらお庭の梨木の下まで持つて来てくだされとのと。

「お茶番の催しとは面白いお慰み、シテそれに花がそれ程迄に澤山御入用とは？」

「花賣に………何人が。」

「お當てなさりませ。」

「お姫様ッ。」

「否。」

「奥様ッ。」

「否。」

「お女中方ッ。」

「否。」

「無論殿様ではあるまいが、何様であらう。」

と、首をひねれば、腰元は次第々々に笑を帯ひて、

「分りませぬか。」

「何うも外には。」

「お前様のお好きなお方。」

大方それとは推したれど、いよいよ余に情ある貴女と知りては、心狂ふまでにうれしく、思はず感より飛び下るれば、腰元は驚きとび退きながら、余が姿を見て、

「アレマア可笑しな着物、

と、手を拍て笑ふに氣がつき、余が姿を顧みるに例の赤色の寝衣を、どろ／＼引きずりて、思はずをどり出たれば、成程腰元の笑ふも無理ならず。常ならば穴に這入たさまでには耻べさ余の、喜悅にうかされ居る折からとて、かへつて笑はるゝがうれしく、

「其様に笑ふと、斯うして上げるぞ、

と、云ひつゝ、飛ひかゝつて頬をすはんとすれば、腰元は速て／＼ふりほきき、彼方此方に逃げまどふを、尙も捕へんとて逐廻はす中、寝衣の裳に兩脚からまりて、ハツタリ倒るゝ間に、腰元は遙かに遁けのびて、姿は見えずなりたれど、笑ひ聲はあは聞えたり。

起きあがりても、未だ半ばは酔へるが如く。つら／＼思へば、過る日山嶺の歸りを見ゆるに、ゆくり

あく出合ふて、花環を手渡して、うれしやと思ふ甲斐もなく、其翌日より、心をこめし花環の、置
 きしまゝに萎み果るに。扱は彼の折の余が振舞の、狂氣じみたるを氣疎く思ふて。其後は手に觸れぬ
 か、左りとばつれなし。戀に亂ればこそ心も狂すれ。斯くまでに思ふ余が眞實の通せぬとは、情知ら
 すの女ど恨みしに、思ふ人は昨日まで旅地に在りしを、留守とも知らず持ち行きし余こそ愚なりき。
 再び歸る春の心地。いでや、君か爲めに、若菜ならぬ花を折りて、余か眞心を示さんと思ふ折から、初め
 て氣づく今迄の怠り、一時の怒りに花壇の手入も物憂く、雑艸の生ひ茂るまゝに置きしかば、如何あ
 らんと心配ひつゝ、急ぎ花籠と鉢を用意して、花壇に至り見るに、以前とは異なりて、名も知れぬ雜
 艸の、花壇の地は知れぬ迄に蔓延りぬれど、さすがに前に大切にそだてし名残はのこりて、花は未だ主
 人の恩愛を忘れず、きれいに咲き出でたるもあれば、其中の殊に優れてうつくしきものゝみを撰り、
 切りとりて花籠に充たしぬ。
 待つ身に時間の一層ながく、遂に定めの時までは堪えられず、少し早けれど花籠をよけて家を出で、
 今夜は塀をこゆるまでもなく、横柄に表門より這入れば、人は一人も居ず、庭に通ふ中門の扉、左右
 に開らざるに、折よしと其處より這入りて、廣げれを勝手知つたる庭内、迷ふことなく、木間くを
 くいり抜けて、颯と例の池の邊に出れば、ありしにかはらぬ水の面に、鶯鳥の二三羽眠れる様面白く、

暫く眺めて在る中に、何時ぞや此處にて、彼の貴女に乞はれて、舟おせしとなど胸に浮びて、今更の
 様になつかしく、容易に立も得去らぬ折から、遽に湧き出る音樂の響。耳を清ませば「ワルツ」の曲
 なり。
 足をはやめて廣庭の方に至れば、晝よりわかるる三階の舞踏室の、感を漏れくる電氣燈のひかり、青
 く木の葉にかゝりやきて、凄まじきまでにうつくしく、玲瓏とひびく樂の音は、晴れ渡る空にきらめく星も、
 ために落ちぬへく思はれぬ。

自然と調子に乗る余が足をはこびて、約束せし梨木の傍に近寄るに、此處はや、間隔たり居れば、電氣
 の光りは届かねど眞正面に當りぬれば、返てよく見らるれぬ、左れど二階のとなれば、只踊る人の頭は
 かりなるにもどかしく、良き工夫もがなと思ひつゝ、不圖梨木を見れば梢も余り密ならで、程よき足場
 さへあるに、來る人をまつ間ど、急ぎよち登りて、花籠は大切に木梢の枝にかけ置き、遮る木の葉
 をかき分けて、二階の舞踏室を見れば、今ど舞踏の最中にて、年若き貴女たち、胸の邊あらはに、華
 美なる衣服まどふて、禮服着たる紳士と手をかはし、節細かに奏づる樂の音につれて、或は離れ、或
 は遇ひ、或は抱き、或は背きて、離へる裳裾かるく、躍る足調子面白し。髪の眞珠、指の金剛石は、
 動きたびに、電氣のひかりに反射りてまばゆく、實に天上の樂しみを、假りに此處にうつしたるに外

ならず。

隣りもせで見てあるに、群れ躍る貴女等の、中にも一際優れて、現はせし首筋の色白く、身には黒色の衣服着て、胸の邊りに薔薇の一輪をさし、足の調子さへ殊に巧に、金毛織の飾り美々しき軍服着たる男ど、樂しげにを遊ぶるを。侘もうちやましまよ。尙よく見れば、これを紛れもなき例のなつかしき貴女なるに、余が心は妙にどいろきて、顔は忽ち火の様にほてり、思はず左の手につかみ居たる小枝を、ポッキと引き折りぬ。

程なく音楽の響きやめば、今迄をせりし人々も別れ行きて、跡は静かに、其處此處に二三人つゝ立ならびて、何事か話し會ふのみ、余が心も次第に静穩になりて、顔も常に復しぬ。

今かくと待つ内に、彼方の藪かげに音して、此方へ来る人影。豫て待ち設けたるとなれど、今更の様に胸はげしく動氣うちて、身體自然とぢぢむ様に思ふうちに、はや木の下に來りし人を、こはく見るに、扱も可笑じや、似ても似つかぬ人違ひの、六十近き老婆

「エッ人を馬鹿に……」

と、口の中にてつぶやけは、

「オ、熱つや」

と、獨言云ふて過ぎ行く。

聽て又奥庭の方より、何事か低語さ合ひつゝ、人の來るけはひ。此度こそと思ふ間に、余が登り居る木の下に止まりしは、果して例の貴女と、晝の程余が元まで使に來りし腰元なり。貴女は古代の花賣る女が着たりしと云ふ、處々に花を縫ひつけたる衣服着て、片手にうつくしき花籠を下げ、其裝束につける假面を以て、頻りに胸の邊りをあふぎながら、腰元に向ひ、

「前の程あまり烈しく躍つた故か、何うも熱いと……、それにしても頼んだ花を持って來て呉れさうなものだに。」

「あれほど申して置きましたからは、よもや違へるとは御座りますまい。」

「何ぞ云ふてたのもで置たか」

「貴女の仰言りつけの様に、呉れくも頼みました。若しやあの人のと、遠に參りて、待ち勞びれて、其處邊の藪かげに轉寢して居るのでは御座りませうか、一寸さがして見ませう。」

と、云ひつゝ、其處邊をさがしはるに、

「否や、此處に」

と、名のり出でんとしたれど、餘り滑稽けすぎたる余が身の置き處に耻ぢて、今更下るにも下られず、

暫らく様子を伺ふ中に、又湧き出る音楽の響き、腰元いよいよ急はしく、四邊の藪なかなと探せど、木の上に居る余が姿の、如何で藪中にあるべき、容易に見當らぬ様子を見て、貴女は言葉少し角立ち

『モ一措てお呉れ。花は不足なれど、今は仕方がない。はや初まる音楽の合圖、手間とりて事後れ

ど、云ひ捨て、彼方へ急ぎ行く。後に余は茫然。

如何にのび上りて望み、小枝かき分けて眺むれど、今度は窓口に人々立ふさがりて、部屋の様子は少しも見えず。只折く起る拍子の響に、笑ひどよめく聲の交りて、耳を貫くのみ。

斯るこや、暫くの間にて、其聲もやみぬれば、後は又静に、舞踏室には人の影もなし。聴て右手の二階より、此方へ突出したる露臺に通ふ戸開きぬ。其處にも電氣の光どよめきて、あきらかに見らるゝに、現はれ出でたる二人の影、一人は雪より白き衣服すしげに着たる女、一人はさらやかなる軍服

着たる男。これぞ前の程一所に隔りし、例の貴女と軍人なり。二人は打解けたる様子にて此方を背にして欄干にもたれ、何事かまきりに語り合ひ、折々は樂しげに笑ふ中に、男は手を延ばして貴女の肩にかけ、口を耳の邊にさしよせて、何やらん耳語く様子、貴女

は其手を拂はんとはせで、耻かしげにうつむくを、男は尚すり寄つて、静に頬の邊に接吻しぬ。

これを見る余は、全身の血の一時に頭上にのほりたらん如く、首より上のみ熱くはてり、手足次第に震へて、踏む枝握る梢の露、風なきにハラ／＼と落ちぬ。

夜も次第に更けて、窓々の戸堅く鎖され、電燈の漏る、路たえ、四邊寂として星影のみ物すごくひかり、彼方の木の間に鳥の二聲三聲鳴くさへ哀れなるに、遠寺の鐘たえ／＼に響きて、いよいよ心細き頃になりぬれど、尙木梢を去りも得せで、胸に浮ふ種々の感情

『ア、思へば愚なりき、只余に優さしかりし言葉につけ上り、一圖にそれと思ひとりて、益なきことに苦しみ悩み、左もなきことに喜び躍り、自ら狂はする心の駒、余が身はあるが中にも何一つ取得なき怠惰者、親にさへ愛想つかされて、世に家さへなき様なるに、彼は槐門の榮華にはこりて、容貌さへ優にすぐれ、文の道もまた暗からずと聞けば、實にや秋の月の圓さに等しく、毫厘も欠けたる處なき、當世の貴女。朝夕まじはる少年才子の中には、余にも劣らず心を悩まして、手折たしと思ふも少かるまじ。現に彼の士官などは、外の見る目もねたましきまで、貴女の方にて、萬更つれなき素振を見せぬ様子。斯る親しき男あるに、如何に思へばとて、我戀の協ふへきはづはなく、左なくとも余か身と比らべては、提灯に釣鐘の、逆ても話にならぬ身分、言葉づか

以親切に、素振の丁寧なるは、彼の貴女の性質、強ち余にはかりにするにてもあるまじ。若し又余ばかりにするならば、余に氣をもませんと、惡酒落。首尾好く其術にかゝりて、今日が日まで氣をもみぬきしを、他は知らしと思ひしに、門番を始め、腰元にまでからかはれしを思へば、疾く昔人の知り居て、翔りて弄ばんとするに極まりぬ。

なほいろく思ひ廻はして、左ながら余が腦裡は掻きむしられたらん如く亂れ、暫く茫然として幹にもたれて居る折から、明鳥の二三羽、時を離れて鳴き立つるに、頭を上げて見渡せば、東の空白く、横雲たなびきて、夜は全く明けぬ。

夜半の賑かなりしに引かへて、家の窓固くどろして静に、露臺の上は露にぬれてさびしく、マニラ煙草の白き灰と吸壳に、昨夜の名残のこりぬ。朝風涼しく庭の面を吹きて、梢の露を拂ふに眼覺めてか、今は小鳥も樂しげに囀りて、聞き馴れし瀧の音、花環置し石の上、ありし古昔に變らねど、昨日に變りて面白からぬ余が心。

遠く山々緑深く、近くの家々には煙立ち初めて、兩岸に植え並べたる葡萄園の、中をうねくと流る、ドナウ河に、架け渡したる橋を、早立の郵便馬車通り過ぎて、後は又静に、間もなく川下より上る漁船、白く水を割て行きつゝ、漁笛一聲、永く山彦に響きて、朝の静けさを破りぬ。

これにて再び萌す旅の望み。いでキこれより足にまかせ、心に任せて、空行く雲の如くに逍遙はんど、立上りしが、不圖心にうかふうつくしき姫の寢姿、優しき貴女の顔。次第に膝をれて、又杖に腰かけしが、丁度目先にかゝる昨夜の花籠、心をこめて手折りし花の、夜半の露にうるはふて、慕みもせで其まゝなるに、之を見ると等しく、顔忽ち赫と赤くなりて、右手を延ばしてこれを握むや否や、勢ひ強く投げつゝれば、花は四方に散亂して、梨木の梢に五氣の花を咲かせぬ。

斯くて急ぎ梢より下り、木の間をくゞりて中門に至るに、昨夜の噪きに勞れはて、か、誰一人起き出たる者なく、僥倖よしと内より戸を開き、人にも見られず、難なく家に立戻り、壁にかけある胡弓を取りて肩にかけ、他には何一ツ取らず、机の上に廣げある收税の帳簿さへ其儘に、漂然として我家を立ち出てたり。

(三) 道案内

人の話しに、世界の樂園と聞く伊太利に、是非一度杖を引かんとは、余か豫ねての望なりしかば、家を出るや歩を南に向けて、應てドナウの橋も越え、足に任せて急ぎぬ。

左れを伊太利に行く可き道を知らねば、心細くも大凡の考を當てに或は人に尋ねて、野を越へ山を越えてたどり行きしに、懸て道筋幾何にも分れて、蜘蛛の巣の様に亂れたる辻に出たりしかば、何れの道を歩みてよきや更に分らず。尋ねんも四邊に人影なければ、途方に暮れて、傍の捨石に腰うちかけ、過去未來のとなど胸に浮びて、今更の様に心淋しく、獨り惘然として、前途の路を眺むれば、何れも少くとも目も遙に、緑深き剎原の中を、遠く山の上まで導きぬ。ますく心迷ふて、詮方もなき折から、此方の小路を、杖にすがりて來かゝる老人、身に昔形の銀の扣鈕つけたる禮服をつけ、聖書をかた手に携へたるは、此傍に住む百姓にて、今日の日曜日を守らんと、近き寺院に通ふ者と知られぬ。余は地獄でシリストに會ひしよりもうれしく、急ぎ立上りて、丁寧に頭を下げ。

「卒爾ながら、少しお尋ね致します、伊太利の方には何の道を參りますか。」

老人は立止まりて、左なきだに張り出だしたる下唇を上唇にて一層推し出し、頭を左右に傾けて、頻りに考へ居たりしが、良暫くまでども何の答もなければ、偕は余の問を解せぬか、百姓には矢張百姓らしきことを以て尋ねばやと。

「橙の産地なる伊太利には、何の道を參りますか。」

「何に、私が貴公の橙を何かしたッ………其様とは知りませぬ。」

左も不機嫌の體にて、後は口の中にてブツ／＼云ひながら、彼方へ行き去りぬ。

余ながら餘程氣を利かしたる積にて、伊太利は橙の産地と聞けば、百姓には百姓らしく、それにゆかりのとを加へて尋ねしに、取てもつかぬ意外の答に、余は暫時あされたりしが、思へば余が最初の言葉を考えてありしかば、意味の分らぬにてはあく、聞えざりしが爲めにて、二度目の間に斯る答をなせしは、問を聞き違へしにて、彼は正しく聳者なる可し。

之にて最早尋ねべき方便を失ひぬ。再び村に歸りて、なつかしき父の元に住ひ、親しき友と共に暮して、氣遣ひなく世を送らんか、又は煉瓦作の家に歸り、収税吏の役をとりて、不自由なく生活せんか、左れと世界の歴史に委しき門番が、何時も余に話せしには。

「凡そ伊太利程天より恵まれたる國は、又と世界にあるまじく、日向に寝て居れば、干葡萄が上より落ち、自ら口に道入りて、食物に事欠くとなく、松吹く風自然と樂の音を聞かせて、人は生れながらにして、習はざるに振り妙に躍る、實に樂園とは伊太利のどこかし」

ど、斯までに樂しき伊太利、古郷もいやなり、煉瓦作の家もいやなり、是非とも伊太利の方にど、決心しては矢も楯も堪らず、今は何の道と撰ぶの猶豫もなく、丁度足の向ひし道を、一散に驅出しぬ。行くと半里にもなりぬらんと思ふ頃、道の右側に年古りたる樹木、枝密に生ひ茂りて、下は青疊の如

く、朝鮮芝奇麗に刈り込みたる庭あり。未明よりの歩行に、身體ヤ、勞れを覺えし折れば、暫時休息せばやど、垣根をくぐりて中に這入り、艸原の上に坐りて、不圖上を見上れば、杖重たげに累々ど、林檎の實今を食時に熟し居たるに、腹もや、物欲しき折からと云ひ、四邊を見るに人もなければ、二ツ三ツもぎどり、舌うちして食ひ終り、其處に倒れて仰向に、蒼天を眺むれば、隈なく晴れ渡りし雲井に、雲雀高く鳴き渡りて、木間もれ来る風、冷しく面を吹き、遠き山寺の、日曜日を報らす鐘の聲、静けき野面に霞みて、心何となく閑かに、頻りに眠氣を催しぬ。

折からかすかに馬蹄の音に交りて聞ゆる車輪の響、次第に此方へ近よるを見れば、實に美々しく塗り立てし、一輛の馬車の、御車臺の上には、高き童子の帽子を被りし御者。如何なる人の乗り居るかど、尙よく見れば、御者は疑もなき彼の門番、中に乗り居る主人は例の貴女。ハッと思ふて、余は急ぎ木蔭にかくるれば、馬車は程なく余が休み居たりし艸原の前に止まり、兩人は直に下りて、門番が、

「何でも此處に違ひござりませぬ。」

と、云へば貴女は心配らしき顔つきにて、

「見失ふては残念ゆえ、何卒早く見つけてお呉れ。」

「御心配なされますな、大丈夫でござります。」

と、云ひつゝ、彼方此方を探し歩行くに、余はいよゝゝ氣味悪く、身を縮めてひとみ居る内、門番は次第に此方に足を向け、終に余が隠れ居る木立の前に來りしかば、今は堪らず逃げ出さんとするを、門番は透さず右手を延ばして余が腕を捕え、

「居りました〜。」

と、呼はりながら、もがく余が腕を確と握り、引ずる様にして馬車の前に連れゆき、戸を開きて中に推し込みぬ。貴女は以前より中に在りて、余が這入り來りしを見て、喜ばしげに坐を分けて、

「サア、此處へおかけ。」

余はもぢ〜として、尙も屈腰り居れば、貴女はもぞかしくや、余が手をとりて、少しぢれる様に、

「エ、モ、何を其様に遠慮する。」

と、無理に引起して、己が傍にすはらせ、

「何故ことばりもなく家をにげ出したか。私かいやになつたのか、それとも別に譯があるのか、サア其譯をさ〜まじやう。」

今は余も度胸すはりしか、何時の如く心も亂れず、

「ハイ別にこれと云ふ譯もござりませんが、我が思ふ御方が、他の人に情ふかさ仕打を、傍に居て

見るがつらいから、失望の餘りに家を出ました。

『その怨みは此方より云はねばならぬ。何時ぞや舞踏會の夜半、其方の情こもる花がもらいたいばかりに、心にもない滑稽な服装に身をやつして、茶番の組に這入つたに、あれ程たのみ置た花は持て来て呉れず、心のはりもぬけて、いつそのと止めやうかとは思ふたけれど、客の手前もあればそれもならず、進まぬながらも、務めるとはつとめられたと、何れ程本意なかつたか、少しは察して呉れたとて、其程罪にもなるまい……』

『それはお人が違ひまじやう。貴女が左様などを仰言るのは、脊のすらりとした、髭の多い軍服をつけた、劔をさした御方。知るまいとお思ひなされましても、蛇の道は蛇とやら。心に思ひ絶ゆる間のない者の目には、遠から見えて居りますよ。』

『ホ、ハ、これはしたり。成程おの方は妾にいろ／＼云はる／＼けれど、何云ふものか心に染まぬを、向では五月蠅つけまひして、過る夜も人なき折に、露臺に連れ行きて、種々に口説れたが、それを見てその様に云ふの知らぬが、此方には露程も左様な心はないに、恨みがましく云ふ其方の心が、反て私には恨めしう。』

『餘り左様でもござりますます。』

『其方もまた疑ひ深い。これ程云ふても気が解けすば。これを見て御覽。』

ど、指さす貴女の胸を見れば、眞白なる着物の上に、今迄目につかざりし花輪。何時ぞや余が手つから渡せしまゝに、花の色萎みも果てぬを結びつけ居るに、余は驚きて、

『それを如何して今日まで。』

ど、問へば

『左れば。何時ぞや其方にもらつたを、枯らしてはならぬと、心のかきり大切に、水を注ぎ函におさめ置き、今日取り出して見れば、これ此様に萎みもせず、色の少しも變らぬは、丁度妾が心ど同トと。』

ど、少し涙くみて、余が膝にうつ伏しぬ。今は余も心解けて、貴女の背を撫でつゝ、言葉をかけて慰めんど、不圖頭を上ぐれば、馬車の中に在りし身の、何時の間にか主郎の東屋の中にて、余が有りし時に變らず、例の梨木さへ其儘立ちぬ。門番の御者は、四邊を見廻はせど、何れへ行きしか影もなし。扱は氣を利かして外せしならん。今は返て心安く、

『左様な御心とも知らず、彼是申しましたは私のわやまり。許してくださります。』

『それではアノ心が晴れたか、オ、うれし……』
 と、云ひつゝ、喜ばしげにニコリと笑ふて、貴女の方より余が肩に手をまはして、接吻せんとする折から傍の藪中より突然躍り出る例の士官。怒れる髪逆立ちて、眼血走り、右手に剣を抜き持ちて、物をも云はず切つてかゝるに、余は驚きあはてながらも、貴女と共に遁出せば、貴女の方には目もかけず、余が後ばかりを追ふに、心いよゝゝあはて、去らんとするに足すゝまず、やうやうのこにて池の邊まで遁けのび、ホツと一息吐く間もなく、士官は剣を振かざして、追かけ来り、アハヤ一刀の下に兩にきらん刹那、池の中に飛び込みしと思ふて、不圖眼を開けば、身は矢張木の下に横たはりて、貴女もなければ士官なく、何時の間にか前後も知らず眠入りて、其間に見たる夢なりき。
 身體は汗に濡ふて、動悸尙甚しく、心非常に不愉快に、
 『何の事だ馬鹿くし』
 と、云ひながら欠伸を兩手にて推上げ、漸く立上りて、不圖傍を見れば、何時の間に来りしか、先の程道を訪ひし老人。左なきだに恐ろしき顔に、一層眼を怒らして、余か方を睨めつけ居たりしかば、余はハッと驚くと同時に、少し氣味わるくなりて、物をも云はず立去らんとするや、老人は破鏡の如き聲にて、

『此の野郎』

と、云ひつゝ、ツカ／＼と進み寄り、余が腕を捕え、口を尖らして、呼吸せはしく、
 『誰れに断はつて此處へ這入つた。未だそれはかりてない、己れが大切に居る林檎を食ひをつて、ズウ／＼しく晝寝までして居るさ。サア誰に断はつて這入たか云へ。』
 誰にも断はらず、林檎も盗み食ひしたれば、何とも申譯はなけれど、此様に士百姓の老ばれに、頭下ぐるも嫌なり。左ればとて云譯したとて、かな襲者に聞えるはづもなければ、虚勢を示して威じつ、首尾好くのがれんと、此方よりも睨めつくれば、襲者の本性を現はして、
 『ナニ林檎を盗みはしない、盗まぬとがあるものか、此通り種があるは。』
 と、云ひつゝ、杖の先にて余が食いかすの種を示し、
 『これでも知らぬと吐すか。云はずは此様してやる。』
 と、持たる杖を振り上げるに、今は余も堪らず、腕をふり解きて駈け出し、垣根の傍に行きて潜り抜けんとすれど、遽ては容易に出られず、頻りにもかき居る間に、よろばひながら追いつきて
 『サヌ』
 と、云ひつゝ、一打尻邊に喰はされ。思はず

「ア痛ッ

と、叫べば、

「ナニ 馬鹿野郎だッ

と、又撃たんとする間に、余が身體は已に外へ抜け出で、杖は垣の根元に當りぬ。老爺は之にます
く腹立てか

「盗賊く。」

と、聲高く呼ひ立るに、若しや他の人の聞きつけて、駈け来らば面倒ならんど、一散に駈け出して、
呼吸をもつかず走りぬ。

最早大丈夫かど、後ろを振りかへれば、遙か後なれど、尙老爺の、よろめきながら追ひ来るに、未だ
安心ならずと、ヒタ走りに走りたり。

凡そ七八町も駈けて、後を見れば最早追ひ来る者もなきに、漸く安心して立止まり、ホッと一呼吸つ
きて、流れ出る汗を拭ふに、此處は丁度森の入口にて、樹木鬱蒼と生ひ茂り、木下影いやが上に暗く、
日脚もはや西に傾きて、吹く風冷りと身に染めば、やゝ勇氣を恢復して、前途を急ぎぬ。

行けどもく、森の中の一筋道を出てさらず、日はいよいよ傾きて、四邊には家もなく、行く人に一

人も遇はず、心細くもたどり行く内、萬感交々胸に浮びて、前に老爺に追はれしと。轉寢して夢見し
と。煉瓦の住居を立去しと。果ては父の元を出てしと。今更思へば何れが夢とも 區別つかず。期る
山路に行き暮れて、心細く目に會ふも、自ら求むる物なき。おどなくさへして居なば、何時も氣樂
に、名ばかりの租税とり、餓えずこゝえず、過ぎるべかりしものを、何故此様な無法の事を爲しつる
かど。そいろに古昔戀しく、足の進みも鈍るまでなるを、漸くに氣を取り直して、肩より例の胡弓を
取おろし、之を道行く友として、弾きながら歩み行きぬ。

静けき森の中に、胡弓の聲のみ遠く響きて、反て物凄しく、其の上おはさる指先の調子に氣を取られ、
處々に高く現はれたる木の根につまつきて、倒れんとすると度々に、足の運び容易にはかどらねば、
斯くては夜に入るとも此森を出けぬけること協ふまじと思ひ、今は只根かきり、足に任せて急ぎ出
しぬ。

行くと半道にもなりぬらんと思ふ頃、不圖耳に入る笛の音、扱は人こえありと。心少しは勢つきて、
尙急ぎ行くに、次第に下り坂になりて、これを下り終れば、四方は岡に圍まれて、緑深き草葉の間に、
百色の艸花咲き亂れたる牧場に出てたり。笛の音は何處と見れば、一際色深き艸原の上に、年また若
き一人の牧童の、心閑かに横はりて、四邊に目もくれず吹きさすまむ様、心悪さまて腰にやさしく、

實に仙境に入るの思ひあり。道を問はゞやと思ひ、童の方に進み行くに、谷川の水清く流れて、一筋の小川横はりぬれば、彼方へ越えられぬに詮方なく、此方の岸邊に立ちて、自ら心なき業とは思ひたれど、聲を立て、

「村ある方へは、何方へ行けばよいか。」

と、問へば、此時までも尙吹さずさみ居たりし童は、初めて人あるを知りしもの、如く、笛の音を留めたれど、別に驚ける様もなく、笛を以て靜かに彼方の道を指し示し、何とも云はで、再び後を吹き続けぬ。

示したる道をたどり行けば、又森の下道になりしかど、此度は左まで長くはなく、間もなく出て抜け、向ふを見渡せば、小家二三軒並びて、其前の艸原の榎木の下に据えたる丸机を、四五人の男女にてとりまき、骨牌遊びして居る此方には、稚き里の小供等の、餘念なく戯れ噪くに、漸く安心して、直に肩より胡弓とり出し、森の出口の邊より、面白き田舎の夕暮と云ふ一曲をひきつゝ行きたり。近寄るまゝに、余がひく弓胡の音耳に入りてか、小供等は噪きを止め、机を圍み居たる人々も、骨牌の手を留めて、頻りに耳をすまます様子なるに、余は愈々得意になりて、手を盡してひき行きぬ。聽て其前に至れば、小供は五月繩く前後左右を取巻きて、余が顔と糸の調子とる手とを眺めて、左も

驚ける様にてつきまどひ、他の人々も一心に余が方のみ見つめて、衆目總て余か身に集りぬ。

程なく其一曲を終はりて、傍の木に腰うちかけ、隠藪より煙草取り出して、董らし居る折から、彼の丸机の人々は、何やらん頻りに耳語を合ひて、相談する様なりしが、其内の一番年若き女の、容貌さへ鄙にはめつらしく美しさが、葡萄酒の壺にコップ取揃へ、焼肉を堆たかく盛りたる皿を携さへ、余が傍に來り、笑を含みみて、

「胡弓弾様！ 酒はお好きでござりまするか。」

余は彼の意地悪き老爺に追はれて、かけつけに走り、森の下道を飽きる程あるき、やうく此處に來て、まだ何も食はねば、腹すきて物欲しき時なるに、何かは辭退すべし。

「誠に好きでござります。」

「お好どあればお飲みなされませ、これは珍らしくもないものでござりまするか、お肴に………」

「イヤお毒味して差上せしやう。」
と、云ひつゝ、自らコップ取り上げて、底に僅か注ぎ、誠のしるしばかりに、可愛らしき唇をうるはして、余にコップを渡し、波々と注ぎぬ。余は空腹に、色氣を捨て、一息にグツと飲み干せば。
「ホ、小氣味のよいと、今お一ツ。」

と、又前の様に溢るゝ斗りにつきて、尙暫くは立ち去らず。懸て一層愛敬をつくりて、笑ひながら余が顔を眺め、

「妾が折入て、お願がござりまするが、おまゝくだりませうか。」

少し酒のまはりし折からと云ひ、且つは年若き女の斯くまで厚きもてなしの、身にまゐるうれしさに、余も笑を帯びて、

「貴女の御願ひとあれば、何の様などでも……………」

「其様な困難いことではござりませぬ。皆の者が以前程おひきなされた胡弓をまゝにして、余り面白さに、今一曲お願ひいたしたと、そのお使に妾が参りました。誠に申かねましたが、是非に今一曲何なりとおひきくだりませぬか。これがお願ひでござります。」

「否や、それならば御免を蒙ります……………」と申す處なれど、外ならぬ貴女のお願ひ故、お望み通りひきまじやう。」

と、能く忍體らしく云へば、

「それは何より難有ござります、が、然には可成面白そうなものぞ。」

と、云ひつゝ立つて、余が顔を見てニッコリ笑ひ、小走りに、彼方の丸机の方に去り行く後姿を、

余は暫く眺めて、何處までも人なれたる仕打の心悪く、鄙に似合しからぬ女と思ひしが、如何なる者とは未だ考へつかず。

人より余が音楽を聞かんと望まれては、精神一層のりて、熱心に手をこめてひき出しぬれば、人々耳を澄まして餘念なく、中にも心得あるらしき人は、浮かれて知らず、頭にて調子とりぬ。

程なく其曲も終りし頃は、日影全く沈みて、人の顔見え分かず、今は後を望むも心なしとや思ひけん、人々は淺り惜氣に余が方を見かへり、思ひくゝに立去りて、後は物淋しく、草叢に蟋蟀のすだく聲のみ聞えぬ。

暫く経ちて、並びし家の路次口より、旅人宿の家號つけたる提灯持ちて、此方へ来る人影。近寄るまゝに其人を見れば、以前の程余に酒肴を與へし女、余が居るを知るや知らずや、二三間近くの處を過ぎ行きて、彼方へ行きしが、それも至て靜に、何を見らどもなく、見かへりくゝ、果ては立止まりて、艸の上に提灯さしつけ、何か探す様子なるに、余は急ぎ近寄りて、突然に、

「何か落し物でもなされましたか。」

嗚ぞ驚くならんと思ひしに、左はなくて、余が在りしを知り居たりしものゝ如く、
「ナアニ、薇薔の花でござりますが。」

と、云ひつゝ、余が顔と手に持てる薇薔の花と、等分に見比べて、

「貴郎お入用ならば、上げまじやうか。」

と、思ひ切りて云ひしもの、如く、耻づかしげに面を赤らめ、少し顔を反けて、余が答を待ちぬ。余は何故に斯くまでに、此女の余に親切なるかは知らねど、只嬉れしさに、尙一層近くすりよりて、

「何卒戴けまするものならば……………」

此答にて安心せしかの如く、少しく笑をよくみて、手づから其花を、余が胸の邊の扣鈕の穴にさしてくれたり。斯くても尙女は立去らんとせせず、隠蓑より薄紅の手巾を出して、口の邊をよさながら、

「つかぬと伺ひますが、貴公は胡弓ひきが御商賣でござりますか。」

「否、たゞ慰みに弾くのでござります。」

「左様でござりますか、それにしては誠にお上手なとで、妾はつくづく感心致しました。」

「ハイ、こればかりか私の能でござります。」

「ホ、御申談ばかり……………」

「否、全く。」

「それは何れでも宜しうござりますが、兎に角貴公程のお手ぎはがござりますれば、充分音楽家で

立れます。

「ハ、ハ、ハ、ハ、音楽のない島へなど参りましたらば。」

「處が此村では、音楽家と云ふ者は、誠に珍らしいのでござりまするから、若し貴公にお思召がござりまするなら、暫時御滞在なされたなら、必ずよいお金かどれませするよ。それに妾の父も音楽が何より好きでござりますが。如何でござります、妾の宅にお出になりましては。」

と、云ふて下を向き、又直に満面に笑を帯びつゝ、

「併しかうたひなさる時に、口を横がめて、妙な顔色をなさりませぬと、なほ樂の音も結構に聞えませするけれど……………」

餘り意外の言葉に、ハッと答につまりしかど、折角親切なる女の意を損ふてはと、余はすかさず。

「誠に御親切にありがたう存じます、併し顔つきは、苦しんで聲を出すから、自然妙な風にありまするが、私ばかりではなく、音楽家は、誰しも可笑しい顔色を致します。如何に貴女の御注文でも、こればかりは御免を蒙り度いもので……………」

「ホ、申談に申しましたと、眞面目におうけなされては固ります。其の様なとはモウ措て、貴公さへ御都合よければ、妾の宅へ御出なされませぬか。」

未だ余が答をせぬ間に、三軒建てる真中の家にて、何やらドタバタと音して、人々の罵りさばく聲聞えて、頻りにさう／＼しきに、余は云はんとせし口をつぐみて、音する方を見れば、女も驚きたる様にて、彼方を眺めぬ。

噪さいよく／＼烈しくなりて、果ては内より入口の戸を開き、一人の男を三人にて突出し、其儘ハツタと戸をびめさりしが、突き出されたる男は、よろめく足を踏みしめて、漸く立は上りしものゝ、甚く酒に酔ひたるかして、足元うさて暫くも留まらず、彼方へよろめき、此方へ倒れかゝり、まはらぬ舌に聲高く。

「ヤイ女を出せ！」

ど、叫ぶ一聲を聞くも等しく、如何にしたるか例の女は、思はず持ち居たる提灯をとり落して、それを拾ふ間もなく、一散に彼方の小道を、闇にまされて逃げ行きぬ。余は譯を知らねば、只呆氣にとられて、逐ひかけんどもせず、同じ處に立止まり居れば、先の男は尙彼方此方によつめきながら。

「金を拂はぬと云ふではな、今日は持たぬと云ふのだ、それに何も突き出すには及ぶまい。又女も女だ、是迄何程貴様につき込んだか。ヤレ金銀を買て呉れ、ヤレ白粉だ、ヤレ紅だ。町に出る度に必ず何か買ふて遣つたに、少し懐中が淋しくなつたと見たら、碌に物も云はぬばかりか、何

處かへか隠れて仕舞あがつた。ヤイ女！ ヤイ地獄女め！ 此處へ來い、人が酔てるかと思ふて、提灯つけて何處へか出るふりをし上つて……知るまいと思つても、確然知つて居るぞ。ヤイ出る。出ぬか女め！

呼べど叫べど、音するものは草叢にすだく虫の聲のみ、男も終にはわぐみ果てゝか、尙もぶつ／＼云ひながらも、危う氣に、彼方の細道を辿り行きぬ。待てども／＼女は再び出で來らず、一人淋しく取のこされて、熟々事の機子を考ふるに。

「真中に立てる家は料理屋にて、突き出されたる男は、日頃其家に入出入する客なりしに、遣ひ過して下坂になりしを、此處邊が見きり時と、料理屋の方で相手にせぬを、腹立ちて怒りしを、突出せしならんが、それにしても女……女とは唯か……彼の女が逃げ出せしは不審。男が「女を出せ」と叫ぶや否や逃げ出せしと云ひ。「提灯さげて出て行つた」彼の女が下げて居たも提灯。然かも料理家の家號ありし提灯……扱は女とは彼女のと。それでは彼の女は地獄？ 道理こそ口前の輕きことと云ひ、姿の華奢など、鄙には稀れなる女と思ふたに、余を世の常の有福な旅人と見通り、親切をかしに其家に連れ込み、ある丈の金を紋り取らんと企みしものか。何だ馬鹿々々しい。自ら問ひ自ら答へて、遂に思ひ定めし彼の女の履歴、大方は違はぬ地獄と知りたれば、彼の女の呉

れし薔薇の花さへ穢らはしき心地して、忽ち胸よりかなぐり捨てたり。宿家に泊らんにも、囊中無一物なれば、それも出来ず、一人心細くも、傍の木根に腰うちかけ、更け行く空を見渡せば、絶々の雲間を漏れて、下絃の月朧ろに山の端にかゝり、折々星かけ飛ひて膽を冷やす。今は四邊の家も窓をみめて、萬物すべて寂寥たる中に、遠寺の鐘哀に響きぬ。

果てはそれも撞終りて、犬の遠吠のみかまびすしさに交りて、頻りに聞ゆる馬蹄の響。耳をすませば、次第に此方へ近寄るに、余は安き心もなく、木かけに身をひそめて、様子を見んと待つに、程なく音呖尺の間に來りて、森中の道より現はれ出たるを見るに、二人の騎者にて、何れも黒き布もて面をつゝみ、太く逞しき馬に跨り居る、其服装の不思議なるのみか、斯る真夜中に徘徊するは、是ぞ母が夜伽の古昔譚の中に在り騎者盜賊、今も田舎には在りと聞きしは之れなるべしと、思へば恐ろしく、呼吸を殺して、尙ひとみ居るに、應て二人の騎者は、余が隠れ居る立木の前に馬を止め、何やら余には解せぬ言葉にて、頻りに語り合ひ、其傍を彼方此方乗りまはして、何物か探す様子なるに、怖氣つきし余は、動悸烈しくうちて、精神も身に添はず、氣の故か知らねど、時々余が方を見る様な心地して、今は居堪らず、震へる手足を漸々にして、隠れ居たる立木の下枝につかまり、音せぬ様によぢ登る折から。

「其處に居るのは誰だ。」

後にて考ふれば、左まで大なる聲にてもなかりし様なれど、其時の余には、恰も百雷の一時に落ちたりたらん如く、瞽膜に響きて、驚きの餘りに隠るゝ身なることも打忘れ

「誰も居はしませぬ。」

ど、思はず口走りしに、余ながら失策りしと、口を掩へど今更仕方なく、如何なるとかと、尙一層恐懼を増せしが、二人は余が言葉を聞くと等しく、くづるゝばかりに笑ひ出せしが、應て其一人は、余が登り居る木枝をすかし見て。

「それでは、其處にブラ下つて居る二本の足は誰のだ。」

此間に幾何か余が恐れも薄らぎて、尙震へきながらも、

「これは憐れな胡弓ひきの忘れ物てござります。」

「忘れ物なら捨ふか。」

ど、此方へ馬の頭を向くる、思の外なる滑稽けたる仕打に、今は恐怖の念も全く去りて。

「ナニ、只今下ります。」

今更となれば、遮てたりしとの余ながら可笑しく、心の内に笑ひながら、木より下りて、騎者の傍に

至りしに、馬は突然余が姿を見て驚きしにや、後へすさりて嘶くを、騎者は手にて首の傍を叩きて、之を静めながら。

「吾等はペー町の方に行く者だが、連れて来た従者が、道にて病氣を起した故、是非なく後に残し置き、此處迄来には来たが、前途不案内にて、今も今とて、此一筋道を何れに行つてよいか、二人で相談して居た處だ、其方道案内して呉れるとは出来ぬか。」

余も元より初旅の、此處まで来るさへ、漸く牧童に尋ねて辿りつきたし身なれば、如何でペー町の道を知るべし。

「私も知りませぬ。」

と、軽く答ふれば、騎者の一人は眼を丸くして。

「ナニ知らぬッ。」

と、云いつ、隠蓑を探りて、小さき短銃を取出し、態ど月の光りに引金の工合を改めて、

「世界を我物と、胡弓をひきながら、さまよひ歩行く其方が、ペー町に行く道を知らぬはづはなす、断つて案内せぬと云へば、此方にも仕様があるぞ。」

と、云いつ、嚇とは知れど、短銃を突出して迫るるに恐ろしく、左ればとて眞實知らねば、如何が

はせんと感ひしが、此様子では、知らぬと云ひ張りても、中々承知すまじと思ひ定めれば、

「決して嘘は申しませぬ、實以て知りませぬけれど、未だ生命は惜うござりまするから、道案内致します、お情に短銃はお仕舞くださいませ。」

と、云へば、騎士も心解けてか、微笑みながら云ふか儘に短銃を納めて、

「併らば一刻も早く……」

と、云ふ顔を、先刻の程より一言も云はで扣へ居たりし連の騎士は、つくろ眺めて、終に袖を引き留め、何やらん低語けば、此方の騎士も言葉を返し、果ては互にうなづき合ひ、余に向ふて、

「サア 案内して呉れい。」

「それではお供致しませう。」

と、胡弓を肩にかけて先に立てば、二人の騎士は余が後に従ひ、静に馬を歩ませ來りしが、扱二筋道の處に來りては、知らぬ余は矢張迷ふて、初め引受けし時は、何れにても構はず、足の向く方に行きて、義務を果さんと思ひしが、斯くて若し間違ひなば、如何なる憂目に遇はんも知れずと思へば、流石に心なき業も出來ず、右か左か定めかねて躊躇すれば、騎士は後より急ぎ立て、

「サア、何の道か、早く〜。」

至りしに、馬は突然余が姿を見て驚きしにや、後へすさりて嘶くを、騎者は手にて首の傍を叩きて、之を静めながら。

『吾等は、一町の方に行く者だが、連れて来た従者が、道にて病氣を起した故、是非なく後に残し置き、此處迄来には来たが、前途不案内にて、今も今とて、此二筋道を何れに行つてよいか、二人で相談して居た處だ、其方道案内して呉れるとは出来ぬか。』

余も元より初旅の、此處まで来るさへ、漸く牧童に尋ねて辿りつゝ身なれば、如何で、一町の道を知るべき。

『私も知りませぬ。』

と、軽く答ふれば、騎者の一人は眼を丸くして。

『ナニ知らぬッ。』

と、云ひつゝ、隠蓑を探りて、小さな短銃を取出し、熊と月の光りに引金の工合を改めて、

『世界を我物と、胡弓をひきながら、さまよひ歩行く其方が、一町に行く道を知らぬはづはなら、斷つて案内せぬと云へば、此方にも仕様があるぞ。』

と、云ひつゝ、嚇きは知れど、短銃を突出して迫まるに恐ろしく、左ればとて眞實知らねば、如何が

はせんと思ひしが、此様子では、知らぬと云ひ張りても、中々承知すまじと思ひ定めれば、

『決して嘘は申しませぬ、實以て知りませぬけれど、未だ生命は惜うござりまするから、道案内致しませぬ、お情に短銃はお仕舞くださいませ。』

と、云へば、騎士も心解けてか、微笑みながら云ふか儘に短銃を納めて、

『併らば一刻も早く……』

と、云ふ顔を、先刻の程より一言も云はで扣へ居たりし連の騎士は、つくづく眺めて、終に袖を引き留め、何やらん低語けば、此方の騎士も言葉を返し、果ては互にうなづき合ひ、余に向ふて、

『サア 案内して呉れい。』

『それではお供致しませしやう。』

と、胡弓を肩にかけて先に立てば、二人の騎士は余が後に従ひ、靜に馬を歩ませ來りしが、扱二筋道の處に來りては、知らぬ余は矢張迷ふて、初め引受けし時は、何れにても構はず、足の向く方に行きて、義務を果さんと思ひしが、斯くて若し間違ひなば、如何なる愛目に遇はんも知れずと思へば、流石に心なき業も出來ず、右か左か定めかねて躊躇すれば、騎士は後より急ぎ立て、

『サア、何の道か、早く〜。』

「左様にお急ぎなさりまするな。」

ど、云ひつゝ、傍を見まはせば、三尺程の棒ありしを幸ひ、拾ひ取りて分れたる道の真中に立て、目を閉ちて手を放せば、棒は前に、余が膝に倒れかゝりぬ。

「エッ」

ど、舌打ちすれば、騎士は早くも聞き咎めて。

「これ〜、何をして居るのだ。」

「何の道を行てよいか分りませぬから、運を天に任せて、杖占で定め様と思ひまして。」

二人は今迄堪え〜し可笑しさの、一時に破裂したる如く、馬上よりすべり落ちんばかりに、笑ひ出して、暫時は他愛なかりしが、聽て一人の騎士やう〜笑を止めて、余に向ひ、

「中々面白い、シテ右か左か。」

ど、云ふに、余は又急ぎ杖を立て、試みれば、此度は右の方にハツタリ倒れぬ。大方左様と思ひし余が意と符合して、右に倒れければ、余はうれしく、

「右〜、右の道でございます。」

ど、呼立びつれば、騎者も余が見る處と違はざりしか、

「右？ 成程右に違ひあるまい。」

斯くていよく、確とは知れぬと大方左様と一同決心して、右手の道を辿り行きぬ。

* * * * *

それよりは一筋道、脇道とては、田島に通ふ畔道か、山へ導く樵路より外なれば、迷ふとなく一直線に辿り行くに、騎者は余が後より、足掻を静めて、何やら面白氣に語り合ひつゝ、従ひ来る。月は尙山の端に残りて、兩側を挟む道の木影に、見えつ隠れつ、遠くの村にて高吼する犬の聲も、今は心丈夫に、折々吹き来る夜風に、バラ〜と落ち散る木梢の露を顔にうけつゝ、曇さをそれに消して急ぎ行きぬ。

凡そ二里半も来りぬらんと思ふ頃、彼方此方にて、鶏の鳴く聲頻りに聞え、程なく東の空白みて、星影一ツ消え二ツ消え、次第に遠くのもの鮮明に見ゆる様になりし頃、木立疎に、芝州一面に生ひ茂りたる岡の上に出でたりしが、騎者の一人は聲高く、

「止まれッ。」

前に立ちし余を呼び止めたりしかば、急ぎ振りかへり見るに、二人とも已に馬より下りて、傍の立木

に各々馬を繋ぎ居たり。後がへりして二人の傍へ近寄る余が顔を一人の騎者はつくつく眺めて、突然

に、
『成程、彼の植木屋に違ひない。』

と、云へば、他の騎者は己が言葉の當りしを喜ぶもの、如く、

『違ひなからう。』

余は何の事か譯は知らねど、兎に角二人が余が身の履歴を知り居るに驚き、不思議に堪へ兼ね、二人の顔を等分に見比らべて、突立居れば、植木屋と云ひしを、余が怒りしと思ひたるか、

『否や 植木屋では無かつた收税吏く』

と、一人が云へば、

『左様く、彼の煉瓦作の家の相續者。』

と、合櫛をうちぬ。斯くまで委しく余が身の上を知り居る二人、未だ頭巾を取らねば顔は見えず、其言葉つき服装より察するも、余が知る人とは覺えず。よし顔を見たりとて、思ひ出しさうもなく、全く余が知らぬ人にて、余を知る人ならんと思はれぬ。騎者の一人は又言葉をつぎて、

『先程も云ふた通り、吾等は従者を失くして甚だ困却て居る處だが、其方に遇ふたは此上もない好

都合、今より吾等の供になつて呉れぬか。供と云ふても別に荷物を持つでもなければ、遠慮も入らぬ、氣まゝに此様にして一所に行つて呉れば濟むのだが、それともいやか。

『難有うはござりますが、私は伊太利の方に参りたいと思ひまして、此様に旅に出ましたと故

『ナニ、伊太利に………吾等も伊太利の方に行のぞ。』

『エツ 貴公方も………左様な譯なれば願つたり叶つたり、何卒お連れなされて下さりませ。』

『左様してくれば、吾等もにぎやかでよい』

余は嬉れしさの餘りに、肩より胡弓を下ろして、直に一曲を弾き出れば、木梢の鳥も之が爲めに目覺、二人の騎者も終には浮かれ出して、調子に合せて躍り初めたり。

斯てあると良暫くの間、騎者の一人は躍り居たる足踏みを止めて、突然に大聲にて、

『賀すべしく、ア、彼處に有名なるベ、町の塔が見える。』

と、叫ぶに、一同指す方を見れば、今迄は朝霧に見えざりし遙かの彼方に、巍々として寺院の塔一基、高く雲邊に聳えたり、

『アレく、彼に違ひない………して見ると矢張道は違はなかつた。』

と、云ひつゝ、一人の騎士は余が顔を見て、又語を續ぎ

「案内者、有繫く」

と、微笑みぬ。塔を見出したる騎者は甚だ急ぎ込みたる様子にて、余を攀めたる騎者に向ひ、

「直に行かすばなるまゝ。」

と、促せば、此方は隠蓐より時計を出して 頭を左右に振り、

「否、未だ非常に時が早い。余り早過ぎては返て面白くない、

と、之を拒めば、強てとは云はず其儘にて止みぬ。

其後騎者の一人は、繫ぎ置きたる馬の傍に立寄り、一箇の包を取り来りしが、開けば中には菓子、乾酪等澤山に、酒さへ携へたり、それを生ひ茂りたる艸原の上に廣げて、食ひ初め、余にも充分分ち與へたれば、すきたる腹にも余れる程なりき。

聽て一人は余に杯を與へて、波々と注ぎながら、

「未だ吾等を思ひ出さぬか。」

と、問ひかけたり。此時は已に二人とも頭巾を取り除け居れば、充分に顔は見られるれど、如何しても見覚えなければ、

「思ひ出させぬ。」

「左様か、私は書師のレオンハルドと云ふ者、此御方は、クイドとおつしやる、御方だ、以後は忘れずに置くがよい。」

二人の有様をつくく見るに、レオンハルドと云へる方は、身體大きく、丈高く、褐色の温和なる眼を有ち、クイドと云へる方は、遙かに年若く、小作にて色白く、古代獨逸の服装にて、容貌高尚く、實に一箇の美少年なり。

程なく食事を終りしが、クイドは艸の上横たえ置きし胡弓を取り上げ、今や差し昇る旭日に向ふて、一曲を奏し初めたり。其調子と云ひ聲と云ひ、中々の妙手にて侮り難く、余は感に堪えて聞き居る内に、昨夜夜通しの歩行に勞れて、頻りに眠氣さじ、終に其處に寝入りて、暫くは前後も知らず。

聽て不圖目を覺ませば、クイドは已に馬上に跨り、レオンハルドは杯を片手に持ちそれに、残り居る壺の酒を注ぎ終り、高く捧げて日かけにすかしながら、聲高く、

「此處迄の安着を祝し、前途の無事を祈る」

と、叫びて、一口にグッと飲み終り、壺と杯を共に彼方の谷間に投ぐれば、岩石に觸れて、粉微塵に碎くるを眺め、

「ハ、ハ、ハ、愉快！」

ど、其儘ヒラリと馬に飛び乗りぬ。

(四) 置去

一町入口に至れば、緑色の下着着たる男、二人の傍に進み来りて、頻りに頭を下げ、余には解せぬ他國の言葉にて、何やらん話しかくるを、二人は軽くうけて、之も他國語にて話し合ひつゝ進み行き、程なく町中の或る家に着きて、暫時休息するとなりぬ。

其間にレオンハルドは、余が衣服の餘りに穢さを見兼ねて、一領の立派なる燕尾服に、帽子を添へて與へたりしかば、それと着替るに、荷長丁度身になふて、余なから見違へるまでに人品を上げたり。イヤ出發せんとて立上る、兩番師の後に従ひ、表に出れば、四頭立の立派なる馬車、用意落ちなく整ふて、吾等の乗るを待てり。グイドとレオンハルドは戸を開きて中に這入り、余は態と願ふて御者臺の後ろに乗りぬ。

一鞭加へて駆け出す馬蹄の響、車輪の音、布きつめたる石の上に高く鳴りて、御者があやつる手綱は、蜘蛛の糸の如く、被る帽子は、風をさりてヒュ〜と鳴き、折〜は吹き落されんとして、慌て、手

をかけた。馬車の美麗なると、四頭立の勢ひよさを、珍らし氣に立止まりて見る町人の中を、揚々として駆け行きぬ。

町を出れば過眼の風景悉く變りて、河あり、橋あり、坂あり、平地あり、森あり、原あり、田あり、畠あり、牧場あり、葡萄園あり、遠くに山霞めば、近くに村煙あり、右に掛茶屋あれば、左に湧き出る清水ありて、山水の様、目新らしく余は瞬きもせで眺め過ぎぬ。

初めレオンハルドの云ひし如く、供と云ふは名のみにて、日に三度づゝ立場にて、食事を馬車の中に運ぶのみ、二人の主人と、共に食ひ共に飲みて、殆んど同等の連に異ならず、

處々にて馬をつぎかえ、明けては暮れ暮れて明け、日數積りて旅路遙かに、はや何時の間にかアルプスの山も越えて、伊太利の地に入りぬ。日頃の望みや、協ひ初めて、心云はれぬ迄にうれしく、眼に入る風景一層珍らしく感ぜられて、日暮る頃或る旅宿の前に、吾等の乗り来りし馬車は止まりたり。

二人の後に従ひ内に入るに、家の建築、庭の構造、邸には珍らしき迄にきらやかに、坐敷の敷も少なからぬ様なり。レオンハルドとグイドは奥まりたる部屋に、余は表の方に別間をあてがわはれたりしが、結局余にはこれがうれしく、誰に遠慮もなければ、先づなが〜と寝備匍ひになりて、かけづめの腰を延ばし居たりしに、程なく女中の来りて、沐浴を勧むるれば、それを終りて心いよく清じ

(四) 置去

く、懸て食事も終りて。今は爲すともなければ、庭に立出て、彼方此方を散歩するに、夏の夕の、木の間漏る風涼しく、月は雲なき空に牙え渡りて、面白く作りなせる庭を隈なく照しぬ。手紙書く爲めにど此處に一泊せし二人。今はそれも果てしか、スイドは此方へ突き出したる露臺の上に出で来り。此家の物なるべし、一挺の三弦琴を手にして、節面白く「夏の夜」の曲を奏し初めたり。余は木の下に据えある床几の上に横はりてありしが、月と云ひ樂と云ひ、實に事足りし良夜、其上涼風面を拂ふて心地よく、晝の勞れに誘はれて、其處に前後も知らず寢入りぬ。

郵便馬車の喇叭の聲を、良暫くは現にきゝて、冷えりと身に染む風に目を覺ませば、山の端に曙の雲紅に、朝露艸に布きて白し。夜一夜風露にうたれて、覺えず寢入りじかば、何となく寒さを感じて、思はず出る嘘、余ながらおをまじかりしと思ひながら、起き上りて、我が部屋に歸らんとせしが、左るにても主人等二人は、最早起き出し、様子見ばやど、左手に廻はりて、二人の宿りたる部屋の窓下に至り、

鳥起きて樹上に鳴きぬ、 已に天明くるに遠からず、

旭日紅く空を染るに、

尙夢現の境を樂しむ。

余ながら余程風流の積りにて「夏の曙」と云へる唱歌の一節を、高からかに歌ふて、それとあく二人の眼を覺まさんと思ひ、再び三度くりかへせど、内は寂として音もなし。不審しければ、開け放したる窓より内をのぞき見るに、荷物道具一切影も見えず、二脚の寢床は薄衣どり散らしたるまゝに、空しきぬけがらどなり居たり。余は驚きて、飛ぶが如くに余が部屋に歸り見れば、机の上に乗せある財布、中は幾何か知らねど、少なき紙の切れに「収税吏様」と見えある、レオンハルトの手にて認めあるのみ。借はどいよく驚きて、廊下傳ひに二人の寢室に廻り行き、戸を推し開きて中に這入り見れば、外より見しに等しく、二人の長靴も帽子も革袍もなく、昨夕スイドが弾きし三弦琴のみ、余が失策を笑ふもの、如く、傍の壁にかゝれり。

今は狂氣の如く、家中を駆け廻はりて、彼方此方を探せど、二人の影もなし。余が足音の烈しきに、人々も目を覺まして、余が四邊に集り来るを、推し別けながら、尙慌だしく彼方に駆け行かんとする余が手を、此家の亭主は確と捕へて放さず、
「貴公！ 何事なされました。
ど、問ふに、

「アノ、二人の主人が……」

ど、云ひつゝ、又驅け出さんとする余を、亭主は引寄せ、

「マアお静になさりませ。」

ど、云ひつゝ、余を無理に其處に坐はらせて、

「お連様が、如何かなされましたか。」

「行衛が知れぬ。」

「エッ。」

どは云ひしが、それならば共に行衛を探さうとは云はず、

「それを貴公が御存しないとは、扱は内証で此先の色町へでも遊んで、後朝の別れ惜しくて、今やうく歸つてお出なされましたのか。」

「馬鹿など云ふな、昨夜庭を散歩さして居たら、月が面白く牙え渡つて居るのを、床几の上に横になつて居て、ツイ其儘ね入て仕舞ふたのだ。」

「それは尙更呑氣なことで。」

ど、冷やかす様に云ふ亭主の言葉につれて、皆々ドツと笑ふに、余は愈々腹立しく、儼然と居直りて、

「これ亭主！ 宿めた客の行衛知らぬとはあるまい、サア眞直に云へ。」

「これはしたり、成程勘定を頂かぬ内は、滅多に遣けられては、商賈が立ちませぬ故、よく氣をつけて居りまするが、彼のお方へは昨夜宵の間に勘定をお渡しになつて、貴公の分までお拂くだされたから、何處へお出になりませしやうと、お遣けになりませしやうと、些も氣に止めませなんだ故、一向に存じませぬ。貴公こそお供でありながら、御主人が何處にお出になつたか知らぬとは、扱も笑止く。」

「ウヌ何處まで人を馬鹿に……」

ど、腹立たしさに心亂れて、前後の考へもなく、拳を固めて撃たんとすれば、亭主は慌て、逃げ出すを、尙も追ひつめて撃たんとする時、今迄傍に在りて、吾等の問答を聞き居たりし女中の一人、振り上げたる余が手を抑えて、

「妾が知つて居ります。」

此一言に、余は急ぎ拳を下下ろして、

「知つて居る、早く教えて呉れい。」

「ど云ふて能くは存じませぬが。」

「其方まで人を馬鹿にッ

と、教團けば、

「否、斯云ふ譯でござります、マアお聞きなすりますせ。

と、悪るく落ちつきて、傍の椅子を引寄せ、それに腰かけて、

「丁度夜のはのく明ける頃でもござりましたらうか、不圖眼がさめまして、見るとはなしに硝子越しに外の方を見ますと、何れも黒い着物着て、白馬に乗つた二人の人影、有明のおぼろ月に、何となく物凄く、夢かと思へば左様でもなく、楮は怪物かど、遽かに恐ろしくなりまして、其儘袂ふかく被り、呼吸を殺して居ましたら、聴て蹄の音高く、彼方に駆け行く響きが聞えましたが、今更思へば、あれが、お兩方でありましたら。

「それでは余を置き去りにして出されたのか、いよくそれと知れば、此様なとはして居られぬ、

と、今更の様にさはぎ立つ折から、郵便馬車の人を呼ぶ喇叭の聲せはしく吹き立つるに、ますます心急ぎで、恰も狂亂せる如く、部屋へ歸りて、

「まだしてもこれがあるので僥倖。

と、獨言ちつ、レオンハルトの余に残し置きたる財布を、人の手に在る物を奪ふ様に、急ぎ取上げ

て隠裏に入れ、壁にかけ置きたる胡弓を取下ろさんとする折から、亭主又來りて、部屋の入口より半分顔を出し、

「三番立の馬車が出ますよ、あの後には、午過でなくては出ませぬが、それとも今日一日は御滞在なされますか。

「誰が此様な處に居るものか。

と、云ひつゝ、胡弓を肩にかくるや否や、立ち居る亭主を推し除ける様にして、廊下に出で、一散に玄関の方に駆け行き見れば、馬丁の馬車の戸を開きて、余が乗り移るを待つものゝ如く、後より追ひかけ來りし亭主が、

「貴公朝餉は。

と、袖を捕ふるを、

「朝餉どころか。

と、振り放して、急ぎ馬車の中に駆け入れれば、馬丁は外より戸をピシヤリ。御者が一打當つる鞭の音と共に、馬の蹄を揃へて駆け出しぬ。

(五) 古城

山どなく谷どなく、晝夜の別なく、驅け續けに走り、漸く立場に着きて、茶屋に立寄り、山海の美味に舌鼓うちて、空きたる腹を肥さんどすれば、未だ半ばも食ひ終らぬに、ハヤ馬車の方にては、馬のつら替も濟み、御者も食事終はりて、用意全く整ひ、出發を報する喇叭の聲に催されて、小刀と肉刺とを捨て、速て乗車せねばならず、何時も斯くの如くなれば、染みく人に言葉かはす時間もななく、グイドレオレハルドが、此處を通りしや否やを尋ねん様もなく、只急ぎにせかれて乗り行きぬ二人の供にて、御者臺の後ろに乗り居る時とは異なりて、廣く馬車の中に只一人、寝るも起さるも勝手なれば、其氣樂さ云はん方なく、何時も町中を通り行く時には、馬車の窓より顔を出して眺め居れば、自ら自慢するにはわらねど、余が面の餘り醜くからねど、服装の穢なからぬ故に、賤しからぬ人と思ひとりてか、行き過る人の中には、丁寧に頭を下げて禮を爲す者も少なからねば、余も一々禮を返し、又田舎村を過ぐる折は、珍らし氣に余が顔を眺めて、逆ても及ばぬ余が有様をうらやむもの如く、余は一層得意になりて、今は前後のとも打忘れ、只目前の愉快なる境遇に心を喜ばして、何處ともなく送られ行きぬ。

最初レオンハルドの残り置きたる財布を取る時、數を改めはせざりしかど、其重みど、何時も拂ふ度

びに探み出す時の手ざはりにて、少なからぬ高と云ふとは知りたりしかば、有るに任せて、三度の食事珍味を撰び、御者等にも折く少なからぬ心づけを興へしが、今改め見れば、残るははした錢ばかり、今一度の食事の代にも覺束なき程なるに、俄かに驚きて、先きの無駄つかひを悔めど、今更詮方なければ、馬車より飛び下りて、又元の憐れなる身にかへり、胡弓の糸を生命の綱に、心細くも逍遙はんかどは考へたれど、又思へば此様な美麗しき馬車の中に斯うして、安樂に世界の果てまでも、足を動かさずに行かる、境遇を、斷然見捨るとの惜くて、兎角逃けも得去らず。

折から今迄平かなる木街道を、一直線に走り居たる余が馬車は、此時突然右に曲りて、小石どなく木の折れどなく、縦横に散亂せる小路の上を行くに、馬車の動搖甚くし、余が身體は彼方の隅より此方の隅に、はね遣らるゝと、幾度と云ふ暇を知らず。左るにても何故斯る險はしき小路を行くか不審に堪えかねて、余は馬車の中より、

「一體何處へ行く積りか、
と、問へば、御者は此方振り返りて莞爾笑ひ、何どか答へたる様なれど、其言葉は、車の石にさしる音に打消されて聞えず。

左れど其小路は、只僅の間にて、それを抜け出れば、左は目も遙かなる海原に、夕日に赤き雲の色を

寫つし、漁舟遠く木の葉に似て、霞に黒ら島形の面白。右手は層巒長く續きて、中には高く雲に入るもあり、谷間々々は日影已に絶えて、鬱蒼と茂れる杉の梢くらし。行けば行く程、四邊の景色次第に淋しくなりて、今は全く夜となりぬ。

月影木の間よりチヲホラと、漏りて、反て物凄き山道を、靜に馬車に乗り行けば、彼方の森の中にて「來い、來い」と聞ゆる梟の聲四隣寂寥たる夜陰の靜さを破りぬ。

心細くも馬車にゆられて、尙も進みゆくに、程なく山の根元をさりぬきたる墜道の中に這入りぬ。それを行くと良暫くの間、聽て聲々々聞ゆる瀧の音に、出口の近くありしを知り、颯と吹き入る、冷風に、漸く出抜けたるを知りて、窓より頭を出して、餘り心細さに言葉かはして見んと、御者臺を月光に透し見れば、何時の間に變りしか、御者は以前の郵便馬車の御者にはあらで、記章もなき平服着たる見知らぬ男あり、左なきだに心惑ひ居る折から、重ねくの不思議に余は氣を奪はれて、茫然として、暫く御者の後姿を眺め居る折から、兩側に生ひしけりたる隈篋の中に、ガサ／＼と音して、ハツと思ふ間もなく、太く逞しき白馬に、黒き着物着て乗りたる人影、余が馬車の前途を横りて、忽ち又向ふの敷中に姿は消え失せぬ。余は又胆を冷して、急ぎ頭を引き込み、窓をハツタとびめて、其儘片隅にうつくまりしが、御者は聲高く打笑ひ、前を過ぎ行きし騎者を呼掛け、何やら頻りに話した

れど、騎者の方よりは一言の返事もなき様なりき。

暫くは恐ろしさに動悸うちて、片隅にうつくまりなからひかれ行しが、忽ち遠くに輝く燈火一點。これを見るや否や、余が心は急に勢ひつきて、再び窓を開きて眺むるに、近寄るまゝに燈火の數、二ツ三ツと次第に殖え、眼を定めてよく見れば、高く削り上げたる絶壁の山の半腹に、恰も燕の巢の如く、建てたる一軒家、今は開け放したる部屋の内、真中に据えたるテーブルの周圍に、並び居る人の形さへ、黒く幻燈畫の如く見られぬ。左れば余と御者の外に、未だ人ある世界と思ふて、いよ／＼心強く、其處も通り過ぎて、程なく兩側より木枝生ひ茂りて、前の墜道に似たる木下暗を、抜け出れば、殆んど夜のあけたらん如く、渺茫たる野原に、月隈なく牙え渡りて、遙か彼方の山上には、古城幽邃として高く空に聳へ、獨り我物顔に月夜をもてあそびぬ。

靜に野面の平なる道の、何れへ導くかと思へば、次第々々に古城の山の麓に進みて、聽て半時程もかゝりて、斜になりたる坂道を山上へと登りぬ。半ば頽れかゝりて、やう／＼膝かづらに纏はれて、僅かに形を存じたる城門の傍に至るや、御者は何やらん伊太利語にて、三度聲高く呼ひ立てしが、其聲遠く城内に響き渡りて、門の軒を寝棲に眠り居たりし鳥は之に驚かされて、羽ばたさせはしく遁げ惑ひ、彼方此方に群かり鳴きたり。門をくゞりて、布きつめたる御影石の上を、馬の鐵蹄に火花散らして、

吼へる立つる犬を鞭にて逐ひ退けつゝ、車輪の音勇ましく、城の玄關に着きぬ。
 車止まるや否や、實に不思議なる立場よと思ふ間もなく、外より馬車の戸開きて、長高き年老ひたる
 男、手に小さき提灯を持ち、余が顔をシロく見てありしが、懸て腕を取りて余を援け、丁寧に馬
 車より下ろしたり。上り段の中程には、同じく年老ひたる、至て剛き女の、黒き着物に、白き前掛けし、
 右の手に、二本の蠟燭を立てたる、古代の手鬪を持ちたるが立ちてありしが、余を見るや否や、丁重
 に頭を下けて禮を爲し、種々と話すれども余には少しも解らねば、不安心ながら只うなづくのみ。
 其間に年老ひたる男は、提灯を馬車の中に差入れて、四方隈なく改め見たるが、手荷物一ツたになき
 にや頻りに頭を左右に振りて、何やらんつぶやきぬ。御者は何時にも似ず、酒代も求めず、直ちに馬
 を廻はして、玄關の筋向に建てある、車部屋の中に馬車を入れぬ。老女は尙も丁寧に、手眞似にて、
 此方に来よと、導くまゝに従ひ行くに、長き細き廊下を通りて、些やかなる石の段を登り、尙奥深く、
 懸て腐めきたる處を過ぐるに、年若き下女三四人、戸の隙間より顔を出して、未だ生れて男と云ふ者
 を見たるとなきかの如く、物珍らし氣に、余が姿を眺めて、互ひに目配はせしては、ひそく低語く
 様なるに、余は一層風姿を装ひ、應揚に其處を通り過ぎぬ。
 先に立ちし老女が、一室の戸を開きて、同じく手眞似にて、イザ此部屋にと、教ゆるまゝに内に遣入

れば今迄過ぎ来りし部屋、廊下の、古く燻ぶり果てたるには似ず、此部屋のみ目映く美麗しきに、
 先づ心躍りて、暫時くは茫然たりしが、懸て心を静めて室内の有様をよく見るに、天井は金銀を以て
 美麗に飾り、壁は種々の彩色したる、古代の花鳥の畫にて張りつめ、真中には白き綾絹を以て被ふ
 たる丸机の上に、焜肉、菓子、菓物、葡萄酒など、清潔なる皿に、充分に盛りありて、窓と窓との間
 には、床より天井までの、大なる鏡一面立てあり。
 生れてより以來、種々なる家に入りたれど、斯る美麗なる部屋に通じしは、耻づかしなから今が初め
 てなれば、其心持のよきと何に譬へん様もなく、喜れしさの餘り躍り出さんどしたりしが、迂濶な事し
 て失策りては、折角樂園に入りながら、逐ひ出されるも知れずと、漸く心を静めて、先づ鏡に向ふて
 余が姿を見るに、部屋のうちくしさが爲めか、レオンハルドより貴しき燕尾服、一層高尚に、余が顔
 さへ在りし古昔の、日に焼けて赤く黒かりしに似ず、今はミルン色に、口元に髭さへ少し生へ出て、
 宛然當世の貴公子、伊太利に来れば、容貌まで立派になるか。
 程なく老女に替はりて遣入り来りしは、年若き顔よき女中、余を食卓の椅子に導きて、肉を勘め酒を
 注ぎ、残る方なき取あつかひに、食物も一層味ひよく、何程も欲しき様なれど、愛想つかされてはと、
 八分目程に止めて、最早充分なる旨を、手眞似にて告ぐれば、女中はうなづき、直ちに手燭に火を移

して、他の部屋へと導かれ、其處も中々うつくしき部屋にて、左手の壁に寄せて安樂椅子、右手の窓下に小さな姿見鏡、真中に清らかなる寐臺、窓は何れも緑色の絹布をかけたなり。此處に寝るのかと手眞似にて問へば、

『左様でございます。』

と、獨逸語にて答へたり。此れはうれしと、尙種々獨逸語にて問ふて試みるに、後は知らぬか、何を云ふても只莞爾と笑ふのみ。

余は寐臺の上に横たはられたれど、女中は其處に、釘にてうちつけたる如く、立去らんとせねば、余は容易に眠られず、終に堪えかねて部屋を出て、以前の食堂に至りて、酒とコップを持ち來り、残り酒を飲み盡して、其勢ひにて寐臺の上に横たはりしか、暫時くは、今にも喇叭の聲の聞ゆるかと、安んずる心もなかりしが、其の氣色もなきに、や、安心して將に眠らんとする時の、最後の目撃までは、女中の姿余が傍にありしが、これより後は前後も知らず、酒氣に促がされて、華胥の夢に入りぬ。

(六) 手紙

翌朝目を覺ませば、旭已に緑の窓かけを透して、壁にかけある鏡に輝きぬ、熟々思ひ廻らせば、昨日小路を曲りてよりのと、總て夢の如く現の如く、今も尙魔法使に弄ばれ居るにはなきかと、暫くは床の中にて心配の淵に精神を沈めたり。

終に起き上りて衣服を纏ひ、部屋の周囲を見廻はすに、一方の壁に、同じ壁紙にて張りたる戸一枚立かけあるに。昨夜は少しも氣づかざりしに。不審しく思ひながら、立寄り見れば、其處は隣の部屋に通ふ出這入口なり。戸を取除けて内を伺へば、少し薄暗らけれど、奇麗なる部屋にて、傍の椅子に脱ぎ捨てたる女の着物、しだらなく掛けありて、真中の寢臺に、昨夜余が給仕に出たる女中、未だ目覺めず、前後も知らず眠り居たり。部屋の有様と云ひ、女中の様子と云ひ、益々不審に堪え兼ねれど、又何となく床しくて、

『昨夜此處の開て居るとを知つて居たから……』

と、獨語ちつ、譬へ如何なる女にもせよ、人に寢姿を見られしと知らば、後にて耻づかしく思ふべくこれも、罪なと、又元の如くに戸を立かけ置き、余が寢室にかへりぬ。

や、時を經れども、城内尙寂として、人の起き出たらん様子もなく、鬱蒼と茂りし庭の木の間、鳥の囀る聲のみ、余は退屈に堪えかねたれば、やかに胡弓を手にして、暫時の間鳥と共に歌ひ樂しま

んど、長さ廊下を通り抜けて底に出でぬ。
 荒れたるまゝに、拂はぬ底の、木下は落葉に堆たかく、圓く掘り下げたる墳水の池も、今は水絶えて
 周囲の敲くづれ、艸は一面に生む茂りて、露重たげに路を埋め、處々に立てある女神の立像も、或は
 手なく或は頸なく、或は片足の折れたるもありて、一も満足なるはなく、神の威光も荒れたる底には
 及ぶるが如し。在りし古昔は知らぬ余なれど、殘る面影に、嗚なと思ひやりつゝ、うねくど次第に
 高くなり居る小路を辿りて、築山の上に登り、暫く四方を眺めて、應てそれを下りて、尙奥深く進み
 行きつゝ、遙かに彼方を眺むれば木枝借屈縦横にはびこりて、殊に年古りたると思ふ、松の木の下
 を、逍遙する年若き男、遠目なれど色白く長高く、長き黒色の上着を着て、手に一冊の書物を携へ、
 讀みては歩るさ、歩るさては讀み、或は聲高く、或は低く。余一人と思ひし庭の内に、圖らず人を見
 出したるとの珍らしく、余は急ぎ近寄りて言葉をかはさんとするに、彼は余が姿を見るや否や、遽に
 狼狽えて、彼方此方に逃げあるさ、終に藪の中に姿を隠しぬ。
 『待てく』
 ど、呼びつゝ、余は後を追ふて探せど、一向見當らねば、今は詮方なきまゝに、一人苦むしたる石の
 上に腰かけ、胡弓を取り下して、一曲を奏し初めたり。

玲瓏たる響、俗塵を離れて、遠く谷間に澄み渡り、余が精神も他事を忘れて、弾きすすむ折から、例
 の老女余が傍に來り、手眞似にて食事の用意と、なふたる旨を報らすれど、余は知らず顔に、尙胡弓
 の手を放さねば、老女は再び勸めもせねど、亦去りもせず、其處に立止り居て、胡弓の音に耳を傾け、
 感に堪えたる有様なり。追ひくゝに老人も來り、女中も來り。何れも余が周圍に立ちて、斯くまで
 余が胡弓に巧なるを、初めて知りて驚けるもの、如く、熱心に聴き居たりしかば、余は一層心を込め
 て、音調の抑揚に意を注ぎ、妙手を盡して弾き終りぬ。

應て食事も終りたれど、乗車を催促かず喇叭の聲も聞えず、總ての様子旅人宿とも見えねば、それと
 なしに女中に問へば、或る高貴なき貴族の所有なりと云ふとは分りたれど、何と名のる人なるやは、
 知らずとて云はず。例の年老ひたる女に問へば、何時も只ニヤ／＼と笑ふて、事を他にまきらしぬ。
 氣づかひの内に其日も暮れしが、夕刻になれば、宿料を請求するに、此處にては其事もなく、酒にま
 れ煙草にまれ、命するものは直ちに持ち來りて、何一つとして不自由あるとなく、實に其わしらびの
 丁寧なるに、余は不審に堪えざりしが、それにも増して尙不審に堪えぬは、何時も夜に入りて、曉ま

で待たる、月の、未だ出てぬ眞の闇に、余が寢室の窓下に當りて、三絃琴の音聞ゆると共に、

「コレ」

と、呼ぶに、余は急き起さ上りて、窓より頭を出し、

「誰だ。」

と、問へど答へはなく、闇にすかせは、黒き人形の急き彼方の藪に逃げ入る足音のみ、跡は又静に四邊寂たり。

左れど種々の心配も暫時の間に、今は人々余が寢中に、一文なきことを知りたれど、尙以前に變らず、丁寧に待遇して、日々山海の食事を與へ、夜は柔かき寢床に伏さしむれば、余がかねて空想に盡きし、貴公子の生活を、今日實地に味ふとを得る心の愉快、何に譬へん様もなく、伊太利には寢て居る口に、自然と干葡萄酒が落ちて來ると云ひしは、此處のとど悟りぬ。

或る日の午後、空に村雲さわぎて、蒸しあつければ、胡弓を手にして庭に下り立ち、木蔭の冷しき處にて遊ばんと、彼方此方にたゝすみて試れど、何處も吹く風絶えて、蜂の鳴く音も聞かぬ、暑さに、よき涼み場所もがなと見廻せば、傍に木枝茂りたる高き樫の立木あるに、

「此の上」

と、獨語ちつ、直に梢によぢ登りぬ。

有葉に高ければ、少しは風も來て冷しきに、木の股に腰うちかけて四方を眺むれば、立續く山々線深く、遠きは日影うけて紫に、静けき野面に行く人絶えて、羽重た氣に舞ふ燕二三羽。

折から遙かに聲ゆる喇叭の響。聲する方を見れば、過る夕暮、此家に來る時に通りし野面の小路を、此方に驅け來る郵便馬車、久しく乗り慣れしなつかしさに、暫く眺めてあれば、繼て山の麓にかくれて見えすなりぬ。

後には又通るものもなければ、最早景色も眺めあきて、胡弓を取て、良長き一曲を歌ひ出たり。聽てそれを終りて、不圖耳を聳たつれば、喇叭の聲次第に近づきて、今は烈しく城内に響き渡りぬ。余は急き木より下り、部屋に歸らんとて、階段を登り、家に這入る途端、例の年老ひたる女の、小さき革靴下げて來るに出合ひしが、行き過ぎんとする余を急はしく呼び止め、革靴より一通の書狀を出して、余が手に渡しぬ。

上書はなけれど、余に渡したるものなれば、余に來たるものに相違あるまじと、急ぎ封を切りて、一目見るや否や、ハッと思ふて動悸うつと共に、顔火の様に赤くなりしを、其時迄傍に居りし老女は、不思議さうに我が顔を眺めて、頻りに手紙をのぞき込みぬ。

何故斯くありしかと云ふに、是ぞウヰーンの屋敷に在る頃、床かしたづかしと、片時も忘るゝ間のなかりし、彼の貴女より手紙なりき。見られしとそひけあがら讀み下すに、其意味は、
 今は總ての妨害相のさ候へば、染みくお話し致す折も出来候、御立退きの後は何となく物淋しく、獨り思ひにあくがれ居候、是非とも都合して、一日も早く歸り來ませ、なづかしき御顔見もし見せも参らすべく候。

アル子リーより

とあるに、余は嬉れしとの餘り思はず身振して、其手紙を推し頂けば、老女は余が有様を見て、其處に倒け頼れて笑ふ。流石に耻かしくて、其處を驅け出で、庭の藪かけに隠れ、人目を避けて、又其手紙を繰り返しぬ。

幾度讀みても、意味は違はず、確に彼の貴女の筆なれば、いよく心嬉れしと共に、又不審に堪えぬは、何時ぞや舞踏會の夜半、露臺の上にて親し氣に話し居たりし武官、如何に考ふるも、曾ならぬ交情と見たりしが、扱は兄弟なりしか、若し戀人ならば、已に亡き人の數に入りしものかと、種々に思ひわづらひたりしが、終に、

「エッ、それは何方にしても好いか、免に角余れに惚れて居るには違ひない。

と、獨語つゝ立上りて、藪中より出れば、日影已に傾きて端山赤く、夕告鳥の聲哀なれど、余が耳には笑ふが如くに聲えぬ。

部屋に歸るや、急ぎ女中を呼びて、今宵の夕食は、庭の草原に設けて、昔の者と一所に食ひたしと、頼めば、承知したる旨を告げて出で行きぬ。程よく用意整ふたりと告ぐるに、連れ立ちて庭に至れば、例の老人も老女も、女中等も、彼の年若き男さへ、同ト席に連なりて、已に食卓に扣え居たり。

或は食ひ或は飲みて、一同苦心浮き立ちし頃、余は胡弓を取り寄せて、面白き躍りの曲を弾き出しぬ。初の内は何れも感に堪えて聞き居たりしが、終に女中等は浮かされて、互に手を取り合ひ、足調子を揃へて躍り出したり。

余もそれにかかれて、一層調子に乗り、勢ひよく弾きすさめば、女中等はいよく熱心に躍り狂ひしが、應て曲も終れば、女中等も躍りを止めて、流るゝ汗を拭ひつゝ、互に顔を見合せてドツと笑ふ。それよりは一坐皆興に入りて、笑ひ語る聲遠く向ふの山に響く程なりしが、例の老人は余が傍に近く來りて、何故常になく余が斯く楽しく喜び騒ぐかを語りぬ。折から夕の柵樓に急ぐ鴉二三羽、余等の上を舞ひ過ぎしかば、口には何ども答へで、余は笑ひながらそれを指しぬ。老人は其意味を解したりや否や、不愉快なる眼にて、暫く余が顔を眺め居たりしが、其時又女中等は、余を取かこみて、右左

より、今一曲と所望して止まねば、老人の方は其儘に、再び胡弓を弾き初めたりしが、それも程なく
 噪きの中に果てぬれば、今は次第に夜更けて、人々も大方疲れたる様子なるに、余は席を離れて、部
 屋に歸りぬ。

寢臺の上に横たはりはしたれど、貴女よりの手紙の事を思ひ續けて、嬉れしさと、又一ツは如何にし
 て此處を出で行かんかと思ふ心配にて、暫くも暇は合はず。聽て起き上りて、窓に倚り、外の方を眺
 むるに、空は黒雲掩ひ重なりて、星影一粒も漏れぬ眞の闇、夜風庭の木梢を拂ふて、何となく物凄さ
 夜半、不剛耳を聳つれば、遙か彼方にて何やら人の低語き合ふらしき氣色。恐氣立ち居る折から、余
 が心の迷より、木の葉の風に飄らるゝ音が、其様にきこゆるか、と思へば、萬更左様でも無さが如く、
 氣味悪く思ひながらも、尙様子伺へば、駭陰より現はれ出る怪しき物、上部は隠れて見えぬ、脚部
 のみ臙臙と、極めて静に、何事か頻りに低語き合ひつゝ、此方に 歩み來るに、余は頭より冷水を浴
 せられたる如く、全身戰慄したりしが、恐ろしき物は尙見たく、去も得せで見えてある内に、突然パツ
 と明るくなりて、確と見らるゝ二人の姿、例の老人と老女にて、今迄老人が上着の裏に包み居たる、
 提灯を取出して、老女の手に渡したるにてありき。

是れにて怪物の正體は現はれ、良安心する間もなく、尙仔細に伺へば、老人は右の手に、一尺斗りの

鋭き短劔を持ちて、動かす度びに、キラ／＼と提灯の光りに輝くのみか、二人低語きつゝ、此方に近寄
 る間に、折／＼余が部屋の方を、凄き眼して睨むらしさに、今は恐ろしさに堪え切れず、戰慄く足
 を踏みしめて、部屋の片隅に身をひそめ、呼吸を殺して、踞蹲り居り。

暫くは何の聲もなかりしが、聽て段を上げる音して、次第に此方へ近寄り、終に余が部屋の戸の前に止
 まりぬ。いよく余が身の上と、今は一生懸命、傍の机に手をかけ、音せぬ様に戸の前に持ち行か
 んとする途端、黒闇なれば足元見えず、椅子に突かゝりて、其れを倒し、烈しき響を立てたるに、ま
 す／＼慌て、漸／＼のどにて机を戸の前に据え、余が力をも添へて、開かぬ様に押え、耳を戸につ
 けて、外の様子を伺ふに、何の聲もせず、内外静に、天井より舞ひ下るゝ蠅の羽音、明らかに聞るゝ
 程なりき。

扱は最早立ち去りしかと思へど、尙油斷せず、有る限りの力を出して、開けられと押え居たりしに、
 聽て鍵の穴に鍵を差入るゝ音して、靜に三度まはし置き、足音かすかに、再び措き段を下り行きたり。
 幸に眠らでありしが爲め、目前の虎口は遁れたれど、今は、異郷に捕はれの身となりて、出で行かん
 道もなく、夜明けなば、又如何なる憂目に會はんも知れず、若しや此儘此處に身を果す様のとありて
 は、貴女はそれとも知らず、余が歸りの遅さを待ちわひ、焦れ死に死にやすらん、少し間後れてだに、

も、無益の心配するは、不憫のと、明日は未明に此處を抜け出で、一日も早く歸りつき、なづかしき貴女の顔を見もし見られもせんと、竊かに心組して、左れども今迄共に暮せし、此家の人々との別れも惜しからぬにもあらねば、廣庭にて同席に飲食し、余も心の限り打解けて、それとなしに告別の意を示せしが、今は返つて仇となり、斯る災害を招きぬると、返すくもくやしけれど、聲を忍びて暫く床上に泣き居たり。

折から例の如く余が窓下に起る三弦琴の響き、余はそれを聞くも等しく、何となく勇氣つきて、急ぎ身を起し、窓より顔を出して、

『誰れだッ』

と、問へば、帯にも似ず、

『来ッ』

と、四邊を忍ぶ小聲にて答えたり。果して余が味方が敵かは知らねど、今は其等を考ふるに暇なく、急ぎ胡弓と貴女の手紙とを探り取りて、窓より身を出して、這いつきたる蕪かづらにとりつき、煉瓦の抜け落ちたる凹みを、探りく足場に、幾度もなく這らんとしては、膽を冷しつゝ、輕うたてやうく地に足の届くや否や、余が身體を確と抱くに、思はずアツと、聲立る余が口に手を當て、慌て

... 苦み... 三四間彼方に連れ行て、其處に下るしぬ何人かとすかじ見れば、... 余が手を取りて、... 年若... 何故又彼が余を授けしか、不審に堪えねば、事の理由を細かに尋ねん... 年若... 余を向... 追手の者よと心付きたれば、斯くて迂闊に此處に居て、再び捕まれば、折角此處迄逃れ来りしも、無益となり果つべしと、急ぎかけ出したる。... 炬火の

も、無益の心配をするは、不憫のと、明日は未明に此處を抜け出で、一日も早く歸りつき、なづかしき貴女の顔を見もし見られもせんと、竊かに心組して、左れども今迄共に暮せし、此家の人々との別れも惜しからぬにもあらねば、廣庭にて同ト席に飲食し、余も心の限り打解けて、それどなしに告別の意を示せしが、今は返て仇となり、斯る災害を招きぬると、返すくもくやしけれど、聲を忍びて暫く床上に泣き居たり。

折から例の如く余が窓下に起る三弦琴の響き、余はそれを聞くと等しく、何となく勇氣つきて、急ぎ身を起し、窓より顔を出して、

『誰れだッ』

と、問へば、常にも似ず、

『来ッ』

と、四邊を忍ぶ小聲にて答えたり。果して余が味方か敵かは知らねど、今は其等を考ふるに暇なく、急ぎ胡弓と貴女の手紙とを探り取りて、窓より身を出して、這いつきたる蒸かづらにとりつき、煉瓦の抜け落ちたる凹みを、探りく足場にし、幾度となく迂らんとしては、臆を冷しつゝ、輕うとてやうく地に足の届くや否や、余が身體を確と抱くに、思はずアツと、弾立る余が口に手を當て、慌て

もが余を、苦もなく抱え上げて、三四間彼方に連れ行て、其處に下ろしぬ。何人かどすかじ見れば、闇にも色白さ例の年若き男なり、余は嬉しく、幾度となく頭を下けて、今斯様々々の譯なれば、何卒援けて呉れよと頼めば、彼は已に様子知り居たりしもの、如く、別に驚きもせず、余が手を取りて、木の間を過ぎ敷かけをくぐり、急ぎ導き行きぬ。

懸て城門の傍に來りしが、見れば門の戸は堅く閉ちてゐると、如何するらんと余は氣遣ひしに、年若き男は、隱蓐を探りて、太やかなる錠を出し、錠をはづして左右に開き、難なく門を出てたり。

此處まで來れば最早大丈夫と、ホッと一呼吸吐きて、丁寧に其厚意を謝し、それにしても何故老人二個が、余が身を害すはんとし、何故又彼が余を援けしか、不審に地えねは、事の理由を細かに尋ねんとする時、城内何となく騒かしく、人の呼ぶ聲驅け廻はる音。遙かに聞ゆるや、年若き男は、余を向ふへ突き遣り、門の戸を内よりハツツとべめさりぬ。

騒きは次第に近くなりて、今は手に取る如く聞ゆるに、扱は追手の者よと心付きたれば、斯くて迂濶に此處に居て、再び捕へられなば、折角此處迄逃れ來りしも、無益となり果つべしと、急ぎかけ出したり。

木の根ども云はず、石ども云はず、飛越えく一散に驅け行きて、懸て後ろを振り返れば、炬火の

光り、彼方此方に馳せ違ひ、恰も雲の飛ひ交はすに似たり。

(七)

羅馬府

恐ろしさに何處も目的も無く、只一散に驅け出せしが、夜一夜、走りつめに、漸く曉近くなる頃には、身體勞れて、最早一步も進み難く、追手も此處まで來る氣遣はなしと思へば、傍の捨石に腰打かけ、次第に曉け行く薄明りに、四邊の景色を眺むるに、何處を果てとも知らぬ山脈の、遠く立ち並び、或は高く雲を突くもあれば、或は低く霞を帯ふるもあり。見下ろす谷間は、斷崖深く削りなして、見る目眩まんばかりに、尺にも足らぬ樵路は、苔滑らかに足を取りて、一步を過たば、千仞の谷に落つべし。四面年古りたる大木、枝密に生ひ茂りて、木下は熊笹はびこり、かすかに狐兔の通路を窺しぬ。

道を問はんにも、會ふ人なく、況して傍には家もなく、食物を乞はんよしもなければ、木の果を求め谷川の水をすゝりて、先づ飢えたる腹を肥やし、兎も角も人里に出でばやと、心細くも、山路を辿り行かぬ。

行けどもく、里に近づく氣色もなく、相も變らぬ山路の險しさに、果ては行き勞れて、如何せんと其處に打伏して、泣き叫べど、四方に聲するものとは、松の梢を吹く風の音のみなるに、又思ひ直しては必を勵まし、枝にすがりて行けど、足の運びも捌とらず、早太陽西山に傾きて、暮れ近くなりぬ。

驚るゝまでも、人里ある處まで辿りつかずば、斯る山中に、或は獸の餌となるも計られずと、尙勇氣を勵まして、随分險阻なる坂路を、已に機器的に登り行き、漸くの上にて高臺に達すれば、遙か向ふに一廓の町見ゆるに、余は喜れしもの餘りに、思はず絶叫せしが、其聲遠く谷間に響きぬ。

遽かに町の目に入りて、忽ち足重きを覺え、今は一步も運びかねたれば、暫く其處に休みて、左にても何處の町あるらんと、熟々眺むれば、建て連ねたる家々縁深く苦むして、縦横に行き通ふ大路小路は、布きつめたる石の上、洗ひし如く清らかに、雲を貫く寺院の塔、夕日に輝く大理石の立像など、町の有様何となく古色を帯びて、幼なかりし時牧師の内にて、書に見、話に聞きたる羅馬府の景に似たり。

一度羅馬府に遊はんとは、余が生來の希望ありしに、路に迷ふて、思はずも日頃戀ひ慕ひぬる名都に來るを、其喜ひ何に譬へん様もなし。未だいよくこれども定かならねど、若し違ふたりとて、兎に

角人ある町に相違はなければ、先づ行ての後に、此後のとを計らんと、又起き上りて、歩を運はせぬ。行くと五六町にして、道兩ツに別る。道標建つも、伊太利語らしければ、余には解しかねたれど、「羅馬府」の文字丈は、確に讀みどりぬ。

愈々羅馬府と知りては、一層勇氣つきて、急に足の輕さを覺え、一向急ぎ行くに、次第に町に近寄るにつれて、二三の人に會ひぬ。一は人珍らしさと、一は日頃戀ひ慕しひ羅馬府の人と思へばなつかしさに、會ふ人毎に丁寧に禮して行過ぐるに、中には不思議さうに余が顔を眺めて過ぐるもあれど、亦微笑みつゝ、禮を返して行く人もありき。

廓内に入りし頃は、日全く暮れて、家々の窓より燈火さして、人通も稀なれど、往來の清らかなるは夜目にも知られて、兩側に植え並へし樹木は、露を帯ひて緑深く、其處此處に建つ女神の立像は、瓦斯燈の光を受けて白く、其景何となく幽邃にして閑雅、實に歐洲の仙境とは見えし。何處と目的もなけれども、尙足に任せて眺め歩行くに、應て建家疎なる邸宅町に出でたりしが、廣やかなる往來の真中には、墳水盛に、彫りたる獅子の負へる水盆に迷りて清く、周圍には柳緑に、垂葉長く水を撫て、涼しさ云ふばかりなく、其真向に當る一掃の屋敷、太やかなる柱、堅く閉ちたる鐵の門、古びたれども古昔床しく、尙金色燦爛として、水壇の水に映し、塀は煉瓦の上に鶯かつら通ふて、今は地を見せ

す、四邊の眺めの面白さに、余は暫く其處に佇立みて、去も得せである折から、偶々其邸内にて高らかに響く唱歌の聲、好める道とて、余は直に耳を聳つるに、思ひきや余が嘗てウヰーンの邸にて、最とよく歌ひ慣れたる「戀の歌」余は思はず立上りて、門の傍に走り寄り、耳をよせて尙よく聞けば、其聲の抑揚の工合、余に手紙を與へたる貴女の聲に、如何にもよく似たれば、余は驚愕と喜悅とに心狂ふて、長く考へ居ると能はず、直ちに鐵門をよち登りて、邸内に這入りしが、諸姿は何處と、聲を知邊に、露深き芝の上を、靜に歩み行くに、遙か彼方の白楊樹の下に、白き薄衣着たる女の姿、月光に透し見れば、全くそれに違はぬ様なるに、余は忘れて小走りに急ぎ出せしに。彼方にて余が姿を見とめしか、唱歌を止て、家の方に走り行く。余は覺えず、

『ア、アレ、彼れに違いな。』

と、叫びつゝ、追いつかばやと、足を早やむれど、先刻に門を越えし時、僅かのとなれど、挫きし足の痛くて、終に及ばず、貴女の姿は家の内に隠れて、戸はハツタリ鎖されたり。如何に叩けど、呼べど、何の答もなく、暫く様子を伺へば、何やらん耳語さ合ふて、スヌク笑ふ聲聞えて、傍の窓よりは、萌黄絹の窓かけの隙間より、四の眼此方をうかゞふ様子、臆氣に見らるれど、戸は開かず。猶は余なることを知らねば、斯く姿を隠すなるべしと思ひ付きたれば、應て胡弓を取下して、何時ぞや

ウヰーンの邸にて弾きし如く、余が覺え居る「美人の歌」を、有るだけ歌ひ盡さんと、弾き初めぬ。弾く程に歌ふ程に、夜は次第に更くれど、再び戸は開かず、果ては余も勞れて、手にふり聲かれて、終に前後も知らず寢入りぬ。

朝風に煽られて、ホタリと落る木梢の露、顔を濡して、不圖目を覺ませば、余が身は見も知らぬ庭の、白揚樹の根元に、胡弓を枕に伏し居るに覺きて、余知らず飛び起きたりしが、漸くにして昨夜のことを思ひ出し、四邊に眼を配れば、昨夜見しにも似ず、庭は卿も拂はぬまゝに荒れ果て、屋根は瓦礫に落ちて、軒には忍草生ひ茂り、窓より内をのぞけば、机の奇麗なるに、白色の布かけありて、周圍に五六脚の椅子並べあれど、人は居ず、其様何となく、過る日逃げ出し古城に似たり。斯くと思ひ出ると共に、老人の頭、手に持ちたる劔、胸に浮びて急に恐氣立ち、昨夜の白衣着たる婦人、かすかに聞えし笑ひ聲、今更思へば身の毛戰慄つまで恐ろしく、直ちに踵を返して、飛ぶが如くに走り行き、漸く門を越えて外に出でたり。

未だ早朝にて人通もなければ、門を越えしを人に怪まれもせず、彼の憤水の邊に立寄りて、顔を洗ひ

口嗽ぎ、漸く動悸は納まりたれど、思ひ廻せば、日頃の望み通り、千年の古昔より名高き都に、來るとは來たりしもの、何處に行かんの的てもなく、尙其處に停止みて、茫然として水の面を眺め居る折から、靜に後より余が肩を叩きて。

「何をしてお在さるか。」

思ひがけず、斯る異郷にて、獨逸語を聞きしこの嬉しさに、余は急ぎ振り返りて、其人を見るに、未だ一見識もなき、年若き男なれど、なづかしさに堪え兼ねて。

「是れはく、不思議な處でお目にかゝりました。」

と、云へば、男は笑ひながら、余が姿を下から上まで、熟く見終りて、

「はるく、と、此羅馬府まで、何用で來られたのか。」

實はアウレリー女に手紙を貰ひ、怪しき古城をぬけ出て、ウヰーンに歸らんと思ふ道すがら、道に迷ふて此處へ來りしとも云ひかねて、

「別に用立てはござりませぬけれど、人の話に羅馬府の美麗さを聞き、世界漫遊の途中、先づ此處に立寄りました。」

「世界漫遊も私も世界を漫遊して、國々の名所舊跡を看がら歩行くものだから、

「それでは貴公は書師で、

「如何にも書師？就ては貴公に少し頼みたいとがあるが、聞いてくださるぬか。

「一體何の様なこと。

「ナニニ譯もなうとぞ。

「私の身に出来まるとなれば。

「聽てくださるか、それは難有い。

「シテそのお頼みは。

「此處では云はれぬ、私と一所に来てくだされ。

と、打連立ちて、尙種々と談話しなから、右に折れ左に曲り、大路小路を辿り行くに、未だ時早けれ

は、門戸固く鎖して静に、たまたまかに、眠気眼の下女が、窓開けつゝあるを見るのみ。

馳て或る町の熳りたる家の前に来りぬ。書工は音訪ひもせず、進み入るに、余は少し躊躇して、道人

かねたるを、書工は振り返りて小招きし、

「構はずお這入りなさい。

と、云ふに力を得て、後より従ひ行き、楷子段を登るに、其高さと、雲に入るかと思ふ程、漸く上り

詰むれば戸あり。書工は隠蓑より鍔を取出して、錠を外つし、戸を開きぬ。

内に這入れは、天井なき長き部屋にて、巾も充分廣く、一群の舞踏は確に出来得へしと思はる。真中

には三脚を据えて、それに木匡に張りたる、大なる書布を立かけ、傍の机の上には、紙切れ、繪具、

書筆など、縦横無盡に錯亂れて、二三枚の衣服、脱ぎ捨てし、片隅の旅革靴の上に重ねてあり。書

工はそれらには少しも頓着せず、部屋に這入るや否や、直に往來に向ひし小窓を開きて、冷しき朝風

を客れ、最古びたる椅子を出して、余に與へ、己れは寫景用にもちゆる床机を組み立て、それに腰かけ、

余に向ひて、

「貴公は朝飯を食ひましたか。

「否、未だ食ひませぬ。

「私も未だ食はぬから、それでは先づ飯を食ふてからのとにしましやう。

と、云ひつゝ、机の下に入れある行李より、紙につゝみたる鮑包と、鐘詰の肉と牛酪とを取出し、

「サア、遠慮せずにお食いなさい。

と、云ひ捨て、又彼方の隅に行き、何やら頻りに探す様子、余は昨夜より何一ツ食はねば、今は

空腹に堪え難き折から、

「吾は朝飯を食ひましたか。」
「如何にも書師の職は貴公に少し頼みたいとがあるが、勝つてくだらぬか。」
「一體何の機をなす。」

「私に頼もなす。」
「私の身に出来ぬ事なれば。」
「勝つてくだらぬか。」

「此處では云はれぬ。私と一所に來てくだされ。」
「打連立ちで、何種をも談話しながら、右に折れ左曲ぐ、大路小路を辿り行くに、未だ時早けれは、門戸固く鎖して静にたまたまに、眠氣眼の少女が、窓開けつゝあるを見るのみ。」

「此處では云はれぬ。私と一所に來てくだされ。」
「打連立ちで、何種をも談話しながら、右に折れ左曲ぐ、大路小路を辿り行くに、未だ時早けれは、門戸固く鎖して静にたまたまに、眠氣眼の少女が、窓開けつゝあるを見るのみ。」
「此處では云はれぬ。私と一所に來てくだされ。」
「打連立ちで、何種をも談話しながら、右に折れ左曲ぐ、大路小路を辿り行くに、未だ時早けれは、門戸固く鎖して静にたまたまに、眠氣眼の少女が、窓開けつゝあるを見るのみ。」
「此處では云はれぬ。私と一所に來てくだされ。」
「打連立ちで、何種をも談話しながら、右に折れ左曲ぐ、大路小路を辿り行くに、未だ時早けれは、門戸固く鎖して静にたまたまに、眠氣眼の少女が、窓開けつゝあるを見るのみ。」

詰むれば戸あり。書工は隠蓑より鍵を取出して、錠を外つし、戸を開きぬ。

内に這入れは、天井なき長き部屋にて、巾も充分廣く、一群の舞踏は確に出來得へしと思はる。真中には三脚を据えて、それに木匡に張りたる、大なる書布を立かけ、傍の机の上には、紙切れ、繪具、書筆など、縦横無盡に錯亂れて、二三枚の衣服、脱ぎ捨て、片隅の旅革靴の上に重ねてあり。書工はそれらには少しも頓着せず、部屋に這入るや否や、直に往來に向ひし小窓を開きて、冷しき朝風を容れ、最古びたる椅子を出して、余に與へ、己れは寫景用にもちゆる床机を組み、それに腰かけ、余に向ひて、

「貴公は朝飯を食ひましたか。」

「否、未だ食ひませぬ。」

「私も未だ食はぬから、それでは先づ飯を食ふてからのとにしましやう。」

「云ひつゝ、机の下に入れある行李より、紙につゝみたる麵包と、鎌詰の肉と牛酪とを取出し、

「サア、遠慮せずにお食なす。」
「云ひ捨て、又彼方の隅に行き、何やら頻りに探す様子、余は昨夜より何一ツ食はねば、今は空腹に堪え難き折から、

『それでは遠慮なしに頂きます。』

と、三いつ、イヤ食はんどすれば、肉刺も小刀もなきに、有撃手づかみにも食ひかねて、

『先生！小刀は何處にありますか。』

と、問へは、

『其處に在るはづだが。』

と、云いつ、麥酒の壘とコップを両手に下げて持ち來り、元の坐に返りて、

『ありませぬか。』

と、云いつ、余を援けて、机の上の紙をかき除け、繪具板の下など、隈なく探せど見當らず。見ぬ内は未だしも、生睡の出る空腹に、食ふとも出來で、小刀探し居る苦しみは、餓饑道に落ちし亡者が、眼前に食物を見せびらかざる、苦痛も、斯くまでにはと思はじ。終に余は堪え兼ねて、

『先生！これで間に合せませしやう。』

と、筆の柄を出して、許可を得んとすれば。

『ママお待ちなさい、有るに相違ないから。』

『アモ、最早こらえ切れませぬ。』

『其の様に欲食うござりまするか。』

『誠に久し振りなので。』

『久し振り？ 昨夕もお食なされたらう。』

『實は、昨日一日食ひませぬ。』

『一日食はぬ？ それはえらい………タガ世界漫遊でもする者には、其位のとばあるはづと、私等も何だか其の様な目に遇ひさうだ、ハッ……』

と、大口開いて笑ひながら、尙も彼方此方探して、不圖机の引出をひきたして、

『有つたく、此處に有つた。』

と、取出すを見れば、食事用の小刀にはあらで、先の尖りたる小刀の、鉛筆の墨及先につきたるを、其儘に渡しぬ。余はそれを受取るや否や、墨を拭ひもせず、直に麩包を引寄せて、三ツ四に切り、牛酪を塗る間もどかしく、余を忘れて喰ひ付きぬ。畫工はコップに酒を注ぎながら、余が有様を眺めて微笑みつ、

『成程、欲食しかつたらし。』

と、獨言の様に云ふて、注ぎし酒を一息に飲み終り、コップを余に指し、

「左様食ふてばかり居すと、一杯お飲みなさい。余は含みし飽包を漸く飲み下し、

「酒は一向いけませんぬ。」

「麥酒が飲めねば、獨逸人ではないぞ

と、云ひつゝ、余が否むも承かず、波々一杯注ぎて、己も食事を初めぬ。

聽て畫工は、切りたる肉を小刀の先ぎに貫らぬて、片手に持ちながら、片手に彼方の山を指さし、最熱心に、

「御覽なさい！本國は、丁度彼の山の後ろに當つて居るが、お互に斯く遙々と旅地に出ては、朝な夕な、古郷の空なづかしく、一日も思ひ出さぬとてはなし。」

「如何にも。」

と、余は簡單に問の楔をうては、畫工は尙も言葉を續ぎ、

「併し又伊太利の朝景色は格別で、殊に吾々の商賣には、何程利益を得るか知れぬが、實に世界の樂園とは、能く評したるものサ、ハ、ハ、ハ、ハ、」

と、放笑一番、實に世事に頓着せぬ美術家の眞性を現はしぬ。其仕打大に余が意に協ふたれば、余は思

はず机を叩きて、

「嗚呼愉快

と、叫べば、畫工は再び莞爾として、余が顔を見、

「最早よろしいのか

と、問ふには答へで、靜に腹を打ちて満腹の意を示せば、

「ソム 面白く。」

と、云ひつゝ、傍に注ぎわりしコップの麥酒を 一口にグツと飲み干し、

「私も充分だ。」

と、コップを下に置きぬ。

それにて食事終り、今は腹も満ちぬれば、窓の傍に立寄りて眺むるに、此處は三階なれば、殆んど羅馬府一面見渡されて、昨日の暮方余が初めて、此町を見たりし岡と思はるゝ邊まで、朝霧の絶間に見られぬ。畫工は其間に頻りに其處等を片付け居たりしが、聽て小刀にてチョークを尖らしながら余が傍に來り、共に外の方を眺めて、

「好い景色である。」

「何とも云へませぬナ。」

と、答へれば、書工は手に付きしチヨリの粉を吹き拂ひ、

「何時まで見たとて、厭きはせぬから、後でゆるりと眺めるとにして、先づ用を済ましてくださら

と、云はれて、初めて用ありてこそ、此處に連れ來られしを思ひ出し、

「左様く、忘れて居りました。」

と、云へば、書工は笑ひの内に余が顔を覗めて、

「それはあまり現金すぎる

と、云ひつゝ、例の古椅子を、書絹の立てかけある臺より、良隔りたる柱の邊りに据えたり。余は不審

に堪え兼ねて

「先生！如何なさいますか。」

と、問へば、

「貴公の顔を寫すのだ、

「エッ、あの私の顔を？」

「左様！

「それは、御免を蒙ります。」

「何故く、反て喜んで貰はねばならぬ。」

「それは又如何云ふ譯で。」

「左ればサ、

と、云ひつゝ、何やらん獨り喜ぶもの、如く、笑ひながら、立かけある畫布を指さし、

「マア、之を御覽なす。」

それを見れば一幅の墨畫にて、最古びたる馬小屋の内に、美麗しき女が物思はし氣に、外の方を眺め居る傍に、未だ幼稚き綠聲が、情しき眼して、藁の上に横はり居るを、二人の牧者が脆坐さつゝ、拜み居たる、其一人は未だ顔なけれを總ての筆意凡ならず、巧みに畫きなせり。其畫の様、余が幼き頃村の牧師の宅にて見たる、基督降誕の畫に趣似たれば、

「これは救主が生れた處の畫ではありませぬか。」

と、云へば、書工吸ひかけし煙草を、灰皿の上にとり消して、

「如何にも其通り。就ては其の首のなす一人の牧者の顔を、何う畫いてよいかと、苦しんで居る折から、昨日貴公に會ふて……………」

ど、云ひさして、後は云ひ悪く氣に口籠りしが、聴て微笑みつゝ、

「恐つては困りますよ……和氣驟然たる貴公の顔が、實に其人物を寫し出すに適當であらうと思ふて、其故貴公に頼んだ譯なので。」

ど、云ひ終りて、此度は儼然として、一段調子を高め、

「その代りに、貴公の目には何う見えるか知らぬが、此畫は私も充分骨折てかく積りなれば、此先幾百年と經つた後まで、必ず保存されてあるに違ひない、保存されてあれば、只私の名ばかりでなく、貴公の顔も永く後の世の人に傳はるばかりか、何時までも救主の傍に在ると云ふもの喜んでもらはねばあらぬとは、此處の事さ」

開て見れば、成程屈理のあるとなるに、余も終に服従し、寫生する氣になりて、命するまに、古椅子に腰かくれば、畫工は種々と余が顔をひねりて住置を作り、漸く七分目程の横顔に定めて、筆を下し初めたり。

向ふの壁にかけある破れ鏡を着眼點とし、余から心を空くして、瞬きもせず静に身を保ち居ると、大凡三分はがりしが、背中の傍り次第にむすかゆくなりて、暫くは我慢して居たれど、終に堪えきれず、我知らず手を延ばして、上着の上よりかさしが、ハツと思ふて、急ぎ兩手を膝の上に置き、元の

位置に歸したる時、畫工は笑ひながら筆を傍の机の上に置き、

「光華清みまじたり」

此一言は余には、罪人が赦免の申渡りゆり倚られしく窮屈さに攻め出でたる、顔の汗を拭きながら、今寫したる畫の傍に立寄り見れば、未だ粗出来なれど、中々奇麗に、誠に余が意に協ふ様に畫かれり。余は笑れど、餘り畫工が今後方へ立ちて、煙草に火を點け居るを幸ひ、其床几に坐りて、暫く打眺めて、獨言の様に、

「何うもよく出来たが實に何うも……」

其間に畫工は余が傍に歸り來りて、

「甚く感心しますよ。」

ど、云はれて初めて余は氣がうつ、急ぎ其坐を飛び退きぬ。

畫工は又直に筆を採りて、後をかき續けて余念なきに、余は爲すともなければ、室内にかけある額の畫を初めより順次に委しく眺め行かん。

と、云ひさして、後は云ひ悪く氣に口籠りしが、聴て微笑みつゝ、

「恐つては困りますよ……和氣驟然たる貴公の顔が、實に其人物を寫し出すに適當であらうと思ふて、其故貴公に頼んだ譯なので。」

と、云ひ終りて、此度は儼然として、一段調子を高め、

「その代りに、貴公の目には何う見えるか知らぬが、此畫は私も充分骨折てかく積りなれば、此先幾百年と經つた後まで、必ず保存されてあるに違ひない、保存されてあれば、只私の名ばかりでなく、貴公の顔も永く後の世の人に傳はるばかりか、何時までも救主の傍に在ると云ふもの喜んでもらはねばあらぬとは、此處の事さ」

聞て見れば、成程屈理のあるとるに、余も終に服従し、寫生する氣になりて、命ずるまに、古椅子に腰かくれば、畫工は種々と余が顔をひねりて住置を作り、漸く七分目程の横顔に定めて、筆を下し初めたり。

向ふの壁にかけある破れ鏡を着眼點とし、余から心を空くして、瞬きもせず静に身を保ち居ると、大凡三十分はがりしが、背中の傍り次第にむすかゆくなりて、暫くは我慢して居たれど、終に堪えきれず、我知らず手を延ばして、上着の上よりかさしが、ハッと思ふて、急ぎ兩手を膝の上に置き、元の

位置に歸したりし時、畫工は笑ひながら筆を傍の机の上に置き、

「尤早濟みました。」

此一言は、余には、罪人が赦免の申渡より尙うれしく、窮屈さに攻め出でたる、顔の汗を拭きながら、今寫じたる畫の傍に立寄り見れば、未だ粗出來なれど、中々奇麗に、誠に余が意に協ふ様に書かれありさ。余はうれしさの餘り、畫工が今彼方へ立ちて、煙草に火を點け居るを幸ひ、其床几に坐りて、暫く打眺めて、獨言の様に、

「何うもよく出來た、實に何うも……」

「甚く感心しますな。」

と、云ひ終りて、聴て靜に余が肩を叩き、

「コレ、邪魔だ、退てください」

と、云はれて、初めて余は氣がつき、急ぎ其坐を飛び退きぬ。

畫工は又直に筆を探りて、後をかき續けて余念なきに、余は寫すともなければ、室内にかけある額の畫を初めより、順次に、委しく眺め行きぬ。

最後に、山水の景色を寫したる額一面、數ある中にも、其筆威彩色、殊に優れて見えければ、余はつくづく感心して、熱心に筆を走らし居る畫工に向ひ。

「此額も貴公がおかきなさりましたのか

と、問へば、畫工は五月蠅氣に此方に向ひ、

「其れは私ではない。

「誰がかきましたか。

「私の師匠のレオンハルドの筆だ。

「エッ、レオンハルド？ 其方は今何處に居ますか。

「先日より羅馬府に滞在であつたが、最早歸國しました。

「御歸國になつた。それは残念なことをした。

「何故？ 貴公は知つて居ますか。

「知て居る處ではありません、夜中に道案内して、同じ馬車に乗つて、宿屋にねこかきに會ふて、財布を貰ひました。

と、急ぎ込むに、余ながら何やら分らず云ひ放てば、畫工は驚きながらも、笑ひを含みて、

「先生と共に旅行をされましたのか。

「左様、この旅行をして、よく知つて居ります。

「それでは、貴公は胡弓ひきたな。

「左様、其胡弓もひきますが、お二人がお歸りになつた後では實に残念。

「如何云ふ譯で、それ程残念だか知らぬが、先生が當地へ來られたは、ウヰーンの貴女方も御一所であつたよ。

「エッ貴女も御一所？ シテ其貴女方も御歸りになりましたか。

「一人は御歸りになつたが、一人は御残りであるよ云ふとだ。

「その貴女と云ふは、何の様な御顔でござりまするか。

「私は見たとがないから知らぬが。

と、云ひつゝ立つて、片隅に幾個も重ねて立かけある額の中の一枚を撰り出し。

「此の畫は未だ出來上らぬが、之れが連れの貴女の一人と云ふとで、先生より寫眞を貰ふて、それを寫して圖にしたものだ。

と、余が方に向くるを見れば、未だ總て出來上らねば、確とは知れぬと、其木肉の工合、日付鼻付、

余が愛する貴女によく似たれば、

「ア、此貴女が羅馬府に来て居ますか。」

「その方は未だ残つて居ると云ふとたが。」

「これのアウレリーと申す方てばありませぬか。」

「それは知らぬが、これも貴公の知り人か。」

「知人處ではない、私の戀人で。」

と、云へば、畫工は甚しく驚きたる様にて、余が姿を足の爪先より、頭の上まで見上げしが、聴て笑ひを含みて

「それは偽てある。」

「否、詐偽でない證據は、之を見れば分ります。」

と、隠簾より例の手紙を取出して、畫工の手に渡し、

「兎に角殘て居るには相違ひありませぬか。」

畫工は不思議さうに余か手紙を取りて、

「未だ居らるゝに違ひない。」

「愈々ですか。」

「さよ〜。」

余は最早堪りかねて、

「これでは失張昨夜のに違ひない。」

と、絶叫して、胡弓を取るや否や駈け出せば、手紙を半ば讀みかけたる畫工は、驚き慌て、

「コレ〜、何處へ行く。」

と、捕ふる袖を、一生懸命に振り拂ひ、何の答へもせず、ころげる様に櫛子段を下り行きしが、畫工の呼びかくる聲良暫くは聞えたり。

(八) 公園

今は以前と異なりて、往來賑やかに、貴女紳士手を連れて、静かに町中を散歩するもあれば、駟馬に鞭うちて巻を馳するもあり。或は花賣る娘、或は菓物賣る小供、彼方へ行く者、此方へ歸る者、仙郷とは云へど、流石に都府だけに、織るが如き人込の中を、喜悅に心亂れたる余は、半ば狂せる如く、

幾度もなく人に突か當り、馬車に驚かされつゝ、帽子を押えて飛び行きぬ。
 右に曲り左に折れ、表町を過ぎ裏町を抜け、行けどもく、昨夜忍び込みし古屋敷の前に出です。道行く人も多ければ、訪ふとも易すけれど、處の名を知らねば、それも出来ず。ハヤ日影高く登りて、暑く照りつければ、終には余も勞れ果て、一歩もひけぬまでになりしかば、暫く休息せんと、傍を見れば、何人の住居か知らねど、往來へ突き出したる露臺の下、日影を除けて冷しさを以て、折節四邊に人もなければ、其下に立寄りて、石壇に腰打かけ、流れ出る汗なを拭きて、呼吸を吐き居るに、何處よりか冷風除るに吹き來りて、得も云はれぬ心地に、次第に勞れを引出して、眠氣頻りに催し、終に堪え得で、其處に打伏しぬ。

斯くてあると良暫く、甦て夢ともなく現ともなく、何やら上よりポタリくと落ちて、余が身に當るに驚き、眼を開けば、美麗しき紅白の花、幾個もなく余が傍に落ち散りてあるに、何者の徒事かど、驚き立上りて見廻はせど、此方に向ひし家の窓は、以前の如く窓かけ垂れて硝子戸固く鎖し、往來は通る人もなければ、不審に堪えかねたる折からに又一輪ポタリと落ちたるに、見上れば露臺の上に、銅の針金にて、細かに編みし鳥籠のかけありて、其中に入れある一羽の眞白なる鸚鵡の、彼方に飛び此方に飛び、或は逆さにかやり、或は羽ばたきする度に、籠の周圍に結び付けある花の落ちたるなり。

それにて怪しき花の出處を確めたれば、初めて安心はしたれど、鸚鵡の羽、雪を欺く如く白くうつくしさに、余は目も放たで眺め居るに、鳥の方にて余が姿の氣につきしか、狂ひ居たりし羽音を止めて、靜に余を見下ろし居たりしが、甦て、一聲『馬鹿』と鳴さぬ。

『何だ、馬鹿だ』
 余は面白半分の下より呼べば、鸚鵡の方にて『何だ、馬鹿だ』と鳴く。

『貴様こそ馬鹿だ。』
 鸚鵡の方にて『亦貴様こそ馬鹿だ』と答ふ。

余笑へば笑ひ、罵れば罵り、余か云ふに聊かも違はず鳴きかへすに、余は少し海に障りて、言葉急はしく息まけば、鳥も同下く息まき鳴き立るに、余は終に堪えかねて、落ち散り在る花を取りて、籠を目がけて、投げ付けんとする折から、後ろにて誰やら笑ふ聲聞えたり。

『これく、鳥を相手に何をして居る。』
 『餘り人眞似をして、私を馬鹿にするから。』
 『ハ、ハ、ハ、それは仕方がない、人眞似するのが鸚鵡の能だから、それを怒る者が眞實の馬鹿』

だ。

「ヤ、貴公まで人を馬鹿にッ。

ど、尙怒り醒めさらぬ余、餘儀を畫工に向くれば。

「マア、其様に怒るとは無い、今日は日曜日のごと故、公園になりと散歩しやう。運よくば戀人に遇はれるかも知れぬから。

戀人と聞くより、余が心は火に寄る氷よりも早く溶けて、

「行きます、何處へでも行きます。

「何だ、色男！

ど、微笑の内に、余が顔を睨め付ながら、隠藝を探りて、先刻に渡し置きたる、アウレリーより余に送りたる手紙を取り出し

「マが貴公は實にあやかりものだ。情こもる貴女よりの此手紙で、作偽ならぬ戀の眞實を私も見認めた、貴公の爲めには、生命にかけて大切な此一品、今確に返却する。

ど、云ひつゝ、態ど大事さうに余が手に渡しぬ。

イヤとて、打連れ立ちて行くに、正午を知らずする寺院の鐘、遠近に聞ゆるに、何となく急に腹の空々

たる様に覺えて、足の運び後れ勝ちになれば、畫工は不審みて、

「何うかしたのか。

ど、問ふ。余は何とも答へで、靜に腹を指させば、畫工は微笑みて、

「私も貴公の行術を探して、午前かけまはつた故か、常にさく腹かすいた、マが今少し辛抱しなさい、公園の入口に、誠に好い家があるから。

ど、云ふに氣を勵まされて、尙従ひ行けば、程なく最も寂しき町を通り抜けて、懸て苦むしたる石壇を上りぬ、右手に長低き生垣にてかこひし一構え、大理石にて面白く彫刻したる門の柱立ち、玄關までの間には、小砂利一面に布きて、其間に松葉牡丹のいろく、今を盛りと咲き亂れたり。畫工は立止まりて、一寸帽子を取り、額の汗を拭ひながら、

「これだ、家はせまいが、食物は誠によく出来るよ。

「左様でござりますか、何でも早く食ひたいもので

「其様に食ひたくば早く行かう。

ど、門を這入りて、玄關に至れば、出て迎へたる女、左も親し氣に、畫工の傍に立寄りて、
「マア、ヤコブ様！ よくお出なさいました。

「ヤ、貴公まで人を馬鹿にッ。尚怒り醒めさらぬ余、餘儀を書工に向くれば。」

「ア、其様に怒るとはなほ今日日曜日のご故、公園になりと散歩しやう。遅くば戀人に遇はれるかも知れぬから。」

「怒人と聞くより余が心は火に寄る氷よりも早く溶けて、行きます、何處へでも行きます。」

「何だ、色男。」

「微笑の内には余が顔を睨め付けながら、隱憂を探りて、先刻に渡し置きたる、アウレリーより余に送けたる手紙を取り出し、」

「貴公は實はわやかりものだ。情こもる貴女よりの此手紙で、作偽ならぬ戀の眞實を私も見認めた、貴公の爲めには生命にかけて大切な此一品、今確に返却する。」

「云ひつゝ、能く大事さうに余が手に渡さぬ。イヤと打連れ立ちに行儀は、正午を知らずする寺院の鐘、遠近に聞ゆるに、何となく急に腹の空さ

たる様に覺えて、足の運び後れ勝ちになれば、書工は不審みて、

「何うかしたのか。」

「問ふ。余は何とも答へで、靜に腹を指させば、書工は微笑みて、

「私も貴公の行衛を探して、午前かけまはつた故か、常にあく腹かすいた、メが今少し辛抱しなさい、公園の入口に、誠に好い家があるから。」

「云ふに氣を勵まされて、尙従ひ行けば、程なく最も寂しき町を通り抜けて、懸て苦むしたる石壇を上りぬ、右手に長低き生垣にてかこひし一構え、大理石にて面白く彫刻したる門の柱立ち、玄關までの間には、小砂利一面に布きて、其間に松葉牡丹のいろく、今を盛りと咲き亂れたり。書工は立止まりて、一寸帽子を取り、額の汗を拭ひながら、

「これだ、家はせまいが、食物は誠によく出来るよ。」

「左様でござりますか、何でも早く食ひたいもので、

「其様に食ひたくば早く行かう。」

「門を遣入りて、玄關に至れば、出て迎へたる女、左も親し氣に、書工の傍に立寄りて、

「マア、ヤコブ様！ よくお出なさいました。」

ど、云ふて、尙も頻りに話せど、伊太利語なれば、只此言が分りしのみ、後は何を云ふのか、余には少しも解らず。

導るゝまゝに、後に従ひ行けば、二階の一室に案内したり。部屋は左まで廣からねど、總ての構造小意氣にて、正面に金端の鏡輝き、左右の壁には二面の額かゝりて、一つは、今初めて名を知りしヤコブの筆なり。支那焼の磁器にて張り詰めたる、長廊下の上には、名艸珍木の盆栽、幾個となく並べあれば、絶えず春を装ふなるべく、見下ろす庭には、立木縁深く生ひ茂りて、其木梢を拂ひ來る風、眞正面に吹き入るれば、夏には詠えの部屋にて、兎に角此家にては上等の坐敷と思はれぬ。

ヤコブは此家に這入るより、無間斷に女中と話して、部屋に通りても尙言葉途切れねば、余は手持無沙汰に詮方なく、四方の景氣を眺め居たりしが、程なく女中も下り行きしかば余は食卓の前の椅子に坐りて、畫工に向ひ。

「先生！ 此家は余程の御なしみでござりますか。」

「馴染とも大馴染だ、抑も私が伊太利に來た最初、此公園の景色を寫生する間、大凡二十日ばかりと云ふものは、此家へ止宿して居たから。」

「ハア、左様でござりますか。」

「随分好家である。」

「誠に好家でござります、實に私の氣に入りました。」

「氣に入つた？ それは結構だが、未だ貴公の氣に入りさうなものを見せる。」

「何でござります。」

「それは云はぬが花だ。」

話し居る中に階子段を上る足音して、入り來りしは前の女中、酒と杯を持來りて、二人の前に置き、再び下りて程なく料理を持ち來り、傍に待りて酌をしながら、時々余にも話しかくれど、余には伊太利語は解せねば、答へ兼ねて、もぢくすれば、終にはヤコブのみに話しぬ。余は只女中が料理取りに、下に行く折々に、ヤコブと語すのみにて、それすら出る品の味の善惡を評し合ふ程のことに、別に面白味もなければ、余は色氣を捨て、空腹にドシ／＼詰り込みぬ。

廳で腹も程よく満ちて、酒氣パツと顔に薄赤く出てし頃、女中は前の程より、吾等の傍に待り居るに、又階子段を上る音して、此方へ人の來る景色。誰かと待つ間もあく、靜に這入りしは、年の頃漸く十八九にもあらんか、白綾の薄絹の着物きて、胸の邊に一輪の薔薇花を差し、白き顔の、ハキリしたる目元と、細き口元に云はれぬ愛敬こもり、鼻筋通りて、頬先櫻色に、實にツツとする程うつくしき女、

余は口に入れんとして、肉を買きたる肉刺を持ちたるまゝ、恍惚として見ざるれば、女は耻かし氣に、ヤコブの後部にたすみ居たりしが、ヤコブが振り返りて、何やら言ひしに、初めて其隣の席の空椅子に腰かけ、頻りに話す内に、やがてヤコブが余か方を指さし何か一言云へば、女は余に向ひて丁寧挨拶する故、余も慌て、禮を返したりしが、その後は又二人樂し氣に話し続け居たり。余は徒然のあまりに立つて、例の廊下の邊に出て、眺むるに、木間隠れに姿は見えねど、遙か彼方に當りて、音樂の響きに交りて、人の噪く聲聞えたり。耳を澄ませば「ワルツ」と云へる舞踏の曲にて、それに連れて人の躍るもの、如し。

好める道とて、余は餘念なく、遠き樂の音に聞きとれ居る折から、
「これ、何を茫然して居る。」

ど、呼ぶに振り返れば、ヤコブのみ残りて、彼の美人も女中も居ぬに、余は元の席に歸りて、

「先生！ 彼れは一體何でござります。」

「オイ、何でござりますとは怪しからぬ。」

「これは失禮！ では何誰様でござりますか。」

「貴公に見せたいものと云ふは彼だ。」

「だが、何と云ふ方でござりまするか」と云ふのでござります。

「此家の娘で、私の戀人さ。」

「エツ、彼れが貴公の戀人？」

「左様だが、何を其様に不思議がる。」

「否、餘りうつくしいから。」

「其様に氣に入つたか。」

「氣に入りました段ではない、あれなら生命も入用ませぬ。」

「コレ、貴公は生命を幾個持つて居る。」

「何故でござります。」

「アウレリー女は如何した。」

「左様、先生行かうではござりませぬか。」

「何處へ。」

「公園へ。」

「何時も現金なとばかり云ふ。併し敵も討つたし腹も出來たし、少し散歩してもよい。」

「先生腹の出来たのは分りましたが、敵とは何のところでござりまするか。

「云はずとも、其方に覺えがあらう。

「私は貴公に敵をどられる覺えはありませぬ。

余は餘り飲まざりしかば眞面目に、向ふは甚く酔ひしと見え、立上る足元危く、大口開て笑ひながら、
「ハ、ハ、ハ、ハ、左様眞面目に出て、は困るが、手紙を見せられた敵さ。

と、云ひつゝ、尙も笑ひながら立て行く足音を聞きつけて、娘と女中は出で来り、娘が頻りにヤコブに耳語く間に、女中は余に手眞似にて「再び来い」の意を示し、幾度となく頭を下けたり。

漸く玄關に出で、立去らんとする時、此處迄送り来りし娘は、急はしくヤコブを呼止めて、己が胸につけ居たる薔薇花をとりて、ヤコブの胸に差し與へ、又何やらん耳に口寄せて低語けば、ヤコブは、頻りに點頭く様、誠に淺からぬ交情とぞ見えし。

廳て門を出て、公園内に進み入るに、名に負ふ古昔床しき羅馬の公園なれば、立木の枝振り、石の据え方、總て佳致わらざるはなく、辿る細道には態とあらぬ苦むして、鏡の如き池の岸には、鵝鳥幾羽となく眠れり。處々に立ちし銅の紀念碑は、夕日に輝きてまばゆく、大理石の女神の像は、いやが上りに白く尊し。

以前に余が耳に通入りし音楽は、尙此時までも聞えて、ヤコブに公園内にある種々のもの、説明を聞きつゝ、余が足は、次第に音楽の響く方に向さしが、ヤコブも別段逆はず、余が行く方に歩行み行きぬ。

音楽の音次第に近く、今は躍る足調子も、話し合ふ聲も、明らかに聞えぬ。廳てなだらになりし細道を、ヤコブと二人手を連ねて登るに、上は廣々としたる艸原に、常盤木程よく生ひたる岡にて、間近き彼方の、殊更緑深き芝艸の上に、美麗しく着かさりし男女の一群、今は曲を終りしと見え、樂の音は絶えて、三伍相集りて、喃々語る聲喧し。尙傍近く進み寄れば處々に据たるテーブルの上には、美酒佳肴餘分に並へありて、思ひくりに集りて、それを食ふもあり飲むもあり。又は年若き女の男の手にすかりて、樂し氣に語り行くもあり。實に打解けたる野遊びと知られぬ。見廻はせど、余は元よりヤコブも、中に一人の知己もなければ、群に加はりて遊ふとも出来ず、浦山しく其處を眺め過ぎ、木下に据えある床几に腰かけて涼み居たり。

折から又起る樂の音、何の曲かと耳澄ませば「袖の香」と呼ぶ曲なるに、如何しけん二度も三度も、前弾をひき直して、何時も同じ處に至ればハッと弾く手止まりて、一同聞と笑ふ。偕は彼の次を忘れしものかど、尙聞と居れば、果ては種々に弾き試むる様なれど、一も誠の調に合はねば、余は思はず。

「ヤア忘れたナ。

と、云へば、床几の背縁に倚りかりて、煙草燻らし居たるヤコブは、不思議さうに余が顔を眺めて、

「何を、
「否エ、彼方で「袖の香」の曲を弾きかけて出来ぬから、先を忘れたのに違ひないと思ひまして。
「それは貴公が知つて居る曲か。
「本國の名曲故、知つて居まするとも、私のお得意もので、
「お得意ものだ。それでは好いことがある。
「好いとは。
「此方で弾て、向ふを驚かして遣れ。
「面白く、早速弾きまじやう。
と、肩より胡弓を取下ろし、殊更念入れて調子合せ、得々として弾き出しぬ。
他人の忘れたる曲を、流暢に弾き放ちて、驚かし呉れんと思ふ心の張合あれば、常に優りて満腔の熱心を糸の上に注ぎ、巧妙に弾き行けば、其音彼方に聞えてか、今迄喋々しかりしも静まりて、木梢の青葉、風なきに震ひぬ。

益々面白く弾きすすみて、聴て曲の半ばに至らんとする頃、彼方より一人の紳士、余等の傍に進み来りぬ。余はそれにも頓着せず、弾き居たりしかば、傍に扣え居るヤコブに向ひ、丁寧挨拶して、伊太利語にて、何やらん話すと、ヤコブは最尊大に、只折々受け答へを爲すのみなりしが、紳士の語の終るを待ちて余に向ひ、
「これ一寸止めて呉れ。
と、制するに、余は弾く手を止めて、
「何でござりますか。
「何でござりまする處ではない、何うもお手際の程感心致した。
「何も今更左様お譽に預る程のこともござりますま。

「否やあるとも、大有り……今此方が来て云ふには、
と、傍に立てる紳士を指さし、
「甚だ失禮な譯なれど、一同の者が貴公の音楽を聞いて、ホト感心して、殊に向ふの樂師が、皆の者の聞きたいと云ふ『袖の香』の曲どかを、忘れて居て、残念に思ふて居た處に、貴公がそれを弾いたから、出来るとならば、何卒彼方へ来て弾て呉れ、野面のとなれば何もなくとも、咽

（八） 公園
百二十九

喉を潤す酒だけは用意してあるから、どの所望であるが、如何する。

「眞實にッ。」

「詐偽を云ふものか。」

「眞實ならば行きます。」

「行がよい、私も一所に行くから。」

ど、番工は又紳士に向ひ、承諾の旨を告ぐるならん、伊太利語にて、一言一言云へば、紳士は喜ばし氣に彼方に去りぬ。

後より二人打連れ、團樂の傍に至れば、先刻の紳士迎へて、余等を導き、少し片寄りたる木下に据えある、小さな丸食卓の邊に坐はらせ、酒肴など持ち來りて、頻りにヤコブに低語き、余にも又遠慮なく飲食せよと勧めたり。ヤコブは注ぎたる杯を取りながら、余に向ひ、

「これは貴公の御馳走、難有頂戴致しますよ。」

「何卒澤山にお飲みなされませ。」

「他人のものだと思ふて、物惜みせぬは、ハ、ハ、ハ、」

ど、高笑ひして、一息に傾けぬ。余は其間に胡弓の糸を占め直して、再び以前の曲を奏し初めたり。

人々は其處此處に團樂して、全く熱心に余が胡弓に聞き惚れ、手調子とるもあれば足調子とるもあり、左なきだに得意となり居る余、今人々が斯く浮かるゝまでに、聴聞するを見ては、いよく心に勵みつきて、弾く音一層清み渡りぬ。

聴て喝采の内に曲を終れば、日は已に山蔭に沈みて、豫ねて用意やしたりけん、木の間に球燈の光輝まばゆく、何持暮れしとも知れず。紳士貴女は余等が傍に集り來りて、余が胡弓の巧みなることを譽むるもあれば、今一杯と酒を強ゆるもあり。他事なく厚遇され、余等も打解けて笑ひとよめき、今は全く群中の人となりぬ。

元來飲まぬ酒を、少し強らられたれば、忽ち頭に上りて苦しさを、少し醒まさんどて、人々がヤコブを相手に笑ひ興し居る間に、竊かに席を離れて、程近き木影に行き、不圖向ふを見れば、今迄氣付かざりしが、彼方の東屋の、球燈つるしある下に、此方の一群の人なるや否やは知らねど、二人の女と一人の男、何やらん樂し氣に語り居れり。其女の一人は、白き衣服着て、駝鳥の毛にて飾れる帽子を頂き、丸扇にて胸の邊をあふぎ居れり、他は後ろむきなれば、如何なる人か知れず。何事かを語り合ひぬる、心悪き風情。忍び寄りて様子見はよと思ひ、木影を離るれば、忽ち人ありて、余が手を捕へぬ。不意に驚きて其人を見れば、例の紳士にて、余が否むも聽かず、元の席に連れ歸りぬ。ヤコブは

此時已に醒ふたりと見え舌重たげに、

「私ばかり残して置いて何處へ逃げる、サア一杯飲め。」

と、杯を余に指しぬ、余は已に充分にて、此上に飲まば尙苦しかるべしと思ひぬれば、

「否や、私は最早澤山。」

「折角さした杯だ、其様云はずに取れ。」

と、云ひつゝ、無理に余が前に置き、危うき手に壺を握りて、シャンパンを波うつぎ、余が顔を、醉顔にシロリと眺めて、少し笑ひを含み。

「戀人のとなどは、何でもよいではないか。」

「何も左様な譯ではないので。」

「併し何たか、可笑しかつたぞ。」

「甚く酔ひましたから、木蔭で涼んで居たのでござります。」

「涼みながら、何を見て居た。」

「別に何も……」

「詐を云ふな、東屋の内に誰か居たであら。」

「東屋の内には婦人が居ましたが……」

「それ見る。」

「彼れが如何したのでござりますか。」

「如何したのか……、彼れが本國の貴女だ。」

「エッ」

と、云ひし儘、余は驚きと嬉さに、二の句を續ぎ得ず、直ちに立上りて、彼方へ駆け行かんとする折から、

「アレー〜」

と、呼びつゝ、此方へ走り来る女、それを逐ひかけ来る男。余も驚けば、人々も驚きて立上る間もなく、女は余等の團樂の内に駆け込み、余が後ろに隠れぬ。男も同様、此方へ馳せ来りしが、其顔を見るや、人々は別に捕へもせず、一同吹き出して笑へば、男も再び女を逐はんどもせず、同トく笑ふて、何やらん語り合ふて、打興するものゝ如し、其體余には一向解しかねて、不審に堪えかねれば、振りかへりて隠れたる女を見るに、尙落ち付ぬものゝ如く、恐るゝ出す顔を、球燈の光りに見れば、思ひさやウヰーンの屋敷使はれ居たりし腰元なるに、余は再び驚かされて、何とも云得で顔を見つめ居れば。

腰元も驚きたる風にて、

『アレ珍らしい、収税吏さん。』

と、云ひつゝ、余が後より立出れば、一同又手を拍つて笑ふを、腰元は頓着せぬもの、如く、只ニコリと笑ふて、傍の椅子に腰かけぬ。余は急ぎ其邊に至りて、

『一體如何なたのか。』

と、問へば、

『否、餘りあの御方がお悪戯なされて仕方がないから、聲立て、驚かして遣りました。』

『今迄何處に居たのか。』

『東屋の内。』

『東屋の内………餘程前から。』

『前から居て、胡弓を聞て居まして、何うもお前様の手と思ひましたが、矢張違はあかつた。』

扱はヤコブの云ひしに違はず、彼の貴女は矢張アウレリーなりしかと思ひ、腰元に聞かんとする時、又腰元の方より口を開き、

『余り馳て来たので、忘れて居ましたが、私のお供して居るお方が、お前様に用があるから、今夜』

十一時頃に来て呉れるやうにとねつしやいました。

と、云ふに、余は精神天外に飛び、他の人々の手前も忘れ、胡弓を高く捧げて、其處等を躍り廻れば、ヤコブは立上りて、余が耳に口を當て、

『うまくやるな。』

と、云ひつゝ、腋の下に両手を入れて、いやと云ふ程くすぐるに、余は思はず

『キヤツ』

と叫べば、腰元は獨言の様に、

『餘程酔てお在と見える。』

と、云ふを、余はすかさず押えて、

『酔ても確なものだ。』

と、云へば、腰元は笑ひながら。

『左様？ それではお住居を知つて居ますか。』

『否や知らぬ。』

『知らぬなら教えて置きますから、忘てはなりませんよ………』

「大丈夫……」

「此公園を出て、真直に行つて、三ツ目の横町を左に曲つて、それを二町程行くと四ッ角があるから、それを右にまがると、清水があつて、真向のお屋敷がそれだから、忘れないう様に。」

「よし、萬々承知。」

「十一時に。」

「心得た。」

と、云ひつゝ、嬉れしさに、余が前に注ぎある酒を、一息に飲み干し、

「サア一杯。」

と、腰元にはせば、

「否、妻は其の様なとして居られませぬ。それでは相違なく……好うござりまするか。」

と、云ひ捨て、速しく彼方に走り行く、耻かいた杯の遣り處に困りて、傍を見れば、例のヤコブは醉眼朦朧として、微笑みながら余が素振を眺め居るに、之れ幸と

「一杯献上致しませう。」

「飛んでもない門違ひだ。」

「何れも好からぬ。」

「甚く勇氣が出た。」

と、云ひつゝ、懶氣に杯を取りぬ。

人々次第に少なくなりて、懸て例の紳士來りて、最早遊びも是迄と告げ、下男共を指揮して、球燈を下ろし、道具などを取かたづくるに、余はヤコブと共に立上りしが、時は漸く八時頃にて、未だ貴女の宅へ忍ぶ約束の時には早けれど、知らぬ道とて、若しも迷ひなどして、約束の時を後るゝ様と、折角風雨を乗切つて來たりし船の、港の入口にて覆ると同じ道理にて、如何に残念な目に遇ふも知れぬは、直に出かけて、早き時間は、其門前にて過さばやと思ひ定め、それにしてもヤコブと別れるに、おがさきにも左様と云ひかねて、隙もわらは逃げ出さんと心に企み、尙打連れて行くに、懸て臺餉食ひ以前の茶屋の前近く來るや、ヤコブは不意に余が腕を捕へて、

「今一度此處で飲み直さず。」

「大丈夫……」

「此公園を出て、真直に行つて、三ツ目の横町を左に曲つて、それを二町程行くと四ツ角があるから、それを右にまがると、噴水があつて、真向のお屋敷がそれだから、忘れない様に。」

「よし、萬々承知。」

「十一時に。」

「心得た。」

と、云ひつゝ、嬉れしやうに、余が前に注ぎある酒を、一息に飲み干し、

「サア一杯。」

と、腰元にさせば、

「否、妾は其の様などして居られませぬ。それでは相違なく……好うござりまするか。」

と、云ひ捨て、遠しく彼方に走り行く、耻かいた杯の遣り處に困りて、傍を見れば、例のヤコブは酔眼朦朧として、微笑みながら余が素振を眺め居るに、之れ幸と

「一杯献上致しましやう。」

「飛んでもない門違ひだ。」

「マア何でも好から。」

「甚く勇氣が出たナ。」

と、云ひつゝ、懶氣に杯を取りぬ。

人々次第に少なくなりて、聽て例の紳士來りて、最早遊びも是迄と告げ、下男共を指揮して、球燈を下ろし、道具などを取かたづくるに、余はヤコブと共に立上りしが、時は漸く八時頃にて、未だ貴女の宅へ忍ぶ約束の時には早けれど、知らぬ道とて、若しも迷ひなとて、約束の時を繰る様とありては、折角風雨を乗切つて來たりし船の、港の入口にて覆ると同じ道理にて、如何に残念な目に遇ふも知れぬは、直に出かけて、早き時間は、其門前にて過ぎばやと思ひ定め、それにしてもヤコブと別れるに、あからさまにも左様と云ひかねて、隙もあらは逃げ出さんと心に企み、尙打連れて行くに、聽て晝餉食ひし以前の茶屋の前近く來るや、ヤコブは不意に余が腕を捕へて、

「今一度此處で飲み直さう。」

と、云ふに、此處に這入りて、又飲み初めなば、容易に放すまじく、よし放したりとて、此上に無理

に強らられては逆も歩行けまゝと思へば、

「私は別に少し用がありませんから

と、半分云はせず、

「用がある？……用とは貴女の處に忍ぶと云ふことである、それは私も知つて居るが、それを邪

魔しやうと云ふ様な野暮ではない。タカ未だ時が早いよ、十一時には……」

「左様見破られては、仕方がありませんが、併し……」

「併ではない、凡そ戀人の處に忍ぶには、早くては返つて此方の腹を見透かされて、何處までもの

ろいことがわかるから、少し位は態と時を遅らしかして、向ふが氣を揉んで居る處に行くものだ。

「併し……」

「エ、未だ併しと云て居る、何でも好から一所に来よ。」

と、云ひつゝ、無理に手を取りて門内に引込まんとする折から、先刻程よりのヤコブの大聲の、内に

聞えてか、娘と女中此方へ走り來りて、ヤコブに言葉かくれば、ヤコブは振り返へりて、何やら言

葉を返したりしが、娘は近寄りて、ヤコブの背中を、ボンと軽く打つ途端、余を捕へたるヤコブの手

離れぬ。此間にと余は急ぎ驅け出せば、ヤコブは驚いて、

「これ待て。」

と、云ひつゝ、逐はんとして石につまつき、ハツタリ倒れたり。余も驚き立返らんとしたりしが、見れ

ば娘と女中が逸早く驅け寄りて、介抱する様子なるに安心して、又云ひ譯する折はあらんと、其儘に

捨て置きて、急ぎ石壇を下りぬ。

最早逐ふ者もなき様なれば、心を落ち付けて、これよりは道を迷はぬが肝要と、今迄折く口の中に

て、忘れぬ様に繰り返し居たる、腰元の教えし道順、

「三ツ目を左に折れて、二町程行つた四ツ角を、今度は右に曲ると噴水く。」

と、尙も口の中に繰り返へしつゝ、一步に止まり半歩に注意して行きしが、何うやら間違へず、噴

水の處に出でたり。ヤレ安心と思ひながら、熟々四邊の様を見るに、コハ如何に、今朝の程ヤコブに

遇ひし場處にて、眞向に立てる門は、昨夕余が乗り越えて、忍び入りし門なり。余は今更驚きて、暫

く茫然として佇立みたりしが、不圖氣を取直して、門に立寄り戸を推せば、堅く鎖として開かず、借

は未だ時早き故ならんと、傍に佇止みて考ふるに、昨夕の唱歌と云ひ、姿と云ひ、相違なきアウレリ

―と思ふたればこそ、近寄りて言葉かけんとせしに、逸早く逃げ去りしは、余なることを知らぬ故かと、

それとなしに、胡弓を弾きて、知らせたれど、尙不知顔に、余を夜一夜軒下に捨置きしは心悪し、此

宵遇ひなば、充分恨み云ふて遣らんなど、種々に思ひ續る折から、不圖彼方より静に歩行み寄る人影。通常の道行く人とは異なりて、左ながら人目を忍ぶ者の如く、臙の月かげも物愛くや、塙の根際を至て静に歩み、聽て例の屋敷の門前に来るを、熟く見れば、先刻の程公園にて、彼の腰元を逐ひ廻はせし紳士あり。何をするかと伺へば、隠莖を探りて鍵を取出し門の戸を開けて邸内に這入りぬ。余が愛する人のもとに、余より外に、而かも余より以前に忍ぶ者ありと見ては、如何で心平かなるべき、忽ちソワツとのほせ上て、顔火の様に熱り、飛びかゝりて打据えたき心を押えて、後より門に至りて、危ぶみながら戸を押して見るに、難なく開きければ、僥倖よしと邸内に這入れは、前の紳士はそれとも知らず、同じく静に進み行きぬ。

折から雲間晴れて、現はるゝ月影に紳士の方を透し見れば、右の手に三尺斗の、明煌々たる劍を握り足音を盗みて、昨夕見し部屋の方に近寄り行けり。余は思はず慄然として、二足三足後へさがりしが、扱は何か意欲ありて、貴女に仇する曲者に相違なし、斯くては戀人の身の一大事と思へば、恐さも忘れて、捕え呉れんとはしたりしが、流石に進みかねて、尙様子を伺へば、曲者は窓下にたゝすみて、暫く様子を伺ふものゝ如く、内にはそれとも知らず、二人して樂し氣に語ひ居る様、窓かけの間よりかすかに見えぬ。

良暫く斯てありしが、聽て曲者は突然身を起し、急ぎ足に入口に近寄りて、將に戸を開けんとするに、余も今は堪りかね、大喝一聲、

「曲者ッ」

ど、叫びて飛びかゝれば、曲者は驚きて、直ちに身を翻し、物をも云はず逃げ行くを、逃しはせじと、尙も大音に呼はりつゝ、裏手の方に逐ひ行けば、愈々慌て、彼方此方に逃げ惑ひしが、終に木の間にくぐり、家を廻はりて、表の方に走り去りぬ。

尙も逐ひ詰めて捕へんとは思ひしが、又貴女の方も心元なければ、引返して彼方に至らんとする時、腰元は手燭點もして、出来りしかば、余は急しき呼吸を靜めて、最手柄顔に、

「マア、好い鹽梅で逃げてしまつた。

ど、云へば、腰元は不審氣に、余が顔を凝視めて、

「何を彼の様に騒ぎなされたか。

ど、至て落ち付きたる風にて問ふに、余は又それが不審しく

「何を……今曲者が忍び込んで、貴女を殺さうとしたぞ。

「曲者が殺さうとした？……それは好がお前様は何處から這入て來ました。

と、益々悪落付に落ち付て、不用事まで聞くに、余はいよいよもとかしく、

『斯云く譯だ、よく聞け……其方が先刻公園で、十一時に忍んで来いと云ふたから、其積りで来て見たれど、未だ時が少し早いかして、門の戸が開ぬから、待つて居る間に、公園で其方をいぢめた男が来て、如何して手に入れたか鍵を以つて居て、それで門を開けて這入つたから、私も後から從つて這入つたが、月影にすかして見ると、氷の様な剣を下げて、其方達の居る部屋に忍入らうとしたから、これぞ一大事と思ふて、逐ひかけたのだが、取り逃して残念なことをした。』

と、理由を辯して、手柄を喜はれんとせしに、思ひきや腰元は、左なきだに太き眼を、いよいよ丸くして、口を尖らし、良暫く余が顔を凝視め居たりしが、

『アレマア……』

と、云ひしまゝ、余が手柄は譽めもせて、彼方に向ひ、

『貴女！ 飛んでもあゝとが出来ましたよ。』

と、大聲に呼ばれば、貴女は部屋を立出で、此方に来る様子なるに、余は今更に胸轟きて、其儘うつもむしが、聽て靴音靜に近よりて。

『何うしたのか。』

と、云ふ時頭を少し上げて、貴女を見れば、鼻高く目大きく、色白き、美麗しき顔にて、余が戀人と似ては居れど、全くの別人なるに、余はハッと驚きて、失望と落膽とに、殆んど氣ぬけしたらん如く、茫然として立ち居れば、腰元は尙も余が顔をどろりりと見て、

『何うした處ではござりませぬ、彼の御方を曲者と間違へて、逐ひ歸しましたさうでござります、』

『エッ、逐ひかへした？』

と、云ひつゝ、貴女は余を睨みしが、腰元は一足余が方へ進み出で、

『お前様は彼の方を誰だと思ひます。此羅馬府の知事の息子様でござりますよ。今宵内にお出になるお約束で、染みくお話しなどある積り、それも只では面白くないから、丁度お前様が公園に居たを僥倖、胡弓を弾かせて、お二人でお聞きになるはづ、それで彼のお方に鍵をお渡し申して置たのは、彼のお方がお出になつて、門を開けてお這入に當りた後に、お前様が来る都合にしてあつたのに、餘計な氣を廻はして、つまらぬことをする人だよ。』

と、喋々と述べ立つるを聞けば、成程左様云ふ譯ありしかどは思へど、手に持ちし劍が不審ければ、

『併し劍などをひらめかして、夜夜中忍び込めば、曲者と思ふも無理はあるまゝ。』

と、急所を突き留めたる積りにて云へば、腰元は冷やかに笑ひながら。

「お前様も余程馬鹿な人ではある、あれは何時も彼のお方がお持ちになつて居る銀の杖、それが月の光りにきらめいたを、自分が恐ろしさに、剣と見たのである、これ程臆病の癖に、よく透ひきけました。」

ど、何處までも人を馬鹿にするに、余も腹にすえかねて、腰元に向ひ、

「それは其方が悪い、斯の様なことがあれば、何故彼様くど、公園で頼む時に云ふて置かぬ。」

「云ふて置うと置まいと、それは此方の勝手、十一時に云ふて置たれば、丁度其時に來れば仔細はないに、お前様が余計な氣を廻はして、早く來たが悪い。」

「ナニ、悪いとはなし。」

「ナアニ、お前様が悪い。」

ど、互に云ひつゝのるに、傍に立ち居る貴女は、腰元を制して、

「其様など云はずとも、早く歸して仕舞ふかよ。」

ど、云ふに腰元は、尙ニヨリ寄りて、余が胸の邊を突き

「サア歸りなされ。」

「歸るなど云ふても、歸る、誰が此様な處に居るものか。」

「馬鹿！ サア歸れ
ど、云ふに今は余も堪えかねて、
「ナニ、馬鹿たッ。」

ど、云ひつゝ、平手にて腰元の横顔を一ツ喰はせ、其儘後をも見ず、門外に走り出でぬ。

(九) 乗合船

失望と無念とは、甚しく余が心を激せしめて、腰元の顔うちたゞきて、門外に駆け出しが、儲何處に行かんにも、元より定まれる宿もなく、幸にヤコブの情にて、今日一日は過したれど、明日よりは如何にして暮すべき、差詰め此宵の宿りもなく、心細く門前に停止みて、困じ果てたる折から、此方へ走り來る人影。扱は先刻に逐ひかけし知事とやらの息子が、仇返しに來りしかど、急ぎ身を隠す間もなく、呼吸せき走りつきし人を見れば、鼠の端廣き帽子に、黒の長マレテル。疑もなきヤコブなるに、余は嬉れしさに思はず飛び出で、
「ヤア、ヤコブ様！」

「お前様も余程馬鹿な人ではある、あれは何時もお彼のお方がお持ちになつて居る銀の杖、それが月の光りにきらめいたを、自分が恐るじやない、剣を見たのである、これ程臆病の癖に、よく透ひきけました。」

と、何處までも人を馬鹿にするに、余も腹にすえかねて、腰元に向ひ、

「それは其方が悪い、斯の機なぞがあれは、何故彼様くど、公園で頼む時に云ふて置かね。」

「云ふて置かぬと置かぬと、それは此方の勝手、十一時に云ふて置かれは、丁度其時に来れば仔細はなほに、お前様が余計な氣を廻はして、早く来たが悪い。」

「ナニ、悪いとはない。」

「ナア、お前様が悪い。」

と、互に云ひつゝの間に、傍に立ち居る貴女は、腰元を制して、

「其様な云はせも、早く歸つて仕舞なさい。」

と、云ふに腰元は、尚、寄つて、余が胸の邊を突き、

「お前様、お前様、誰が此様な處に居るものか。」

「馬鹿！ ナア歸れ」

と、云ふに今は余も堪えかねて、

「ナニ、馬鹿たッ。」

と、云ひつゝ、平手にて腰元の横顔を一ツ喰はせ、其儘後をも見ず、門外に走り出でぬ。

(九) 乗合船

失望と無念とは、甚しく余が心を激せしめて、腰元の顔うちたゝきて、門外に駆け出しが、儲何處に行かんにも、元より定まれる宿もなく、幸にヤコブの情にて、今日一日は過したれど、明日よりは如何にして暮すべき、差詰め此宵の宿りもなく、心細く門前に停止みて、困じ果てたる折から、此方へ走り来る人影。扱は先刻に逐ひかけし知事とやらの息子が、仇返しに來りしかど、急ぎ身を隠す間もなく、呼吸せき走りつきし人を見れば、鼠の端廣さ帽子に、黒の長マレテル。疑もなきヤコブなるに、余は嬉れしさに思はず飛び出で、

「ヤア、ヤコブ様！」

「ム、居たのか、ヤレ〜安心した。」

と、云ひつゝ、胸を撫つるに、余はヤコブが此處に来るさへ不審なるに、尙余を見出して安心する様子の腑に落ちねば、

「如何したのでござりますか。」

「マア私の如何したは措て、貴公こそ如何した。」

「否や、モウ、悉皆當て違ひ。」

「左様である、全く私が悪るかつた。」

「何故………何故でござりますか。」

「實は私が思ひ違へして居た。」

「私も知らぬ人でござりました。」

「左様か………それで私は歸國しやうと思ふが、貴公は歸らぬか。それとも未だ滞在したいか。已に此宵の始末にて、他の喜ぶ仙境も、余には汚土の如く思はれし折から、

「私は歸ります處ではござりませぬが、併し貴公の御歸りになるは、何云ふ譯で。」

「これには種々譯がある、それは又後のこととして、歸ると極まれば、宿に歸つて仕度を爲せねばな

らぬ。サア来い〜

と、云ふや否や、飛ぶが如くに馳け出すに、余も後れじと馳せ行き、程なく旅宿に至り、寢て居る内の者を叩き起し、部屋に這入りて、道具をかたづけ初めぬ。額を下ろし、繪絹を畳み、筆を洗ひ繪の具を落し、部屋中駆け廻はりて、荷物を纏むるを、余も共に手傳ふて力を添ふれば、夜のほの〜明には大方かたづきて、先づ一吹と、椅子に腰かくるヤコブに向ひ、

「何日お出立なされは、此様に大急ぎで荷物をかたづけますか。」

「夜があげたら直に。」

「何故其様にお急ぎで。」

「日限がある。」

「何う云ふ譯で。」

「それらとは道でゆる〜話すとして、先づ此家の者を起して、萬事の仕末を爲ねばならぬ。と、云ひ捨て、ヤコブは其儘下り行きぬ。」

余は一人残りて、熟々過去し方を思ふに、飄然として家を立出てより、偶然ウヰーンの邸に雇はれし

を、役なきことに心苦しめ、前後の思慮もなく、又其處を抜け出で、困し果し折からクイド、レオンハ
ルドの二人に出合ひしも、如何なる譯にや、一人途中に取殘されて、怪し氣なる古城に捕はれて、生
命まであやうかりしを、彼の年若き男の情に輕うして危難をのがれ、思はず途に迷ふて、此羅馬府に
來り、不思議にヤコブに援けられて、今日迄過し來りしが、思へば實に夢の如く、今又余が思ひ違ひ
より、入らぬ耻をかきて、此様な處には、暫時も居たくなしと思ふ矢先、ヤコブより勸めて歸國せん
と云ふ、更に夢中の夢の如く、腦裡麻の如く亂れて、尙種々と思ひ續くる折から、息急さ上り來るヤ
コブ、

「萬端落ちなく調ふた、サア出かけやう、貴公は用意か出來たか。」

「私は別に用意とはありませぬが、此荷物は？」

「荷物は後から送つてもらうことにして置いた。」

「荷物はそれでも好として、今一ッ大切なものがござりませうやう。」

「今一ッ大切なものは。」

「公園の戀人は置ざりにして？」

と、云へば、ヤコブは思はず失笑したりしが、

「彼か、彼れも後から通運て送ることにしてある。」

斯くて打連れ宿を出て、朝またきの人通少なき町々を歩みて、程なく町はづれの城門をくへりぬ。

* * * * *

暮れては宿り、明けては行き、日敷積りて、漸くドナウ川の傍に着きぬ。此處よりは船に乗りて、愈
々明日の暮方までには、ウヰーンの町に辿り着く日どり、此處まで來れば、最早氣遣ふともなければ、
夜船は眺めなし、此宵一夜を此處に明して、翌日の早出の船に乗らんと云ふ、ヤコブの意に任せ、或
旅宿に投下ぬ。

古郷近くなりては、心自然と勇み立ち、二人して楽しく夕餉の酒くみかはし、程なくそれも濟みて、
廊下の長椅子にもたれ、庭の風景を眺め、餘念なく話し居る内にヤコブは熟々余が顔を眺めて。

「つかぬと聞く様であるか、貴公は全く彼のアウレリー女を愛して居るのか。」

餘りかけ隔てたる言葉の云ひ出しに、余は一寸應對に窮したりしが、元より寸時も貴女の事は余が胸
を離れねば、

「眞實 私に愛して居ります。」

「譬へ 彼の女が位高き貴女でなくとも。」

「左様などには一向構ひませぬが、何故又其様なことをお聞きなされませぬか。」

「否や 別に仔細もなし、只聞て見たばかりのこと。」

と、空欄して煙草くゆらし居るに、余は譯を聞かんとする機会を失ふて、暫時低頭し居れば。

「翌朝後れてはならぬ、床に就うではないか。」

と、云ひつゝ先に立ちて行くに、いよゝ詮方なく、余も従ひ伏床に行きぬ。

暫時は今のヤコブの言葉を探り返して、何故斯る問を起せしかと、熟々考へ試たれど、如何にしても其譯を思ひ出ると能はず、終には晝間の勞れに、前後も知らず寝入りぬ。

翌朝余が起き出でたる頃には、ヤコブは已に食卓に倚りて、珈琲を飲み居たりしが、余が起き出たるを見て、

「最早船出に間もないのと、早く仕度をせぬか。」

と、云ふに余は驚きて、顔洗ふもそこゝにして、急ぎヤコブの傍に至れば、已に朝餉机の上に並び、

ヤコブは半ば食ひ終り居るに、余も直ちに箸を取りて、食事に就きぬ。

後れぬ様にて、漸々のとに食事を濟ませば、宿の男來りて、

「最早船が出ます。」

と、告ぐるに急ぎ余等は河邊に出て待ち居る、船にと乗り移りぬ。

暫く待てども、船の出る景色もせぬに、余は不審みながら、船頭に其譯を問へば、

「今二人お乗りになる方がござりまする。」

と、空欄して取合はぬに、余は少し腹立しく、尙も云ひかゝらんとする時、ヤコブは竊に余が袖を叩いて、

「向ふを見ろ。」

と、云ふに、指さす方を見れば、黒の上着に、蝦色の袴衣、服装は鄙びて、左までにもなけれど、顔色白く愛らしき乙女。丈低きに、並より長き黒の衣服着て、髭長く生やしたる、牧師らしき男と打連れ、其後より、一人の年老ひたる男と、一人の年若き丈高き男と、従ひ来るを見たり。船頭もそれを見たるかして、

「それ見えた。」

と、云ひつゝ、堅く結び付けある繩を解さかゝるに、諸は彼れが此船の乗合かど、尙よく見れば、如何に、後より従ひ来る二人は、何時ぞや彼の古城にて、余を殺さんと伺ひ寄りし老人と、余を援

けたる少年なるに、余は思はず身を震はして、ヤコブの後に隠れば、ヤコブは又余が隠れたるを不思議に思ふて小聲に。

『何故隠れるのか。』

と、問へど余は尙呼吸を殺して、隠れ居る間に娘と牧師らしき男は、船に乗り移りしが、他の二人は岡に立ちて、頻りに牧師らしき男に挨拶して居たり。

『それ出しますぞ。』

と、云ふ船頭の一聲に、船は岸を離れて川中に浮びぬ、余はホッと吐息つきて、胸がすりながら、顔を出せば、ヤコブは尙不審顔に、

『如何した譯で、其の様に恐かるのだ、唇の色が青くなつて居るが。』

『あれは私を殺うとした老爺でござります。』

『エッ』

と、云ひしヤコブよりも、傍に聞き居たる牧師らしき男は、尙驚いたる風にて、我が顔をつくと、眺め、

『お談話の途中で、他から口を出すは誠に失禮でござりまするが、彼の者が貴公を殺さうと致した

と、は、何云ふ譯でござりますか。』

と、丁寧に訪ひかくるに、余は古城にてありし次第を委細く話し聞かすれば、其男は次第に笑を含みて、應て余が言葉の途切れるを待ちて、

『は、成程、それでは貴公は、胡弓弾だな、』

と、人の熱心なる談話を、笑ひながら聞くのみか、急に言葉遣ひさへ應揚にありたれば、余は少しもツツして、

『胡弓も弾とますが、それが如何しました。』

と、辭氣鋭く云ひ放てど、相手は平氣にて、

『それで思ひ當ることがある、が、併しそれは途方もない間違ひぢやぞ。成程あの城は古い城ではあるが、決して怪しい處でもなければ、魔界でもあひ、彼れはウヰーの貴族の別荘で、殿様が秋から冬にかけて狩にお出になる處ぢや、今の老爺はあの城の番人で、私は彼の城の直ぐ裏に居る牧師で、殿様のお滞在中、日曜日に召されて、説教をしたから、彼老爺ともよく知つて居るが、過る日殿様の姫君が、羅馬府に御出になる途中、お立寄になつて、斯様くの男が後から来るから、能く勞はつて留めて置き、歸路に寄るまで決して逃がしてはならぬとの仰で、其通りにして

置いたに、或日のと、何處からか手紙が来て、それを見てから、逃け出しさうな風であつた故、逃がしては濟まぬと思ひ、部屋に鍵をかけて置たに今一所に居たあの老爺の息子が、何も譯を知らずに逃して遣つて、後て一方ならぬ心配をしたどの老爺の話であつたが、そのとに違ひあるま

と、説法句調にて滔々と辯しぬ、余は餘りの事の相違に、頓に返事も得せで、低頭を居れば、ヤコブは頻りに笑ひ居たりしが、誰に云ふともなく獨言の様に、

「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、知らぬとは兎角間違へ安いものだ。

と、云ふに、余も漸く力を得て、

「否、全くの處其時は恐ろしふとぞりやました。

と、云へば、牧師は余か言葉を受けて、

「それでなくとも、彼の城は何となく氣味の悪ひ處でござるよ。

と、之れにて、一先づ談話の終を告げて、他には只娘一人のみ誰も乗合せければ、暫時は音なかりしが、應てヤコブは隠囊より巻煙草取出して、余にも與へ自己も吹かしなから、牧師に向ひ、
「時に貴公は何方へお出になりますか。

と、問へば牧師は讀みかけたる書物を閉ち、目鏡をはづして、

「私か、私は今云ふたウヰーンの殿様の元まで乗るのぢや。

「何を宗旨上の御用で。

「左様、宗旨上と云へば、宗旨上のとぢやが、お目出度とぢや。

「御目出度とどは。

「此度その邸の姫君が、グイトとか云ふ、これも貴族で、書を上手におかきになる方と、御婚禮になる故、その式に連なる様との仰で、參るのぢや。

「成程、左様な譯で。

今迄船首に居て、兩岸の景色を眺めながら、二人の話を聞き居たる余は、牧師が彼の姫君とグイトとの結婚の式に望む爲めに行くと、云ふに、ハッと驚きて、後ろを振りかへり、委しく事の次第を聞かばやと思ひしに、又書物を開きて、熱心に讀み居るに、それを妨ぐるも氣の毒と、其儘に止みて、尙兩岸の風景を眺むるに、水濼々と流る、川の、左右は葡萄棚高く、壘々たる實は、今を盛りと重たげにさがり、處々に立木の影倒さまに映して、船は泛々として、木の間をくぐる、其景色類なし。今は又萬事を忘れて、直ちに胡弓を取り、處に合ふたる「ドナウ河」の一曲を弾き出しぬ。

其聲瀏漉と、流るゝ水に響き、餘音爛々として遠く絶えざれば、牧師は書物を伏せて聞きとれ、ヤコブは船端を叩いて調子を取り、殊更此時まで、一言も云はで、片隅にすはり居たる乙女は感に堪えてか、前にに下り出で、余が糸を押ゆる手を眺めて餘念なし。暫くしてそれを終れば、牧師は急に氣の付たる様に、目鏡はづしてヤコブに向ひ、

「聞きしに優ざる、お手際でござるナ。」

と、云へば、ヤコブは流れに浸し居たる手を上げて、手巾にて拭きながら、

「左様、中々巧みに彈きます。」

余れは其問答をさかぬものゝ如く、船先を下りて一同の傍に来るに、牧師は時計を出し眺めて、

「最早十二時になつた。」

と、云ひつゝ、傍の革靴引寄せて、中より取出すは、鐘詰、焼パン、燻肉等、數多く其處に並べ、片隅の乙女を振り返り見て、

「何故其様に黙つて居るのか、何も遠慮することはない、晝飯を食はぬか。」

と、云ふて、又余等に向ひ、

「貴公方は如何ぢや。用意もあらうけれど。」

と、云へば、ヤコブは後に片寄せ置きたる 四本のビールを取出しながら、

「有難うござりますが、私等の用意は此處にあります。」

と、結ひたる繩を解きにかゝれば、牧師は驚きたる様にて、

「何ぢや、ビールが晝飯ぢや、若い御方はそれぢやから困る。酒も少しは好が、飯の代りに飲むな

と、は途方もないとぢや、此處に食物が澤山とあるを僥倖、其様なものは止にして、遠慮なくお食なさる。」

「ナアニこれにて能ござります。」

「否や、好くない、身體の爲めに悪い、苟も神から頂いた身體を、其様なとして傷つけるからよくない、サア之れを食ふて、酒は少しになされ。」

と、如何に云ふても承知ねは、ヤコブも終に我を折り、二人にて二本に止め置き、残りの二本を恨めし氣に、傍に推し遣り、糊むるゝまゝに少しも遠慮せず、食ひ初むる余等の權幕に恐れてか、乙女は兎角遠慮して箸を出しかぬるを、余は氣の毒に思ひて、肉を皿に盛りて、乙女の前に進め、

「サア 遠慮せずにお食なさい。」

と、云へば、ヤコブは醫の邊をづねりて、

「コレく、人の物で義理をして居るてはないか。

と、云ふに、余もハッと思ふたれど、今更云ひ譯も出来ねば、聞ぬ風にて、尙も乙女に向ひ。

「お前さんは何處へ行くのか。

と、問へど、只おもはゆけに、頭を下げて何ども云はぬを牧師は見て

「これは、先刻の老爺の娘ぢやが、此度お姫様の元に長年使はれて居た腰元がお暇が出るので、其代りに上るのぢや。皆様も知つて居るであらうが、彼の御内に上る腰元は、御氣にさへ入れば、此上もない僥倖で、細ての禮式から、學問遊藝、女の道一通は教えてくたされて、衣服なども奇麗に、丸で當世の貴女達の様で、何時ぞやも門番の娘か上つて居て、立派な貴女となつて、レオンハルトト云ふ書師と結婚したし、此度のは門番の姪で、あからくお勤めして居て、最早年頃になつた故、外に嫁に遣ふとか云ふので、お暇か出て、其跡に之れが上るのぢやが、實に其方は幸福者ぢやぞ。

と、余に云ふのか、娘に云ふて聞かせるのか、物知り顔に辯しぬ。

此話談の中途より、ヤコブは横になりて、暫時は生返答して居たりしが、應て應答を爲すものは余一人になりしが、今見れば前後も知らず寐入り居るに、起し呉れんとする余が手を、牧師は止めて。

「起さぬでも好いは、折角眠つて居るものを、私等も腹がよくなつた故か、少し眠くなつた様ぢや。と、コロリと其處に倒れしが、又直に半身起して、娘の方を向き、

「朝が早かつたから、其方も眠かる、誰も遠慮な人は居ぬ、一眠するか好い。と、又余が方に向ひ、

「貴公も一休み如何ぢや。

と、一人旦那ぶりて、彼是ど世話焼さぬ。

(十)

團圓

船先のドンと陸に當る響きに目を覺まして見れば、牧師もヤコブも、娘もはや起き上りて、仕度なし居るに、余も驚き、立上りて、脱ぎ置きたる上衣を着て、後れしと船を下りぬ。

此處よりは程遠からねば、打連れて四人歩みながら、ウヰーリンの町に出で本通りを真直ぐに、應てそれも通りぬけて、街道を右手に、彼の屋敷の前に至れば、門前の松の青葉、御影石の石壇、在りし古昔に變らぬを、流石に余は這入り兼ねて在るに、牧師は娘を伴ひて門内に進む後より、ヤコブも行か

んどして余を顧み、

『私は此處にレオンハルド先生が来て居るはづて、一寸あつて来るから、又逃げてはいかぬぞ。』と、笑ひながら云ひつゝ、石壇を登り行きぬ。

余は一人取残されて、尙更進み入るべき様なく、暫時佇止み居たりしが、不圖住みなれし練瓦作りの家のを思ひ出して、古昔の儘にあるか一見せばやど、駕かづら這ひ纏ふたる塀際を傳ふて、屋敷の裏手に廻はり、應て其家に至り、戸を推し開きて内に這入れば、收税の帳簿は机の上に廣げたるまゝに、寢臺、上靴、例の赤き寢衣さへ、片側の壁にかけてあり。餘は余か去りし後に、住む人なくてありしかと思ふに、爰に不思議なるは、桂時計のセコンドは、今も尙動いて、正しき時を示しぬるにぞ、稍感ふて、尙彼方此方見廻はす内に、外の方より這入来る足音、驚きながら振り返る余よりも、尙驚ける様にて突立ち居る、年の頃六十近き老爺、直ちに進み來りて、余が襟髪を攫み、

『ウヌ、盗賊だな。』

『否や、盗賊ではない。』

『盗賊でないもよく出來た。それでは何故人の留守に這入つた。』

『私は以前此内に居た者で、今歸つて來た處だ。』

『否や、其手は喰はぬ、盗賊に違ひない、サア束縛て警察に連れて行く。』

ど、何の様に云ひ譯しても承かぬに、余も少し腹立しくなりて、

『エッ、盗賊でないぞ云ふに、貴様も解らぬな。』

ど、云ひつゝ、振放さんどすれば、老爺はいよく目をひき出して、

『何だ、此野郎手向ひするな。』

『貴様が云ひ譯しても承かぬからよ。』

『云ひ譯も糸瓜もあるものか。』

互に云ひ募る折から、又足音して、忙しく這入り来るを見れば、例の門番、

『ヤア、好く歸つて來て呉れた、サア早く此方へ來い。』

ど、何かは知らず、我が手を取りて、無理に引連れ行くを、老爺は見送りて口アングリ、余も様子知らねば、

『左様急かすとも行くから、手を放せ。』

ど、云へば、門番は頭を左右に振りて、

『否や放さぬ、又逃げ出して、人に餘計な氣を揉ませやうと思ふて。』

『モウ、逃げはせぬ、一體如何したのか。』

『何したも斯うしたもない、さつさと歩行け。』

と、云ひつゝ、引さずらるゝ様にして伴ひ行き、懸て邸の石壇を登りて、中門の處に来るや否や、余をホソと内に突遣りて、外より戸をピッじやり。

『それ渡したぞ。』

と、云ひ捨て、門番彼方へ駈け去る足音、余は途方に暮れて、暫時は動さも得せず在る折から、傍の木影より、白き衣、裳廣く着たる女の姿現はれて、

『お久しうござります。』

と、云ふに、余は思はず慄として、二足三足後へさがりながら、誰彼時の薄明にすかし見れば、日頃戀ひ慕ふ貴女なるに、再び驚きて尻込みすれば、貴女はツカ〜と近寄りて、

『何を其の様に遠慮なされます、サア此方へ御出なされませ。』

と、云ひつゝ、余が手を取りて導き行くに、余は夢もつかず現もつかず、引かゝる儘に従ひ行けば、木の間の細道をたどりて、懸て例の東屋へ至りぬ。

今も尙忘れぬ、過る日林檎の木の下にて見たる夢。所も變らぬ此東屋にて、人も同じ貴女と斯く差し

向ひ、今にも例の武官が劔を下げて躍り出ではせぬか、之れが夢やら彼れが眞實やら、差別に苦しみて、茫然として居れば、貴女は絹の手巾にて床几の塵を拂ひ、

『誰も来る氣遣ひはありませぬから、此處へおかけなされませ。』

と、云ふがまに〜腰をかくれば、貴女も其傍に坐りて、

『扱何からお話し致してよいか、先づおさ〜申度いのは、何故此處をおにげなされました。』

と、問ふに、急に答も出せず、漸くのとなにて、

『伊太利に参り度くなりなりました故、』

『それなればよいけれど、妾は又何ぞお氣に入らぬとでもあつて、お逃げなされたのかと思ひました。』

と、云ひつゝ、實はお姫様と、従妹が貴郎を此處へお連れ申した最初から、いとしい御方と思ふて居りましたに、お姫様はじめ皆様が、貴公の胡弓をお譽めになつて、永く此處に留めて置たいとの

お話しもありました矢先、丁度收税吏の老爺な失くなりなりました故、妾から叔父に心の丈をうちあけて、何卒貴公を其後にしてくださる様に頼ませましたも、何時までも貴公をお止め申し度い心願、これも協ふて、嬉れしやと思ふ折から、朝な〜庭の花輪。初めは誰人の仕業とも知れず、お姫様と二人で怪しみながら、拾ひ取りて、飾りにして居りましたが、何時ぞや獵の蹄ると、貴

公が手つから花輪をお渡しなされてから、初めて其主も知れ、一層うれしく、斯々とお姫様に話して、黽られたともござりましたが、其時の貴公のお口ぶり、妾の様な者でも、万更でも無い御様子故、妾の心を打開け様と思ふ折から、皆様の御供で旅へ出て留守になり、歸りて後舞踏會の夜半、妾があづかつて仕込んで居る腰元を手に差上げて、花を持って来ていたゞき、其折に妾の思ひを話さうと思ふて居たに、其心をお察しなく、花は持つて来てくださったれず。翌朝人に聞けば、何處へかお逃げなされて妾が見えぬとのと。其時の私の心の内、最早美麗しいお顔も、美妙なる胡弓の音も聞くことが出来ぬかと思ふて、世が嫌になる程でござりましたが、妾ばかりでなく、お姫様も貴公の胡弓を、最早聞くことが出来ぬと、一方ならず御残念がりてござりました。其後お姫様が殿様と伊太利の別荘にお出になつて、それから羅馬馬にお出になるに、後から今度お姫様の婿かねに定つたグイド様とオレンハルドをお呼び寄になる途中、不圖貴公に出合ふて、一所に連れ行くはづであつたが、何分前途が急ぐので、騎馬で行かねば間に合ふまいと、貴公は呉れくも宿屋の亭主に頼み、お二人は前にお立になつて、別荘に落ち合ひ、貴公のとは別荘の番人に云ひ置いて、羅馬馬にお遊びおされ、暫時御滞在の折から、殿様が急に御用が出来てお歸りになる歸路に、又別荘に立寄りになり、貴公をお連れになるはづの處、其前夜貴公は逃げてしまつたとの

と。確ど何處とは知れぬが、路々も羅馬馬に行くに云ふて居たから、大方羅馬馬である、羅馬馬なればレオンハルドの弟子とかい居るから、それに探させて、見出し次第連れて来る様に、云ふて遣るど、レオンハルドが手紙を出したとのと。これは後にてお姫様に聞きましたか、其前一度お姫様からお手紙が参つて、貴公を見出して別荘にあつて置た、連れ歸つてから望み通り夫婦にして、貴公は永く此家の樂師にかゝる積り、樂しみにして待つて居よとの仰せ、妾はうれしく、直ぐとお姫様に御禮の手紙を出し、貴公にも差上げましたか、定めておうけどりになりましたらう。一譯を聞けば、不思議にもあり、うれしくもあり。余は未だ夢の中にさまよふ如く、碌にうけ答へも出来ず、

「ハイ頂きました。」

と、漸くのこにて云へば、

「アレ、未だ其の様な六ヶ敷物の被仰かた、此れからは何卒御遠慮をなさらずに、と、云ひつゝニコリ笑ふ顔、古昔に替らず愛らし。」

「それでは貴女は、羅馬にはお出にはならぬので。」

「否、妾は参りは致しませぬ。」

「道理で、

と、余は獨言の様に云へば、直ちに聞き咎めて

「何、道理でござりますか。

と、問ふ故、羅馬府にて在りし次第を話せば、アウレリーも笑ふて話す彼の貴女と腰元との話を聞くに、矢張りアウレリーの貴族にはあれど、至て高慢の人にて、又腰元は不都合のとありて、此家は暇になりしを、伊太利語を遣ふ故、彼の貴女に伴はれて至りしものなりとのと。

尙種々話し合ふて、アウレリーの身の上を聞くに、余が貴女と見しは誤り、實は門番の姪なれど、少き折より此家に使はれ、船の中にて牧師の話せし如く、一方ならず姫君の氣に入りて、衣服飾りなど、余のみならず、誰が見ても貴女と見ゆる迄に着飾らせて、誰か前に出すも耻かしからぬ身の、如何なる見處ありてか、余に心を寄せぬ。譬へ余が思ひし通り位高き貴女でなくとも、余が慕ふ心は如何て變るべき。

折から母屋の方にて起る音樂の響きに、アウレリーは立上りて、

「何時まで此處に居ても、話しは盡させぬ、彼處へ參つて、皆様にお目通りなされませ。

と、云ふに、今更耻かしけれど、詮方なければ伴はれて、廣庭の方に至れば、其處に食卓並べて、美

酒佳肴らうたかく、主公を初め、姫君、クイド、レオンハルド、ヤコブ、牧師、最初余を伴ひ來りし貴女、門番、腰元等、一同居並び、傍には年若き男女の一群、各樂器を手にして、樂を奏し居たりしが、余等が近寄るを見て、一同「萬歳」と、呼ぶに、愈々恐けて進みかぬるを、レオンハルドは立て、余が傍に來り、手を取りて主公の前に立たすれば、主公は笑ひを合くみて、

「今日から邸の樂師に抱へるから、其積りで………彼れは配下の音樂學校の小供ぢやが、此れから其方の教を受けねばならぬ。

と、云ひつゝ、傍の一群を指さしぬ。

* * * * *

其翌々日、姫君がクイドと結婚すると同時に、余もアウレリーと借老の契を結びぬ。年頃のなまけものも、慈は身を授くる膝に濡れず、胡弓の糸に幸運を引き寄せて、見事立身の道を開くのみか、夢にまで慕ひし女を妻となしぬ。古郷の父之を聞がは、如何に喜ぶべきか。

なまけもの終

世界文庫

毎月二回發
毎冊密圖入
洋裝美本

正價

一冊(大判百六十頁)拾五錢〇六冊前金八拾五錢〇十
二冊前金壹圓六拾錢〇廿四冊前金三圓拾錢〇郵税一
冊六錢

(本書目次)

亞非利加探險者スタンレー氏原著 矢部五洲君譯述

自第壹編 至第六編 閩黑亞非利加 全六冊

世界未曾有の大冒險者スタンレー氏、深く亞非利加内地に入り、
食人殘忍の蠻族に接し、摩羅獅の極端な探り、屢々死して、屢々
蘇す。當時氏の一舉手一投足の消息は、世界各國に電報せられ、
一世の耳目を惹きつけ、幸にして穿出度英國に歸るや、其の實
踐したる所を著して、世界の大喝采を博せしもの、即ち本書な
り、本館之を譯して、發刊せし以來、非常の歡迎を受く、其怪奇
壯絶天下の珍事たるは、贅言を俟たざるなり。
英國ヘスチング、マルクハム氏原著 幸田露伴君譯述

第七編 大海 全一冊

開羅亞非利加と相俟つて、水陸冒險に於ける、世界の壯觀を極む
るものは、本書大海なり。英國海軍アルト、艦長、大佐ヘスチ
ング、マルクハム公が、原文風に於て歐洲に蘇り、抑も一千八百
七十五年英國に於てアルト、艦長に於て歐洲に蘇り、抑も一千八百
前人未だ曾て踏破せざる、全地球極北の氷海に大冒險を試みん
するの大家、如何に彼等が世界極北の氷海に大冒險を試みん
揚するや、寒心骨絶すべき悲境、拍手大驚すべき、快事、譯者
鐵筆敏腕によりて、更に一段の大精彩あり。時勢然として冒險

を眺るの今日豈に此書の精讀を怠るべけんや。
露國レチ、トルストイ伯原著 田山花袋君譯述

第八編 コサック 兵 全一冊

高加索の北、露領の最南端、一國あり、「コサック」州といふ、多
く美人を産す、世界第一の州に送られしもの、大將軍の盟を兵馬
ク一人防衛の爲めこの州に送られたるもの、大將軍の盟を兵馬
世に傳へたる大詩人なり、而して其作「コサック」兵は實にこの
消息を陳べて、神來の詩想を婉麗なる筆に描出したるものなり
道途に於て、忽ちにして砲聲、忽ちにして美人、忽ちにして葡萄園下の
首の妙あり

西班牙セルバンテス氏著 松居松葉君譯述

第九編 鈍機翁冒險譚 全貳冊

英國の大批評家、所謂「最高なる天才が作り爲したるもの、隨一」
として、其名全世界に高く、殆んど三百年以前にありてすら、出
版後一年を経ずして三版を累り十年にして八版に至り、英國のみ
にてもその翻譯十回に及ばんとする世界の一大奇書「鈍機翁」は
今や松居松葉子の筆によりて諸君の目前に現はれんとす。蓋しこ
の書は變幻奇怪鬼神離り妖魔舞をこる四遊記を讀むが如く、勇武
剛健長蛇を斬り大軍を破るさる水滸傳と相似たり、その縱横の
詭譎忽地人をして頭を解かしむるは三馬一丸に勝り、この纏綿た
る情婦人をして腸を断たしむるは琵琶行想夫戀も遜色あるべし。
想ふに讀者一度この書を讀めば、再讀三讀、幾讀を重ねて趣味い
よく深く、實に消の閑好伴位たらん。

慶應義塾大學卒業法律學士高橋雄峯君譯述
自拾壹編 至拾三編 絶島漂流記 全三冊

世若し一大奇絶の事あらばロビンソン 絶島漂流記は奇絶なるは
なく世若し一大冒險の事あらばロビンソン 絶島漂流記は奇絶なるは
冒險なるはあらばロビンソン 絶島漂流記は奇絶なるは
孤島に漂着し幾十年の間或は鰐魚を食し或は蠍を食し或は蛇を食し
死に絶えし生かす絶望の境に絶望の境に絶望の境に絶望の境に絶望の境に
假名を施し行文亦平易なり而して譯文の妙は書中の奇絶と相映し
て一段の光彩を放たんと致して江湖の一讀を傾けし

魯國トオストイ伯原著 内田不知庵主人譯述

第十編 全壹冊

魯國の文豪トオストイ伯が傑作中の傑作にして最も緻密なる夫婦
の情愛を描きて眞正なる愛、人生の至樂の何たるを示し一樺筆師社
會を喝破して醇厚なる人生の福利を教へ懷疑社會の岐路に彷徨せ
る妙齡女子の指針を示し世間普通の戀愛小説を打破して則ち一面
生を開く純潔清麗家庭の讀本として無比の絶好小説なり

英國ライダー、ハッガード氏著 宮井安吉君譯述

第十編 大寶窟 全貳冊

ライダー、ハッガードは當今英國の文壇に於て有数の偉物にして
其の傑作の一を冒險小説「大寶窟」とす其の麗き世に出づるや
諸新聞雜誌争ふて其の脚色の奇き文章の妙を稱し或は其の辭藻さ
るなは是に於て英人謂ふ米人謂ふ英人謂ふを各各國人謂ふ論議さ
るるに於てライダー、ハッガードは五百部を撰して猶ほその不足
を感するに至る謂つべし偉なりと稱す中流の士謂ふは其の不足
ライダーあり美人あり財寶あり魔法あり金を鑄り沙漠
去りて峰を頂く山來り奇絶の妖嬈化して金冠の王となり流血槽を

深す戰亂事て明珠をなす時現はれ血縁の古圖三百年前の屍骨
日輪輝け白銀神像化石古金尊像と出で、愈々奇絶の伏魔の妙術
者をして懸絶、喉あらさらしむ卯の花庵今之を譯し併に世に
紹介す吁知れ四千萬の兄弟此の「大寶窟」を讀まずんば未だ冒險の
奇小説の美を嘗るに足らざるべし

獨逸カイヘンドルツフ伯原著 阪田霧山人譯述

第十編 なまけの全一冊

獨逸文壇有数の詩人カイヘンドルツフ男が幽遠なる詩想を幽麗な
る筆を以て、幽き山出せる「なまけ」の一趣向斬新靈妙神妙不
可思議師となり收税吏となり道を失ふて友を得、友を失ふて金
を得古城に身命を危くして、公園に名譽を博し、貴女に奪われ
て難馬を去り、盜工に伴はれて維納に知り、結局身命を助けて
戀人と偕老の契を遂ぐ、其間密かになまけの、實相を穿ちて、或
は空想に神を飛はせ、或は夢現に魂を迷はすなど、叙し去り叙し
來て餘す處なく、滑稽西海の中に、自然風率の意を含めて、樞機
無盡に寫し出せる好小説、三伏の炎熱身を滑らすの折から、一本
を求めて慈下に縋き給は、一讀妙味愈深く、以て半日の暑を
忘るに足る可し

英國ロバート、ルネスタチンソン氏原著 卯の花巷主人譯

第十編 島 全一冊

英國に於て冒險小説を以て嗜る者上下四百年唯三人曰テ「ロバート」
ハッガード曰「ルネスタチンソン」、アプメーの漂流記ハッガードの大寶
窟本館譯に之を世に紹介す今又ルネスタチンソンが傑作寶窟を得て江
湖に問ふ我世界文壇の面目は是乎大に具はれりと言ふべし此書讀
を以て經さし血を以て緯とし硝煙漢々劍光閃々絶えて粉脂の氣さ
く楚腰の影なく而かも行文の快脚色の壯麗者をして肉動き骨鳴ら
しむ尙武の士人海國の男兒此書を捨て、又何の書を讀まんとする
今や妖雲東洋の天を蔽ひ大兵雲の如く胡城を壓す吁我同胞同く小
説を讀まば何ぞ遺恨壯絶の篇を讀んで斗如の毛膜を養はざる

巖谷湊山人編 每月二回發兌

日本昔噺

一昔々名文庫 全部十二卷洋裝 每編一冊五錢六分 正價一冊五錢七分 十錢每郵稅二錢

本書目次

第一編 桃太郎の井 第五編 大舌切雀山 第九編 かちやや山
第二編 玉の井 第六編 花江切 第十編 文福茶釜
第三編 猿蟹合戦 第七編 倭花江切 第十一編 物臭太郎
第四編 松山鏡 第八編 藤太爺山雀 第十二編 物臭太郎

二昔日本編

玉の井

一昔日本編

桃太郎

文學士坪内雄藏先生序文 大和田建樹先生唱歌 尾崎紅葉山人唱歌 全一冊洋裝讀切美本 正價金五錢郵稅二錢 八月一日發兌

世界文庫

第五拾七編 第三拾七回 毎月三回発行

著原 フォルティシモイア 侍男 逸橋

譯抄 火山 霧田 坂

なまけもの

全

東京博文館出版

101266-000-5

43-241

なまけもの

アイヘンドルッフ/著

[M27?]

DBY-0595

